

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VII-3

1980

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VII-3

1980

滋賀県教育委員会
財団 滋賀県文化財保護協会

はじめに

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、はや七年を迎え、ますます工事側と調査側の調整が困難をきわめること再々となっている。

本書はこの困難さのなかでも、特に人材と時間の不足に反して、激増する調査資料を公開すべくまとめたもので、古代近江を考えるうえで新たな知見が数多く明らかにされている。

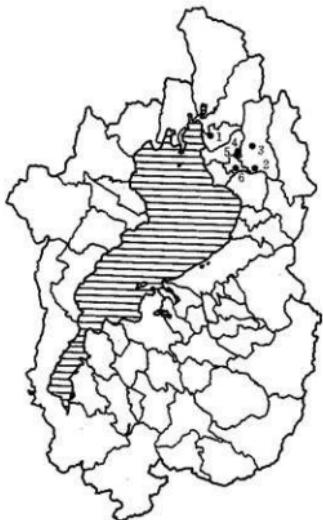
本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長 沢 悠光

例　　言

1. 本報告書は、昭和54年度の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖北地区（伊香郡・東浅井郡）の調査成果を収録したものである。
2. 本調査は、滋賀県農林部耕地建設課からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師 田中勝弘の指導のもとに、(財)滋賀県文化財保護協会嘱託調査員 林 純、同 中川通志が担当した。
4. 本報告書は田中勝弘が執筆し、編集した。ただし、北野遺跡のロ、位置と環境、ハ、調査の結果のうち I. 東部地区については関西学院大学考古学研究会々員の諸氏が、また五村遺跡のII. 遺物の項のみは林 純が執筆した。



1. 妙光庵遺跡、 2. 路久呂坊遺跡、 3. 北野遺跡、
4. 伊部遺跡、 5. 留目遺跡、 6. 五村遺跡、

目 次

序文

例言

1. はじめに.....	1
2. 伊香郡高月町妙光庵遺跡	
イ. はじめに.....	2
ロ. 位置と環境.....	2
ハ. 調査の経過.....	2
ニ. 調査の結果.....	2
I. 遺構.....	2
II. 遺物.....	2
ホ. おわりに.....	4
3. 東浅井郡浅井町路久呂坊遺跡	
イ. はじめに.....	6
ロ. 位置と環境.....	6
ハ. 調査の経過.....	6
ニ. 調査の結果.....	6
I. 遺構.....	6
II. 遺物.....	8
ホ. まとめ.....	18
ヘ. おわりに.....	19
4. 東浅井郡浅井町北野遺跡	
イ. はじめに.....	20
ロ. 位置と環境.....	20

ハ. 調査の経過	25
ニ. 調査の結果	26
I. 東部地区	26
II. 西部地区	44
ホ. おわりに	50

5. 東浅井郡湖北町伊部遺跡

イ. はじめに	51
ロ. 位置と環境	51
ハ. 調査の経過	51
ニ. 調査の結果	51
I. 遺構	51
II. 遺物	51
ホ. まとめ	58
ヘ. おわりに	58

6. 東浅井郡湖北町留目遺跡

イ. はじめに	59
ロ. 位置と環境	59
ハ. 調査の経過	59
ニ. 調査の結果	59
I. 遺構	59
1. 堀大屋敷地区	59
2. 松橋地区	63
II. 遺物	74
1. 堀大屋敷地区	74
2. 松橋地区	79
ホ. まとめ	89
I. 堀大屋敷地区	89
II. 松橋地区	89

ヘ. おわりに	91
7. 東浅井郡虎姫町五村遺跡	
イ. はじめに	92
ロ. 位置と環境	92
ハ. 調査の経過	92
ニ. 調査の結果	92
Ⅰ. 遺構	92
Ⅱ. 遺物	95
ホ. おわりに	103
8. おわりに	113

挿 図 目 次

妙光庵遺跡

図1	妙光庵遺跡位置図	3
図2	付近地形図及び調査地区位置図	4
図3	S K出土土器実測図	5

路久呂坊遺跡

図1	路久呂坊遺跡位置図	7
図2	付近地形図及びトレンチ配置図	8
図3	遺構実測図	9 - 10
図4	出土遺物実測図(1)	13
図5	" (2)	14
図6	" (3)	15
図7	" (4)	16
図8	" (5)	17
図9	" (6)	18

北野遺跡

図1	北野遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	21
図2	地形断面図(図1A-B) 高さ:長さ=2:5	22
図3	条里地割分布図(1~3里内ののみ1町方格を記入)	23
図4	トレンチ配置図	26
図5	東部地区T1、T6、T32土層図	27
図6	T12遺構平面図	28
図7	T21遺構平面図	29
図8	SB1実測図	30
図9	SB2実測図	30
図10	B地区遺構平面図	31 - 32
図11	SB3実測図	33
図12	SB4実測図	34
図13	SB5実測図	34
図14	SB6実測図	35
図15	SK5(土塙墓)実測図	36

図16	※	縄文式土器実測図	38
図17	※	石斧実測図	38
図18	※	須恵器尖測図	40
図19	※	土師器実測図	41
図20	※	土師質皿実測図	41
図21	※	土塙墓内出土土器I（土師質皿）	41
図22	※	土塙墓内出土土器II	42
図23	※	西部地区L-M地区遺構平面図	44
図24	※	元天神地形測量図	45
図25	※	元天神遺構実測図	46
図26	※	出土大皿実測図(1)	48
図27	※	※ 小皿 ※ (2)	49

伊部遺跡

図1	伊部遺跡位置図	52	
図2	付近地形図及びトレンチ配置図	53 - 54	
図3	トレンチ1遺構及び遺物出土状況実測図	55	
図4	トレンチ1 S D出土遺物実測図(1)	56	
図5	※	(2)	57

留目遺跡

図1	留目遺跡位置図	60		
図2	付近地形図及び調査地区位置図	61 - 62		
図3	堀大屋敷地区遺構平面実測図	63		
図4	松橋地区遺構平面実測図	64		
図5	井戸跡(D1)実測図	65		
図6	〃	D9	〃	65
図7	〃	D11	〃	66
図8	〃	D5	〃	66
図9	〃	D4	〃	67
図10	〃	D7	〃	67
図11	〃	D8	〃	68
図12	〃	D10	〃	68
図13	〃	D12	〃	69
図14	〃	D13	〃	69
図15	〃	D14	〃	70
図16	〃	D17	〃	70

図17	"	"	D19	"	71
図18	"	"	D21	"	72
図19	"	"	堀大型敷地区出土遺物実測図(1)	75
図20	"	"	" (2)	76
図21	"	"	" (3)	77
図22	"	"	" (4)	78
図23	"	"	松橋地区土塙墓出土土器実測図(1)	81
図24	"	"	" (2)	82
図25	"	"	" (3)	83
図26	"	"	溝跡、ピット等出土遺物実測図(1)	85
図27	"	"	" (2)	86
図28	"	"	" (3)	87

五村遺跡

図1	五村遺跡位置図	93
図2	"付近地形図及びトレンチ配置図	94
図3	" 1号方形周溝墓実測図	105
図4	" 2・3号方形周溝墓実測図	106
図5	" 出土巴形銅器実測図	105
図6	" 出土土器実測図(1)	107
図7	" " (2)	108
図8	" " (3)	109
図9	" " (4)	
図10	" " (5)	111
図11	" 出土木製品実測図	112

図版目次

- 図版1 妙光庵遺跡 (上) 遺跡全景
(下) SK1
- 図版2 路久呂坊遺跡 (上) C区近景
(下) C区堆積出土状態
- 図版3 路久呂坊遺跡 (上) C区大型土壙群
(下) C区中央部近景
- 図版4 北野遺跡 (上) 東部地区遺跡近景
(下) 東部地区B区全景
- 図版5 北野遺跡 (上) 東部地区SB1
(下) 東部地区SB2
- 図版6 北野遺跡 (上) 東部地区SB3
(下) 東部地区SB4
- 図版7 北野遺跡 (上) 東部地区SB5
(下) 東部地区SB6
- 図版8 北野遺跡 (上) 東部地区SB7
(下) 東部地区SB8
- 図版9 北野遺跡 (上) 西部地区L-Mトレンチ全景
(下) 西部地区L-Mトレンチ部分
- 図版10 北野遺跡 (上) 西部地区遺物出土状態
(下) 西部地区尤天神区
- 図版11 留目遺跡 (上) 堀大屋敷地区全景
(下) 堀大屋敷地区落ち込み状遺構
- 図版12 留目遺跡 (上) 堀大屋敷地区大型土壙群
(下) 堀大屋敷地区ピット群
- 図版13 留目遺跡 (上) 松橋地区全景
(下) 松橋地区井戸跡
- 図版14 留目遺跡 (上) 松橋地区D9・D11
(下) 松橋地区D9
- 図版15 留目遺跡 (上) 松橋地区D11
(下) 松橋地区D5
- 図版16 留目遺跡 (上) 松橋地区M4
(下) 松橋地区D19
- 図版17 留目遺跡 (上) 松橋地区D14
(下) 松橋地区D4

- 图版18 留日遗跡 (上) 松橋地区D10
(下) 松橋地区D 8
- 图版19 留日遗跡 (上) 松橋地区D17・D21
(下) 松橋地区 D 7
- 图版20 五村遺跡 (上) 遺跡遠景
(下) B区方形周溝墓
- 图版21 五村遺跡 (上) C区方形周溝墓
(下) C区方形周溝墓
- 图版22 五村遺跡 (上) D区方形周溝墓
(下) 土器出土状態
- 图版23 五村遺跡 (上) 巴形銅器出土状態
(下) 梯子出土状態

1. はじめに

本年度の伊香・東浅井両郡内において県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象となった遺跡は、当初、高月町妙光庵遺跡、虎姫町五村遺跡、浅井町路久呂坊遺跡、湖北町留目遺跡の4遺跡であった。その後、浅井町北野地先において、古墓が存在すること、土器片の散布が見られること等の情報を得、湖北町伊部地先においては、ほ場整備工事による仮排水路掘削中に多量の土器類が出土したことにより、新たに2遺跡を追加調査することとなった。留目遺跡においても、当初予定範囲外において、土器類の散布することを知り、調査地区を追加するところとなった。従って、計6遺跡の発掘調査を実施し、本書に掲載した。

2. 伊香郡高月町妙光庵遺跡

イ. はじめに

妙光庵遺跡は、元亀年間に焼失したと伝える寺跡として周知されている。寺跡とされている所は、周囲より一段高い畠地となっている。この度計画されたほ場整備工事では、この畠地が削平され、周囲の田面の高さに合わせられるとのことであった。従って、事前に発掘調査を実施する必要が生じたのである。

調査は、(財)滋賀県文化財保護協会監修調査員 中川通士が担当し、整理調査については、滋賀県教育委員会文化財保護課技師 田中勝弘が行った。

ロ. 位置と環境(図1・2)

妙光庵遺跡は、伊香郡高月町磯野地先にある。賤ヶ岳から南に派生し、湖北平野と琵琶湖とを界する地盤状の山丘が磯野の集落に向かって舌状に派生してきている、その先端付近の平地に立地している。標高は凡そ103m辺りにあり、西に余呂川が南流し、東に小河川であるが赤川が流れてい、付近は底溝地帯を形成している。

磯野の集落に向かって張り出す山丘上や地盤状の山丘、また東の平地などに極めて多数の古墳が分布しており、当遺跡付近は、古墳時代にあっては、湖北の中心的な地域であったと言える。しかしそれ以外の遺跡については、周知されている遺跡が極めて希薄な地域である。今回の調査によって、平安時代の遺構、遺物のほかに、弥生時代前期のものが発見され、新たな歴史的環境を呈すことになったと言える。

ハ. 調査の経過

調査は、ほ場整備工事によって削平される当該地の畠地部分に限って実施することとした。当該地には、明治年間に、現在の村内の神社に移転されている祠がかつてあった場所があり、まずこれを検出することから着手した。次いで、これの周囲を掘下げることとした。

二. 調査の結果

I. 遺構

検出した遺構は、祠跡の区画を示す石列、平安時代以降の多数のビット群、溝跡、弥生時代の土壙などである。祠跡は、明治年間に、祠その物を村内の神社に移しており、旧地には石列が残るのみで、その区画を知るにすぎない。

多数のビットは、大半が規模の小さな物で、建物を思わせるような規則性はない。溝跡には、方形に巡るものなどがあるが、その性格は明らかでない。

弥生時代の土壙は1基のみで、 $2.5m \times 1.5m$ 程の梢円形を呈し、深さは30cmほどである。この土壙からは、表2個体分、塗1個体分が出土している。

II. 遺物(図3)



图1 妙光庵遺跡位置圖



図2 妙光寺遺跡付近地形図及び調査地区位置図

遺物には、平安時代を中心とする須恵器、土師器、灰釉陶器、綠釉陶器等があるが、ここでは土壤から一括出土した弥生時代の土器類についてのみ報告することとする。

壺型土器(上)口縁部の外反はさほど大きくなない。口縁部の高さは4.6cmで、頸部径12.3cmに対して、口縁部径16.7cmを計る。口縁端部は丸く納める。頸部には、削り出した凸帯が1条巡らされている。また、口縁部の中程よりやや上方に、径3mm程の円孔が穿たれている。白色の色調を呈した極めて軟質のものである。

壺型土器(下)茶褐色を呈し、良好な焼成を示す。口径21.4cmに対し、胴部の最大径20.9cmで、砲弾型のプロボーションを呈している。底部は7.8cmの平底のもので、胴部との接合点はないが、同一個体のもので、器高25cmほどに復元できる。口縁部は短く、さほど大きく外反しない。口縁端部は単純に終わる。頸部には竈描きの沈線が2条巡らされている。器壁の外面は全体に撫であるいは磨き調整しているが、体部の中程に刷毛目の調整痕が残る。

このほかに壺型土器の体部の破片で、別個体と考えられるものがあるが、器形は不明である。

ホ. オ わ り に

極めて狭い範囲の調査であったが、平安時代の遺構のほかに弥生時代の遺構の存在を知ることが出来た。弥生時代の土器からは3個体分の土器類が出土しているが、それらは前期に属するものであって、削りだし凸帯を持つ壺、竈描きの沈線をもつ壺等前期の中段階の特徴を持っている。湖北地方における弥生時代前期の遺跡は、湖

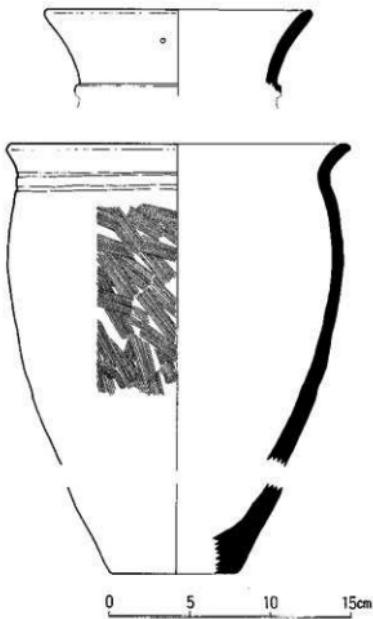


図3 炒光庵遺跡SK出土土器実測図

北町今地先のものが最北端であったが、今回の発見で更に北へ広がることとなった。中段階に遡るものとしては、長浜市川崎遺跡のものが知られていたのにすぎず、弥生文化の伊勢湾ルートからの伝波が極めて早く湖北地方の最奥部にまで達していたことが今回の調査で明らかにできたのである。

3. 東浅井郡浅井町路久呂坊遺跡

イ. はじめに

路久呂坊遺跡は、寺跡として周知されている遺跡である。又、事前の分布調査によつても、寺跡とされてゐる地点以外にも土器片の散布が認められた。ほ場整備工事範囲は周知遺跡を含み、土器片の散布範囲はその大半に及んでいた。従つて、発掘調査は工事範囲のほとんどを対象として実施することとした。

調査は、現地発掘調査を（財）滋賀県文化財保護協会嘱託調査員 中川通士が担当し、整理調査については、滋賀県教育委員会文化財保護課 技師 田中勝弘が行った。

ロ. 位置と環境（図1）

路久呂坊遺跡は、東浅井郡浅井町大路地先にある。鈴川本流の右岸、その支流である草野川の左岸に位置する大路の集落の東側の標高118m前後の平地に立地する。付近には、大路集落の周辺に、数か所の寺跡の伝承地がある。又、大路集落の西側では、昨年度に、古墳時代後期の集落跡が見つかっている。東側に北国脇往還道が通過しており、交通の要所ではあるが、草野川右岸、八島周辺に比べて、遺跡の分布は極めてくすくない。姉川と草野川に挟まれた地理的条件から、開発の遅れた地域であったようである。

ハ. 調査の経過（図2）

調査は、工事による田面の切り下げが計画されている部分にトレーニングを設定し、遺構や遺物包含層の有無を確認し、其の結果に基づいて、工事により遺跡が削除される部分を対象に発掘調査を実施することとした。トレーニング調査の結果、工事範囲の中程を中心に遺物の包含層や遺構の存在を確認した。遺物の包含層は、工事による影響がほとんどないと判断されたので、遺構を確認したC区に限り発掘調査を実施することとした。

二. 調査の結果（図3）

I. 遺構

掘立柱建物跡、小鐵冶跡、ピット群、溝跡などを検出している。

（掘立柱建物跡） 2間×2間で東柱を持つもの2棟を検出している。2棟は重複していて、立て替えられたもので、共にほぼ南北方向にあり、先行するものは4.5×4.3mの規模を持ち、後出のものは4.6×4.9mの規模を持つ。共に径30~70cmの円形の掘り方で、径20cm程度の柱痕を残す。

（小鐵冶跡） 掘立柱建物跡の東4m程のところで検出している。1.2×0.9mの不整形な横円形の掘り方で、深さ0.23mの土壤である。およそ45°の角度で掘り込み、底面は径70cmのフラット面となっている。土塙の南寄りで、塙底近くから、鉄鉢型の鉄塊が凹部を上にして出土した。同じ土塙内からは、土師器の皿、碗、灰釉の碗などの土器類、石塊なども出土している。土器類は、上部から落ち込んだような状況で出土している。

（ピット群） 大型の土塙も含んで極めて多数のピット群が検出されている。大型のものは東寄りに多く分布している。



図1 路久呂坊遺跡位置図 ($S = 1/25,000$)

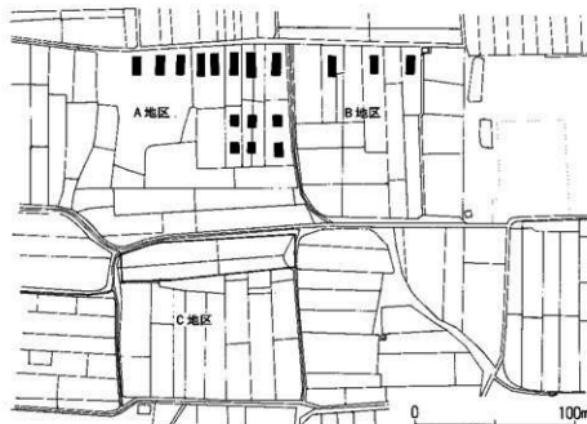


図2 路久呂坊遺跡付近地形図及びトレーンチ配置図

(溝跡) 調査区の南端で、幅20~30cm程の細いものを検出している。やや蛇行しながらもほぼ真っすぐに東西に伸び、調査区の西端でカーブして直角に北へ曲がる。北へは途切れながら6m程伸びて終わっている。高差はほとんど無く、深さは10cm前後である。

II. 遺 物 (図4~9)

土壙、ピット、包含層などから灰釉陶器、綠釉陶器、山茶碗、土師器、須恵器等が出土している。大半が平安時代後期のもので、一部須恵器類に奈良時代のものが見られる。

(SK 8) (図6-11~14) 須恵器の杯身と蓋が出土している。唯一奈良時代のものである。

蓋(11)は、口徑15.8cmの大型のもの。天井部は平坦で、屈折して口縁部に至る。つまみは中高であるが扁平で大ぶりのものである。口縁部には屈曲ではなく、端部は断面三角形状に小さく擴み出している。

杯身(12~14)は、口縁部の下端より内側に高台が付くものと直下に付くものとがある。前者には、口径に比べて器高の低いものがあり、後者には、口縁部が大きく開くものがある。高台の知れるものは、断面が長方形で、外方に踏んばっている。

(SK 3) (図6-1~3) 山茶碗、土師器が出土している。

山茶碗(1)は、断面三角形の高台を持つ碗形品。

土師器(2・3)は、4.1cmの円盤状の底部を持つ碗形品。外底部に糸切り痕は見られない。

(SK 5) (図6-4・5) 土師器の皿と碗が出土している。

碗(5)は、平底で、外底部の糸切り痕はない。

皿(4)は、口縁部が屈曲し端部を丸く肥厚させている。

(SK 9) (図5-28~38) 灰釉陶器、綠釉陶器、山茶碗、土師器の各種が出土している。

灰釉陶器は壺形土器(35)の口縁部の小片で、復元口徑9.4cmの規模で、口縁端部を上下に肥厚させ、面を取っている。綠釉陶器は、碗形品と思われるものの高台部分で、図示できなかったが、高台端部に段を持つ近江型の

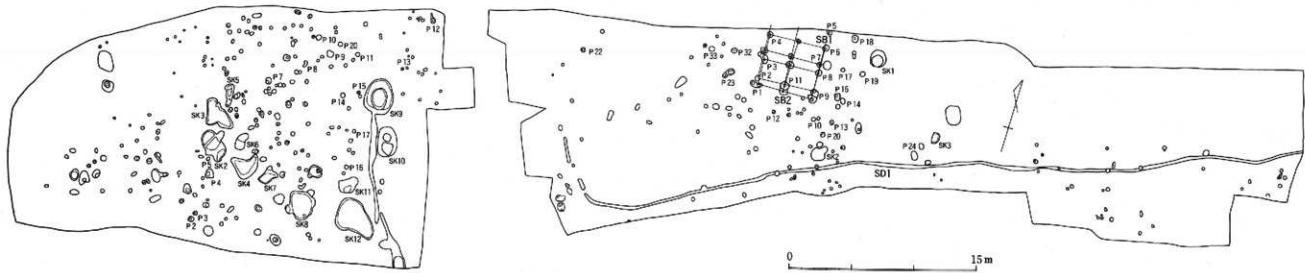


図3 路久呂坊遺跡遺構変遷図

ものと思われる。生地は白色で、釉は濃緑色を呈している。

山茶碗（28～34）は何れも碗形品と思われるもので、口縁部片では、端部を小さく外反させる。底部片では、三角形高台を持ち、外底面に糸切り痕を残すもの、幅の狭い三角形高台で、糸切り痕を残さないもの、長方形高台で、外反するものなどがある。

土師器（36～38）は、皿、高台付碗、無高台の碗がある。皿（36）は、口縁部が屈曲して、端部を上方に肥厚させるものである。高台付碗は（37）は、三角形状の高台を持つ底部片である。無高台（38）のものも底部片で、円盤状の平底である。糸切り痕はないようである。

（S K10）（図6-6～8）土師器の皿と山茶碗、灰釉陶器が出土している。

土師器の皿は、小片で図示できなかったが、S K5出土のものと同様の口縁端部をもつものである。

山茶碗（6・7）で高台部分を残すものでは、三角形状の底い高台を持ち、糸切り痕が明瞭に認められる。又、外底部に糸切り痕がのこる。

灰釉陶器（8）は碗形品で、口縁部を残すのみで、口縁端部が外反するものである。

（S K11）（図6-9～10）山茶器と土師器の羽釜が出土している。

山茶碗（9）は碗形品で、端部がやや内折する口縁部の破片である。

土師器の羽釜（10）は、三角形状の短い鉢を持つものである。

（S K12）（図4-1～42、図5-1～27）灰釉陶器、山茶碗、土師器などが出土している。

灰釉陶器には碗と壺がある。壺（5）は無釉であるが、形態的には灰釉陶器であろう。細頸の瓶形のもので、肩部が良く張っている。碗（7～9、20、21、36、42）は、底部片では、三角形高台の低いもので、糸切り痕を残すものがある。山茶碗のものと形態的には異なるところがない。口縁部片では、何れも口縁端部を僅かに外反させるもので、やはり山茶碗と形態的に異なるところはない。

山茶碗は何れも碗形品である。口縁部は何れも端部を僅かに外反させている。底部は、三角形あるいは台形の低い高台を持つ。高台端部に糸切り痕の残るものが多い。又、外底面に糸切り痕を持つものが多い。図上復元できたもの（13）では、口径17.4cm、器高5.3cm、高台径7.8cm、高台高0.5～0.9cmを計る。

土師器には皿、碗、羽釜がある。皿は、口縁部が屈曲し、その端部を上方に丸く肥厚させるもの（7～13）、口縁部が比較的大きく立ち上り、端部を大きく外反させるもの（18～20）、口縁部が単純に終わるもの（14）の3種類ある。前二者には規模の大小があるようである。碗（15～17）は、底部片では何れも平底であるが、1点は径4.6cmの円筒状に突出したものとなっており、他は単純な平底である。共に糸切り痕はなく、調整させている。口縁部片では、内済氣味に聞く口縁部の端部を僅かに外反させている。器壁外面に凸凹がある。羽釜（21～27）は、扁平な三角形状の鉢を持ち、口縁端部を内側に肥厚させて面を取る。内面には、口縁端部を除いて横方向の刷毛目痕が残っている。

（P 4）（図7-2）山茶碗の碗の口縁部片で、端部が綾をもって外反する。

（P 6）（図7-8）土師器の碗で、口縁部片、底部片とともに平底のものである。

（P 8）（図6-41～44）山茶碗と土師器である。

山茶碗（41～43）は口縁部片で、外反気味のものである。

土師器（44）は碗の底部で、平底のものである。

（P10）（図7-7）土師器の皿である。平底の底部を持つものと思われる。

（P11）（図6-45～47）山茶碗と土師器がある。

山茶碗（45）は碗の口縁部で、稜をもって外反する。

土師器（46・47）は平底となると思われるものの口縁部片である。

（P12）（図6-38~40）山茶碗と土師器がある

山茶碗の底部片（38）は、削りだし高台風である。口縁部（40）は稜をもって外反するものである。

土師器（39）は平底の碗の底部である。

（P13）（図6-48・49）山茶碗と土師器がある。

山茶碗（48）は碗の口縁部片で、外反せず内湾気味のもの。

土師器（49）は平底の皿である。

（P14）（図6-17~19）山茶碗の碗類である。底部片は台形状の低い高台を持つ。口縁部片は外反するものである。

（P15）（図6-27~35）灰釉陶器、山茶碗、土師器が出土している。

灰釉陶器（29）は碗形品の底部で、比較的高い高台を持つ。高台の端部は丸く納める。

山茶碗（28）は碗の口縁部片で、単純な端部である。

土師器は皿と碗がある。何れも平底のもので、糸切り痕は撫で消されている。碗（32-33）は、口径14.7~15.4cm、器高3.9cmの大型のもので、口縁部は直線的で、端部を玉縁状に肥厚させている。皿は2種ある。一つは（30・31）は、口径9.3cmに対し、器高2.3cmとやや深みのあるもので、口縁部の中程が肥厚する。厚手である。他（34）は、口径10.2cmに対し、器高1.9cmと浅いものである。口縁部は僅かに内湾し、単純に終わる。

（P16）（図7-19・20）

段皿（19）は口縁部が大きく外反している。

羽釜（20）は短い三角形の鈎と端部が肥厚して面を取る口縁部を持つ。

（P17）（図6-20~27）灰釉陶器、山茶碗、土師器等が出土している。

灰釉陶器（22）は、碗形品の口縁部片で、端部を大きく外反させている。

山茶碗（21）も碗形品の口縁部片で、端部は単純におわる。

土師器には、羽釜、皿、碗がある。羽釜（20）は口縁部片で、内面の端部下端が窪み、端部は窪んだ面を取る。内面に刷毛目痕がみられる。碗（25・26）は、底部片で、円筒状に突出した平底である。わずかに糸切りの痕跡を残すが、撫でて消している。皿は2種有り、一つ（23・24）は平底のもので、口縁部は単純である。他（28）は、口縁部が屈曲し、端部を上方に丸く肥厚させるものである。平底の外表面は、わずかに糸切り痕を残すが撫で消している。

（P18）（図7-6）灰釉の壺である。肩部が比較的良く張っている。

（P19）（図7-4）灰釉の懸かる碗の口縁部片である。端部は外反気味である。

（P22）（図7-1）山茶碗の口縁部片で、端部が稜をもって外反する。

（P23）（図7-10）平底の土師器の碗の底部片である。

（P26）（図7-5）灰釉の碗で、口縁部は内傾した後、端部を外反させる。

（P27）（図7-3）山茶碗の碗の底部片で、三角高台である。

（P29）（図6-50・51）山茶碗と土師器がある。

山茶碗（50）は碗の口縁部で、端部が外反する。

土師器（51）は平底のもの。

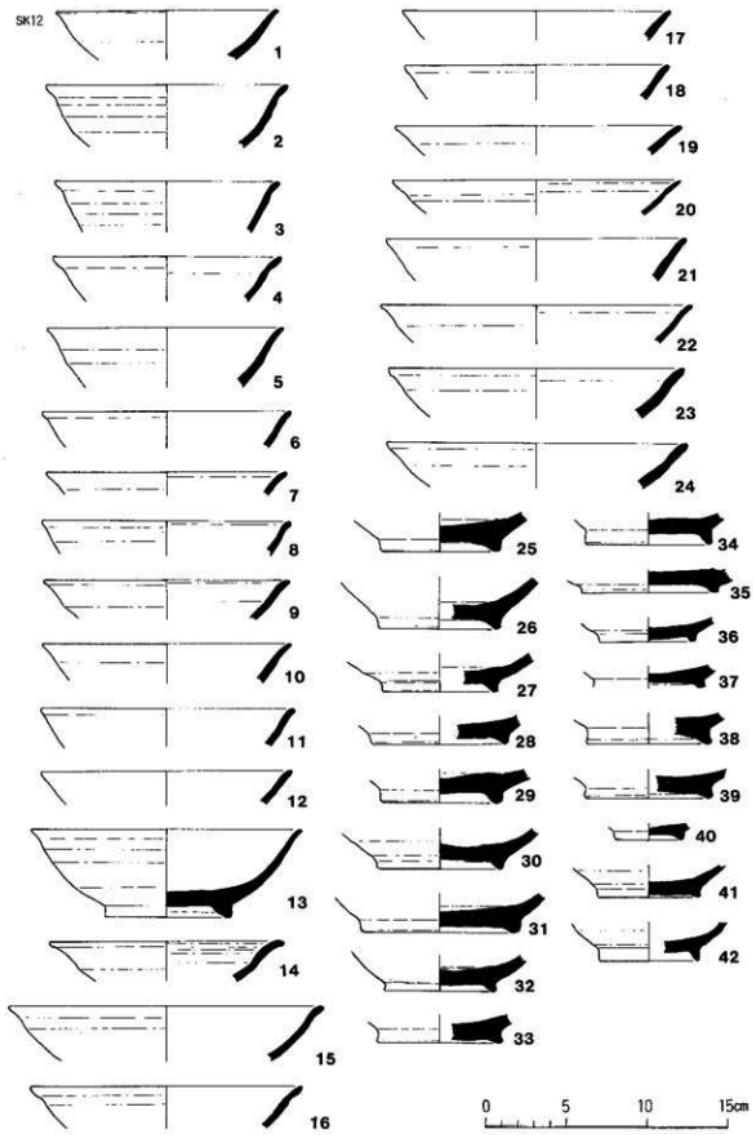


図4 路久呂坊遺跡出土遺物実測図(1)

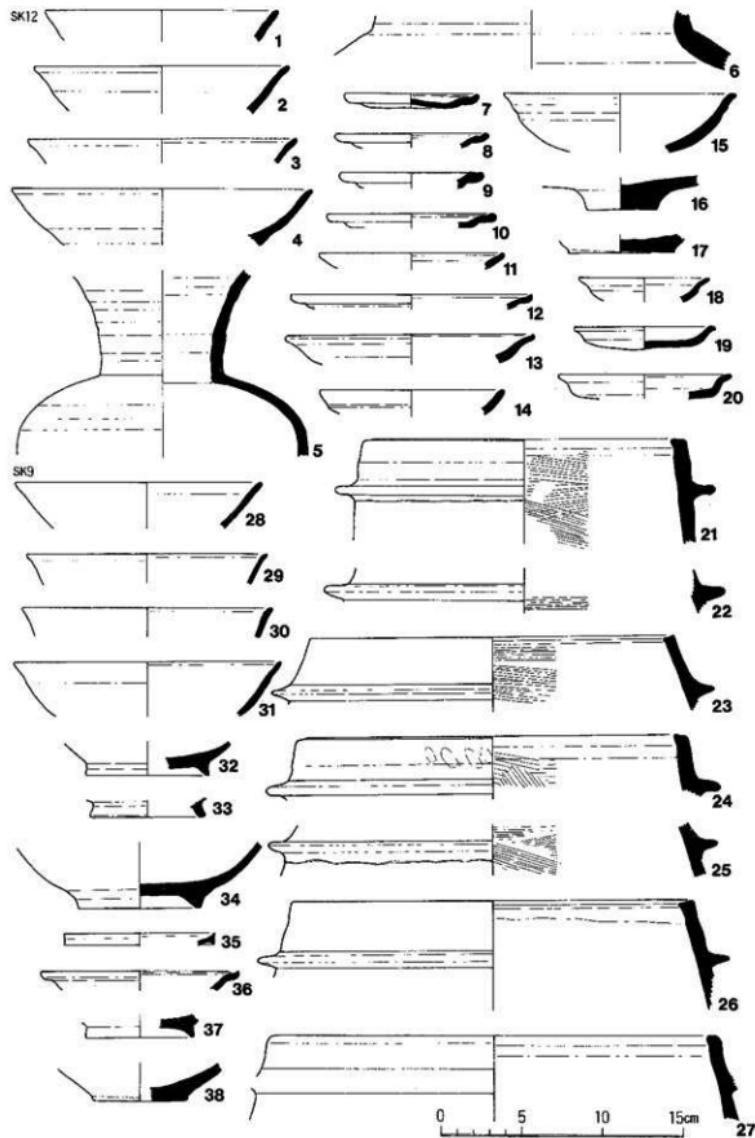


图5 路久吕坊遺跡出土遺物実測図(2)

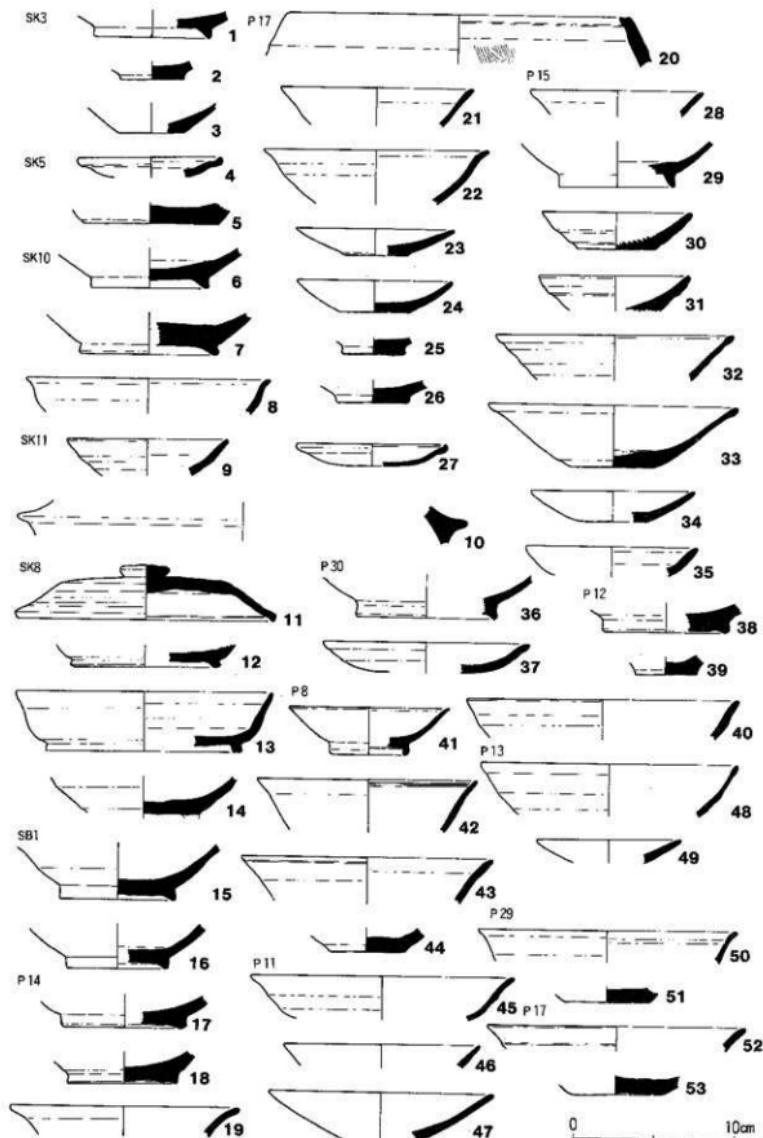


図6 路久呂坊遺跡出土遺物実測図(3)

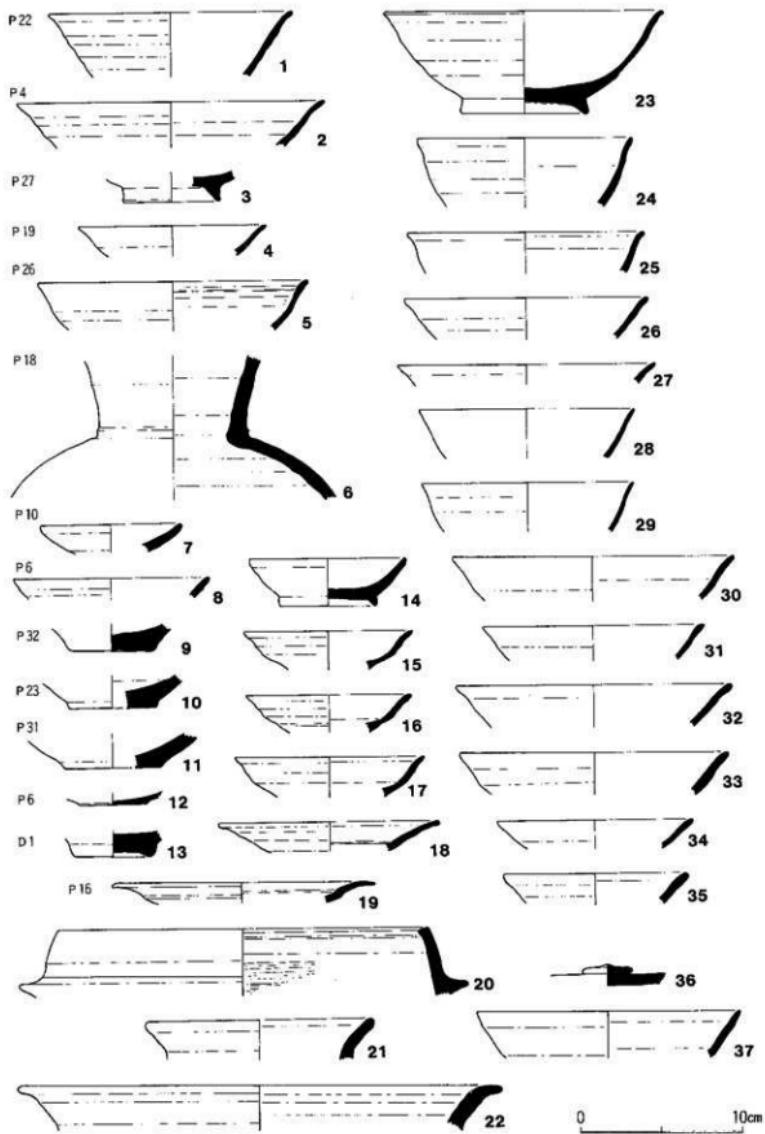


図7 路久呂坊遺跡出土遺物実測図(4)

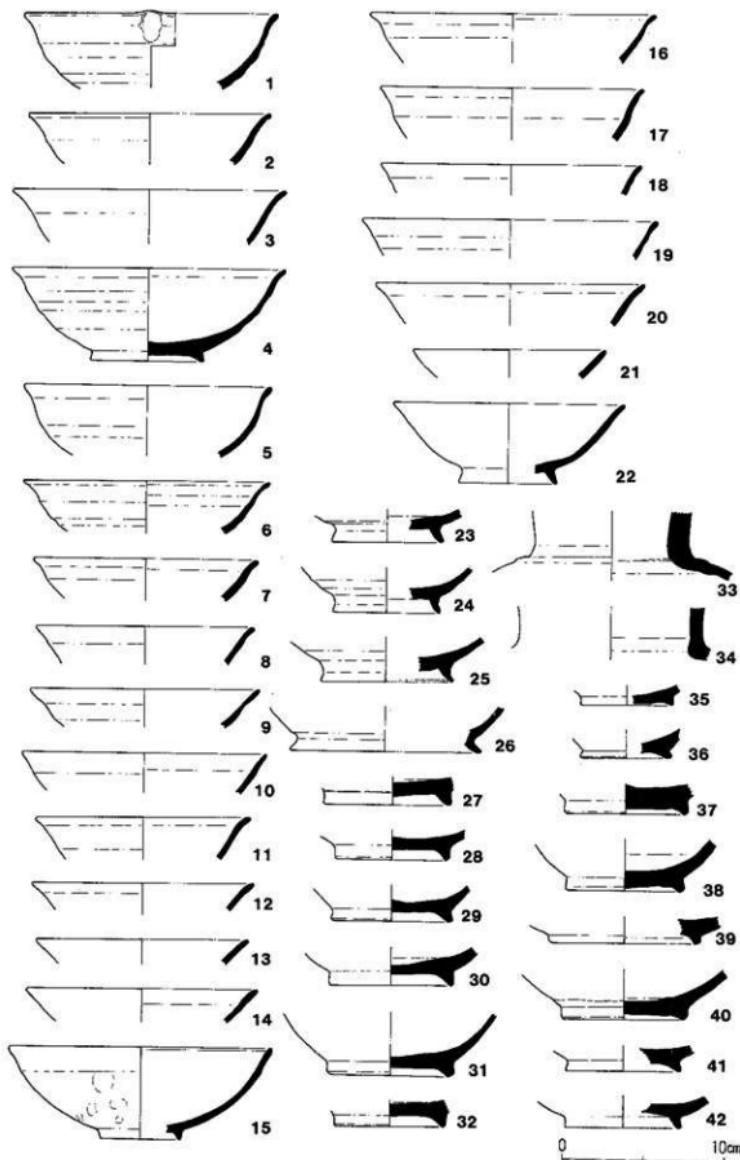


図8 路久呂坊遺跡出土遺物実測図(5)

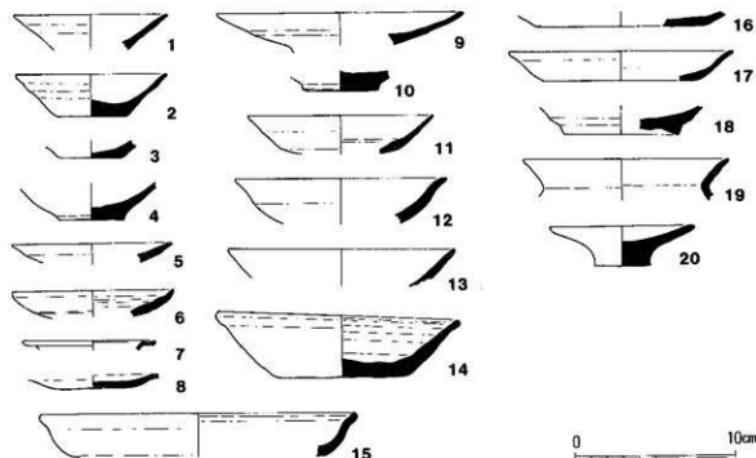


図9 路久呂坊遺跡出土遺物実測図(6)

(P30) (図6-36・37) 山茶碗と土師器がある。

山茶碗(36)は碗の底部片である。

土師器(37)は皿で、口縁端部がわずかに外反する。

(P31) (図7-11) 平底の土師器の碗の底部片である。

(P32) (図7-9) 平底の土師器の碗の底部片である。

(掘立柱建物) (図6-15・16) 柱穴から出土したもので、山茶碗の碗の底部である。三角形の低い高台をもつものである。

(SD1) (図7-13) 土師器の碗の底部片で、輪高台である。高台は二角形の低いものである。

(包含層及び採取品) (図7-21-37・図8・9) 灰釉陶器、山茶碗、土師器、黒色土器などがある。主なものについて解説しておく。

碗については、釉のかかるもので、口縁端部を指で押されたものがある(図8-1)。口縁端部が心持ち肥厚し、外反する。高台は低い二角高台が多い。

山茶碗については、低い三角高台を持ち口縁部を外反させるものと、高い高台を持ち、口縁部がさほど外反しないものとがある。

土師器は、碗と皿、甕がある。碗は平底のもので、皿には平底のものと口縁部を屈曲させるものとがある。輪高台を持つものもある。甕は「く」の字形にカーブする口頭部を持つものである。

ホ. ま と め

今回の調査では、明確な遺構としては掘立柱建物跡と小銀治に関係すると考えられる上塙を検出したのに留まった。遺構の時期については、掘立柱建物の柱穴から出土した上器が平安時代後期の山茶碗であり、これより下る時期の遺物を出土していないことから、建物の時期をこの頃と考えて良い。小銀治跡についても同様の遺物が

出土している。その他の遺構については、唯一SK8とした土壙から須恵器の杯の身と蓋が出土しており、奈良時代の遺構であるが、他のものからの出土遺物はすべて平安時代後期に下るものである。遺跡の性格については考を要し、後考に譲るが、少なくとも、奈良時代にあった集落がその後断絶し、再び平安時代後期に形成を見ていることが出土遺物から推察できる。この事は、県内の多くの集落跡の事例からすれば、平安時代後期を前後する時期に、集落をも再構成するほどの大規模な水田開発が実施され、その後に発生した集落跡の事例に似ている。其の場合多くは条里型水田との関係で把握できるものであるが、当遺跡の周辺にも条里型水田が広がり、それが平安時代後期に開発された形跡を示す事例がある。今回の調査結果についてもこうしたことを踏まえて考えていく必要があろう。

最後に、特に量の多いSK12からの出土土器を中心に、その編年的な位置付けをしておきたい。SK12からは、灰釉の碗、山茶碗、土師器の皿、杯、須恵質の壺などが出土している。灰釉の碗と山茶碗については、釉の懸かるものと無釉のものの区別であって、口縁部の形態や高台部の状況などはほとんど異なるところがない。高台端部に付く縦痕は山茶碗に限られるが、外底面の糸切り痕は両者共通して認められるところである。土師器の皿については、口縁部が屈曲し、端部を丸く上方に肥厚させる形態のものが残る。又、半底であり、外底面に糸切り痕の痕跡をのこすものが加わっている。いわゆる輪轆土師器の範疇のものである。外底面の糸切り痕は撫で消している。これには碗類もある。SK12からは出土していないが、輪高台を持つ土師器の碗も加えてよいと考える。羽釜は口縁端部を内側に小さく肥厚させて端部に面を取り、幅の狭い鶴の付くものである。このほかに灰釉の壺がある。また須恵器の壺は、唯一の須恵質のものである。以上のSK12の出土土器は、おおよそ他の遺構等からの出土土器を網羅している。ただP15の土師器の杯は輪轆土師器であるが、平底の外底面に糸切り痕を残していく未調整である。形態的にもU縁端部を玉縁状に肥厚させるなど相違が見られる。また、U縁部を屈曲させる皿の出土をみていよい。従って、SK12とP15の間で時期的に細分することのできる可能性があるが、ここでは、灰釉陶器、山茶碗などの特徴などから、猿投窯の編年で言う百代寺窯式に相当すると考えられ、年代については、京都市の平安京跡左京四条一坊のSE8から「寛治五年（1091）五月十三日」の墨書き土器と共に出土した土師器の皿に、口縁部を屈曲させ、端部を丸く肥厚させるものが残っており、従って、この頃を下らない年代を与えることが出来る。

へ。おわりに

今回の調査では、さほど多くの遺構を検出していないが平安時代後期における当該地域の一様相を知ることできたと考える。また、出土土器類については、この頃のまとまった資料であり、今後大いに活用できるものであろう。

4. 東浅井郡浅井町北野遺跡

イ. はじめに

北野遺跡は、かつて北野天満宮付近から石棒が採集されたことにより周知されていた遺跡である。この度、当遺跡付近では場整備工事が計画されることになり、地元教育委員会の要請もあって、現地におもむき、遺跡が工事範囲にかかるものであるかどうかを確認することになった。その結果、北野天満宮の南側にあっても土器類の散布が見られ、また、小谷城に関係すると言われる古墓なども工事範囲内に存在していた。このことを基に関係機関と協議を行い、事前に発掘調査を実施することとなったのである。

調査は、当該地を東西に二分し、東半分については、滋賀県教育委員会文化財保護課技師 萬康保明が担当し、関西学院大学考古学研究会会員の諸氏の補助を得て実施した。西半分については(財)滋賀県文化財保護協会嘱託調査員 中川通士が担当した。整理調査については、東半分を関西学院大学考古学研究会が行い、西半分については滋賀県教育委員会文化財保護課技師 田中勝弘が行った。

ロ. 位置と環境 (図1~3)

(1) 位置と地理的環境

北野遺跡は滋賀県東浅井郡浅井町大字北野に所在する(図1)。滋賀県は旧来の近江国の領域をそのまま継承しているが、琵琶湖を中心に四方を山に囲まれた地形により、地理的にも歴史的にも単一の地域を形成している。東浅井郡は琵琶湖の北に位置し、伊香郡などとともに湖北と呼ばれる地方である。当方は県境となる分水嶺から派生する山地と湖岸に展開する沖積平野からなる。この沖積平野は坂田郡より西流する姉川と共に北から合流する高時川の二河川を中心にしてひろがっている。

北野遺跡は姉川の一支流である田川の上流に位置し、平野部が山にはいり込んだ谷の標高約130mにある。この谷は標高180m付近を谷口として高度を下げるとともにU字形に広がり、標高105m前後まで緩やかな傾斜面(勾配約30/1000)をなしている(図2)。このうち標高約120mより上では傾斜がやや急で等高線も扇状に中央が張り出るに対し、これより下は比較的緩やかになる。そして、田川より南では谷の東側の尾根が西に屈折してのびるため、わずかに高くなっている。地形は標高約120mより上は扇状地と考えられ、高畠・野田などの集落はその裾部にある。このように田川の上流は北から南に傾く緩斜面をなすが、東西を山に挟まれ、かつ、南は東から突き出た丘陵尾根に囲まれた盆地となっており、地形的にひとつの小地域を形成している。古代の田根郡、中世の川根莊は、まさにこの地に相当し、明治22年から昭和29年に至るまで施行されていた行政区画上の田根村もほぼこれにあたる。

現在、この盆地内には谷頭の谷口、東側山麓の竜安寺・小室・上野・木尾、西側山麓の池奥・瓜生、中央の北野・高畠・力丸・野田といった計12の集落が点在する。これらは扇状地と山麓に集中し、扇状地下方は全く集落の分布をみない。集落周辺と田川沿いの微高地のほかは水田利用が主である。この地区は西池をはじめとした溜池が多いことで特異である。盆地中央を流れる田川が奥行きのごく深い谷に源を発しているため、集水面積が狭いこと、扇状地の地形から河川は伏流水となりやすいうことにより河川の流水量が少ないと考えら



図1 北野遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

れる。当地区の歴史を考えるとき、こうした扇状地という地形を充分認識し、これが開発に大きく作用したことを考えねばならない。

(2) 考古学的環境 (図1)

当地区の考古学的環境は、繩文・弥生時代についてはほとんどその実態がわかっていない。わずかに高畠・瓜生から出土したという大型蛤刃石斧がその痕跡をとどめているにすぎない。^②古墳時代にはいると、盆地の周囲の丘陵を中心に後期古墳が点在するようになる。東側には古墳が少なく、竜安寺と小室に孝徳の宮古墳・宮山古墳がそれぞれ単独で分布するのである。西側には10数基の群集墳である瓜生古墳群・田川古墳群がある。南側の丘陵から平地にかけては、大入塚古墳群(4基)・木尾古墳群(数基)・城山古墳群(10基)が分布する。一方、この丘陵の西側の沖積地には、埴輪をもち周溝をめぐらした径60mの岡の腰古墳をはじめとして、狐塚古墳・亀塚古墳などの單独墳と弓月野古墳群(6基)・平塚古墳群(7基)の小規模な群集墳がある。浅井中学校遺跡も遺物からみて、後期古墳と考えてよいであろう。このように当地区では、前・中期の古墳の存在は知られておらず、後期に至ってはじめて古墳の成立を見るのであるが、岡の腰古墳以外はいずれも小規模で、群集規模も小さい傾向にある。なお木尾の内野神古窯址は6世紀末から7世紀初頭の短期間、操業していたようである。^⑤

歴史時代では白鳳期の鬼瓦が出土した八島廻寺がある。鬼瓦の出土は滋賀県内では珍しく、全国的にみてもごく少ない。当廻寺は丘陵裾部に近い平地に立地しており、瓦窯もこれに近接した丘陵に存在する。飛鳥・白鳳期の寺院は古代の要路に面した丘陵・台地端部に立地する場合が多いが、当廻寺も全く同様である。いま国道365号線として美濃の不破關から山越えして北西方向に走る道路に八島廻寺は面している。壬申の乱の際、天武方の一手は不破關より湖西の高島三尾城を攻めており、東海道から北陸道へぬける近道であるこの経路を北上したと推定される。白鳳期すでにこの地が要路にあたっていたこと、寺院を造営しうる在地豪族が存在したことは注目されよう。

(3) 古代の田根郷

『和名抄』によれば、浅井郡は岡本・田根・湯次・大井・川道・丁野・綿部・連水・益田・新居・都宇・朝日・塙津の13郷からなり、大郡であった。^⑨明治に編成された田根村は、須賀谷と田川を除いて中世の田根荘を繼承しており、古代における田根郷もほぼこれにあたるものと考えられる。田根の地名はすでに天武紀元年八月条に「淺井田根」とみえており、『和名抄』を2世紀以上遡る時代から存在したことがわかる。田根郷の周辺では湯次郷と丁野郷がある。湯次郷は浅井町の大字湯次の位置から、田川と姉川に挟まれた地区と考えられ、丁野郷は

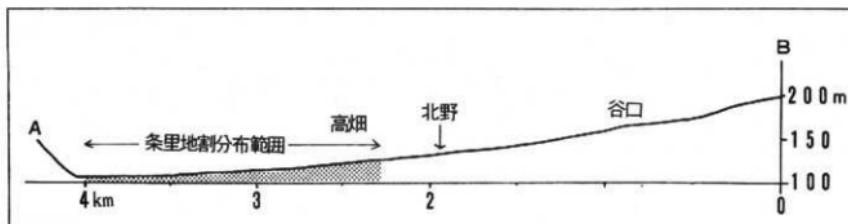


図2 北野遺跡地形断面図(図1 A-B) 高さ:長さ = 2:5

湖北町の大字丁野の存在から小谷山の西麓の地区にあたるであろう。湯次郷は明治の湯次村（はじめは湯田村）に継承されていると推定されるが、これは山ノ前・尊勝寺・平塚・八島・西野・草野・内保などが含まれる。古代における田根郷と湯次郷の境界を推定した場合、のちの湯次村と田根村のそれがほぼこれに相当すると考えられる。さきの東海道から北陸道に向かう交通路沿いに岡の腰古墳をはじめとした古墳が多く点在することは、この周辺が墓域であり、さほど水田開発が進展しておらず、田根郷と湯次郷を分離していたことを示すのではないだろうか。内保西方の鯿川北岸沿いは福良の森と呼ばれ、現在でもそのおもかけを残す未整地であるが、八島・平塚・尊勝寺などは田川の河床よりかなり高く大規模な人工灌漑を必要とするところであるため、水田開発が遅



図3 北野遺跡条里地割分布図（1～3里内ののみ1町方格を記入）

れていたと思われる。

ところで近江は条里地割が良好に遺存する地域としてよく知られているが、東浅井郡もその例外ではない。北から約14度西に偏った方位を示す条里地割は平野部のほぼ全域に認められ、田根の盆地にも及んでいる。^{1/25000} の地図上で辿れる条里地割は図3のごとくであり、標高120m付近まで看取することができる。これより高い扇状地上は明確でない。傾斜もやや急で、小さな起伏に富む扇状地を造成するのが困難であり、水田に適さない上地条件からも開発は遅れ、条里が施行されなかつたと思われる。¹¹ 復元された条里は木尾の西で6条・7条の1里となり、西へ2里・3里となってゆく。ここで注目されるのは、田川が条里地割に符合していることである。すなわち、6条2里の西から2町の界線上を南流し、6条と7条の界線上でこれに沿うように直角に西へ屈折して西流する。河川流路が条里に符合することは、流路が条里制に規制されたもので、人工的に設定されたことを示す。条里地割が施行された後は、灌漑排水などの水利施設もこれに適応するような方法がとられなければならない。田川の場合は少ない河川の水を有效地に利用するために、盆地の中央に流路を導くことにより、水田に引水できる造作がなされている。条里地割に合致する6条2里中の流路では、これに沿って自然堤防状に高くなっている、川の両側に水を導入するのに都合のよい構造となっている。また盆地の東側を流れる小河川は地元で堀川と称され、小堀遠州が造成したという伝承を残しているが、北野の入満宮付近から水田面より2m程度高い堤をもった天井川であることからも、扇状地の伏流水を利用した人工灌漑用水路であると考えられる。盆地の東辺を中心に灌漑する設備であろう。

以上のように、田根郷の盆地南半部は条里地割が明瞭に遺存し、水田とこれにかかる諸施設が一定の企画性のもとに設定されているが、この地割の施行年代については、通説のように大化以後、少なくとも奈良時代に求められるかどうかは、近年の条里地割の調査例からみても即断できない。例えば昭和54年に発掘がされた高島郡高島町鴨遺跡では、現条里の下にこれと異なる方位を示す埋没した地割が検出され、埋没条里に伴う遺物の年代から、現条里が平安時代後半以前には遡りえないことが明らかにされた。条里地割から奈良時代の開発を語ることはなお慎重に検討されるべきであろう。

一方、田根郷内は溜池が多く分布しており、10数を数える。近年でも旱魃に見舞われる地域であり、古くから灌漑用水の確保のために溜池が築造されたのである。扇状地上にそれらのほとんどが分布することは、これらが水量の少ない河川を補い、地下水位の低い土地条件を克服すべく築造されたことを示唆する。高畠の西方の谷をせきとめた西池は特に大きく6町ばかりの広さをもつ。この池は灌漑に利用できる川のない盆地西辺を潤すに大きな役割を果たす。溜池の築造年代も決定できる資料がないが、谷をせきとめ常時水を貯めるためには強固な堤を必要とするものであり、この築堤技術は6世紀木頃日本に移入されたといわれている。古墳時代には普及しておらず、当地区においても扇状地上の開発が進展したのちの築造にかかるものであろう。

水田開発の視点から田根郷を概観すればこのように北野を中心とした扇状地上と、扇掘より低い部分とでは、上地条件に大きな相違があり、ために開発の時期や方法も異なるのである。早くから水田開発が進展したのは、南半部の低い部分であり、のちに北半部の扇状地が開発され、これに伴って溜池が築かれていったものと考えてよいだろう。古墳の分布が南半部にほとんど偏ることは、こうした開発の進行過程を暗示するものである。今回の調査でみられた北野の水田は、扇状地特有の砂礫土上に厚い粘質土の基盤（心土）をしつらえることによって支えられた扇状地の水田構造を象徴するものであり、開発に多大な困難を伴なったことを推測させるに充分である。田根の古代における開発の歴史はいまだ明らかではないが、こうした地理的条件を認識して、今後究明されるべきであろう。中世に至り、古代田根郷は田根荘として延暦寺の莊園に編入されるけれども、その中心は盆地

(注)

①『角川地名大辞典』25滋賀県の「田根」の項。以下地誌についてはこれを参考にした。

②『滋賀県遺跡目録』(滋賀県教育委員会 昭和40年)

以下、特に参考文献を掲示しない連絡はこれによった。

③山崎秀二「浅井町間の腰古墳、淨土寺跡調査報告」(「ほ場整備事業関係遺跡調査報告」滋賀県教育委員会 昭和50年)

④山崎前掲書付載「平塚古墳群調査報告」

⑤当研究会採集資料による。

⑥石田茂作・福垣舟也「飛鳥白鳳の古瓦」(東京美術 昭和45年)

⑦大津京周辺の白鳳寺院については松浦俊和氏が検討を加えておられる「古道と遺跡—近江国滋賀郡の白鳳寺院分布から—」『史想』18 昭和54年)

⑧『日本書紀』大武天皇元年7月22日条

⑨現在、伊香郡の所管になっている西浅井町は、東浅井郡に対応する名称をもつこと、塙津が和名抄で浅井郡に編入されていることから浅井郡所管であったと考えられる。

⑩「斎右大臣中臣連金於浅井田根」

天武方はこの一ヶ月前に大津宮周辺で中臣連金を捕えているが、何故田根で処刑したかはわからない。令制下では処刑が市で執行された(獄令決大辟条)ことを勘案すれば、田根が衆目に触れる交通路に位置していたことと関連して興味深い。

⑪谷岡武雄『平野の開発』(古今書院 昭和39年)

金田章裕「東大寺領莊園の景観と開発」(『古代の地方史』4 朝倉書店 昭和53年)

⑫条里の復元は『角川地名大辞典』25の「資料編 滋賀県条里遺構分布図」によった。

⑬丸山毫平氏御教示。

⑭野上丈助「河内における地溝開発についての覚書」(『羽曳野史』3)

ハ. 調査の経過(図4)

調査は、工事の計画で、切り土が予定されている部分についてトレントを設定し、その結果遺構等の存在が判明した場合には、切り土計画範囲内に限り、トレントを拡張することにした。調査は、当該地を東西に二分し、まず東半分から開始した。東半分では、箇所のトレントで掘立柱建物の柱穴を確認し、これを中心にトレントの拡張を行った。西半分については、東半分の調査終了後に開始した。西半分については、星形跡や大型の土壙等を検出し、3トレントについて拡張した。

なお、工事範囲に含まれていた古墓については、地元の方々の御理解により、工事対象から除外され、保存されることとなり、調査も実施することを避けた。

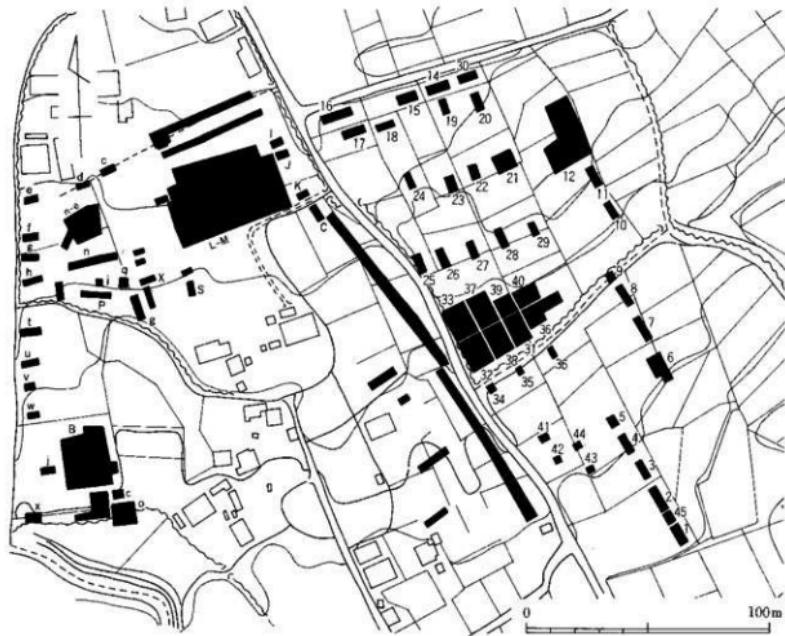


図4 北野遺跡トレンチ配図

二. 調査の結果

I. 東部地区

a. 調査の結果

1. 層序 (図5)

調査地区はすべて水田である。ここでは発掘した45箇所のトレンチのうち最も典型的な堆積状態を示すT 1南壁と遺物出土量の多いT 6南壁・T 32西壁の土層をみていくこととする。

基本層序は、I 黒灰色粘質土層(耕土)、II 淡灰茶色粘質土層(心土)、III 黄茶色砂礫土層、IV 暗茶褐色酸化粘質土層、V 青灰色粘質土層の5層である。

第I層の耕土は全体に薄く約10cmの厚さである。第II層の心土は淡灰茶色を呈する粘質土層で約30cmの厚さである。T 32では暗茶褐色を呈する部分も確認できた(II'層)。第III層は黄茶色の砂礫土層である。この層はT 1南壁では約10cmの厚さで確認できるが、北に進むに従いこの層は希薄になり、T 3では第III層は確認されない。第IV層は酸化され暗茶褐色を呈し、第V層は漏水のために還元され、青灰色となる。遺物包含層はIII層・IV層・V層である。

(中野拓哉)

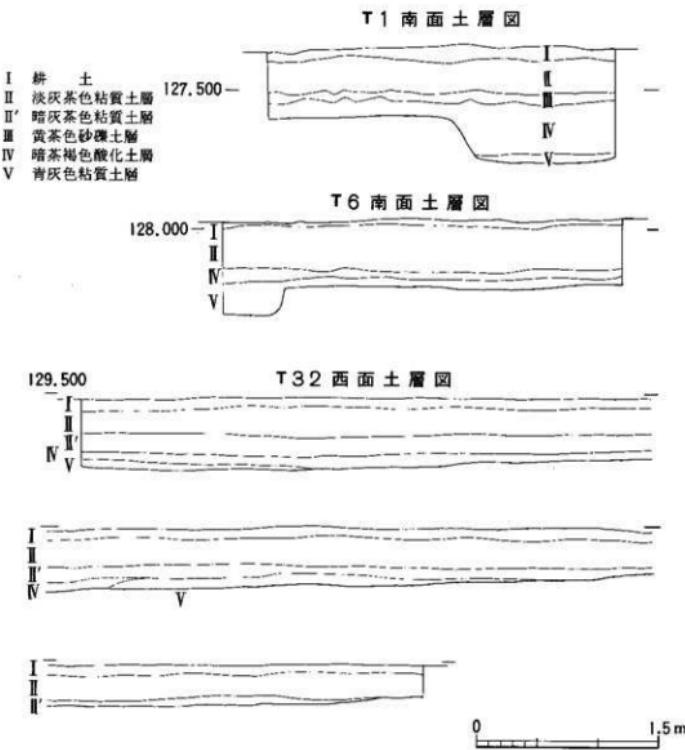


図5 北野遺跡T1, T6, T32土層図

2. 造構

本調査において検出した造構は、掘立柱建物址（S B 1～8）、溝（S D 1～4）、土壙（S K 1～4）、上塙墓（S K 5）である。以下地区及び造構別に述べる。

(1) A地区（図6・7）

A地区では掘立柱建物造構2棟（S B 1・2）と溝（S D 1）を確認した。しかし調査地域が限定されていて

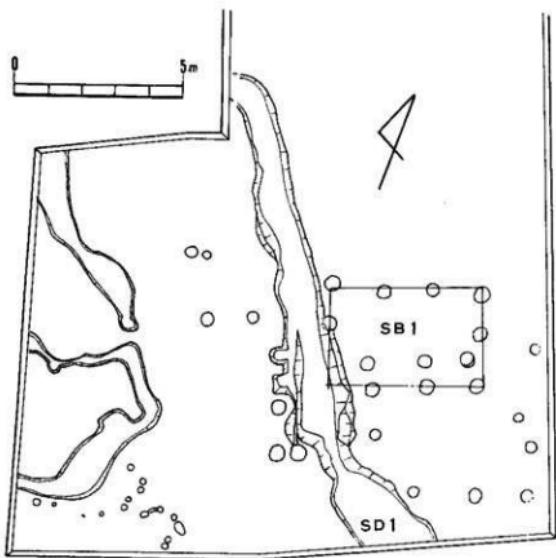


図6 北野遺跡T12遺構平面図

2つの掘立柱建物遺構の周辺を全面的に発掘していないこと、2つの建物間にかなりの距離があること、遺物がほとんど検出されていないことなどから建物の時期等の関係は不明である。

S B 1 (図8) T12の南部に位置し、西端部を S D 1 に切り込まれているために全体の規模は明らかではないが、3間×2間の住居址と考えられる。柱穴はほぼ円形で、径約40cm、深さ16~20cmである。柱穴の埋土は黒灰色粘質土で、微量の土師器が検出されたが、建物の時期を決めるにはいたらなかった。

S B 2 (図9) T21の西部に位置し、東柱の存在から2間×2間の倉庫址と考へることができる。柱穴はほぼ円形で、径30~36cm、深さ16~24cmで、黒灰色粘質土が堆積し、土師器片を少量包含していた。

S D 1 T12を北西から南東へ伸びる幅90~200cm、深さ約35cmのU字溝で約15mにわたって確認することができた。溝内には赤褐色砂礫土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかつた。この溝は S B 1 の西端部の柱穴を切り込んでいるため、S B 1 の廃絶後につくられたものと考えられる。

(納谷守幸)

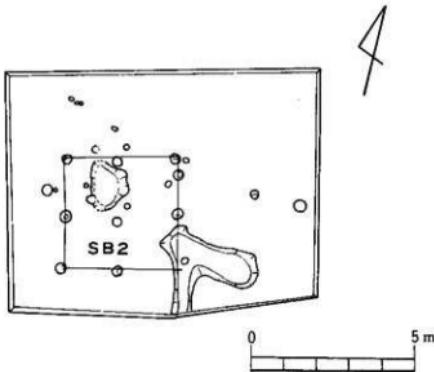


図7 北野遺跡T21遺構平面図

(2) B地区 (図10)

B地区では広汎な範囲にわたり調査を行ない、掘立柱建物遺構6棟(SB3~8)、溝(SD2~4)、土壙(SK1~4)、土壙墓(SK5)を検出した。

SB3・SB4・SB5 (図11・12・13) この3棟は建物の主軸の方向からみて同時に併立していたものと考えられる。SB3はその規模から考えて3棟の中心建物(母屋)と思われる。SB4・SB5は柱穴の間隔が均一でなく平面ではややいびつな感じを与えるとともに東柱が存在することから倉庫址と考えられる。これら3棟の柱穴はほぼ円形で、径約40cm、深さ15~20cm、柱穴内には褐色粘質土が堆積していた。遺物はSB5東半部の2つのピットから少量の土師器片を検出したのみであり、3棟の時期の決め手となる資料はないが周囲の青灰色粘質土層から出土する須恵器から考えて、藤原京の時代を中心とした時期の建物であると考えられよう。

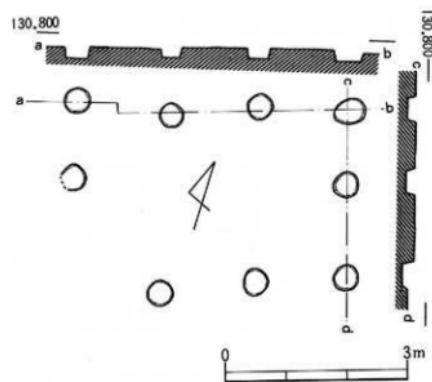


図8 北野遺跡SB1実測図

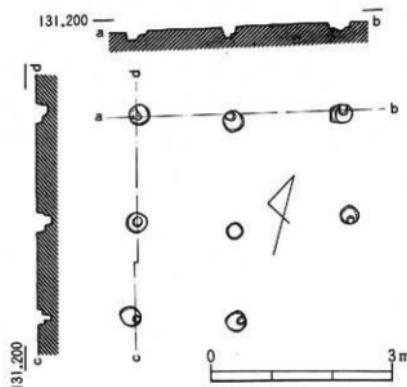


図9 北野遺跡SB2実測図

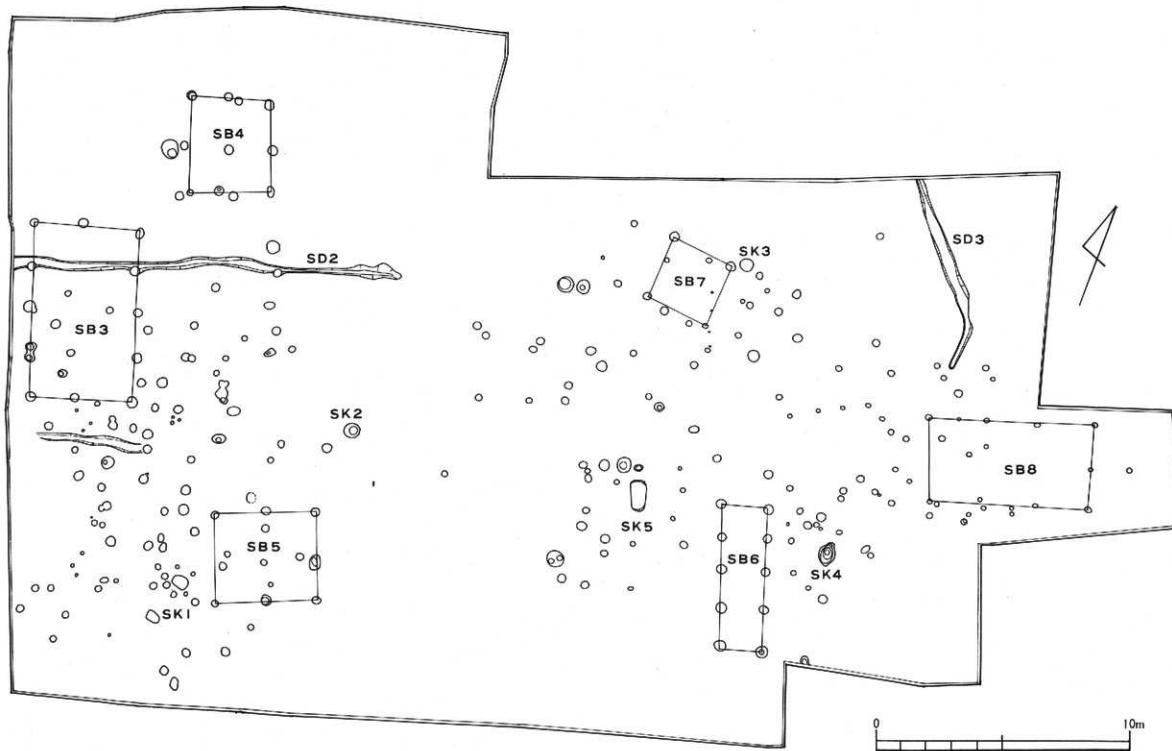


图10 北野道路B地区遺構平面図

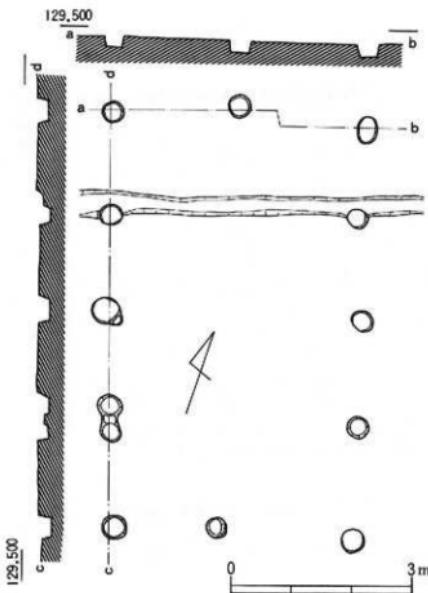


図11 北野遺跡SB3実測図

番号	種別	柱行 間隔 (柱間)	梁間 距離 (柱間)	方 傾	開口 建物	備 考
SB ₁	屋	3間 4.8m (1.6m)	2間 3.0m (1.5m)	南北傾 N73°E		溝によって切られている。
SB ₂	倉	2間 3.4m (1.7m)	2間 3.4m (1.7m)	南北傾 N77°E		柱の痕跡がある。
SB ₃	屋	4間 6.8m (1.7m)	2間 4.2m (2.1m)	南北傾 N17°W	4×5	
SB ₄	倉	2間 3.7m (1.85m)	2間 3.3m (1.65m)	南北傾 N29°W		梁間に苔がある。 東柱が存在する。
SB ₅	倉	2間 4.0m (2.0m)	2間 3.6m (1.8m)	南北傾 N20°W		東側の柱穴から土師器片が出土。 梁間に苔がある。東柱が存在する。
SB ₆	倉?	4間 5.6m (1.4m)	1間 1.7m (1.7m)	南北傾 N16°W		
SB ₇	倉	1間 2.6m (2.6m)	1間 2.6m (2.6m)	南北傾 N9°E		
SB ₈	屋	3間 6.3m (2.1m)	2間 3.3m (1.65m)	東西傾 N76°E		西側の梁行・中央の柱穴が検出されず、 柱穴から土師質瓦の小片が出土。

第1表 建物跡一覧

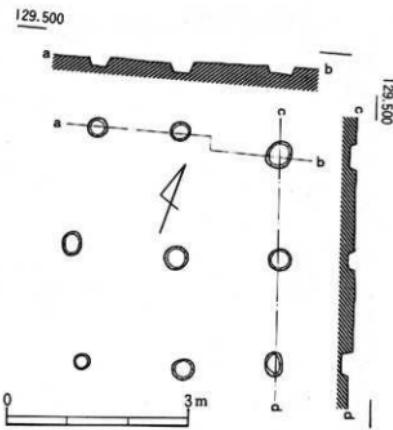


図12 北野遺跡SB4実測図

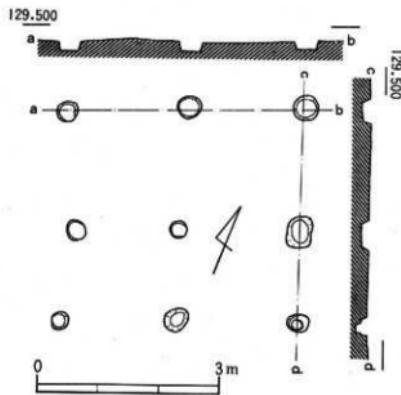


図13 北野遺跡SB5実測図

S B 6 (図19) B地区のほぼ中央に位置する。4間×1間という特異なプランをもち、規模や平面形からみて住居とするのは不適当で、倉庫・納屋等を思わせる。柱穴はほぼ円形で径約40cm、深さ5~20cm、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は検出できなかったが、主軸の方向や柱穴の大きさなどから考えて、S B 3~5と同時代の建物と思われる。

S B 7 B地区の中央に位置し、1間×1間であることから倉庫と思われる。柱穴はほぼ円形で径約20cm、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は検出されなかつたため時期は不明である。

S B 8 B地区の東端に位置し、3間×2間で束柱が存在しないことから住居と思われる。柱穴はほぼ円形で径20~30cm、深さ10~15cm、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は土師質皿の細片を検出したにとどまった。時期は柱穴内から出土した土師質皿から鎌倉時代に比定できる。

S D 2 B地区の西半部 (T33、T37) を西から東へのびる幅約30cm、深さ10cmのU字溝で約15mにわたって確認された。溝内の層位は単層で黒灰色粘質土が堆積していたが遺物は包含していなかった。S B 3の柱穴を切り込んでいるため、S B 3の廃絶後につくられたものと考えられよう。

S D 3 B地区の東半部の北 (T40) からS B 8にのびる幅25~50cm、深さ5~10cmのU字溝で約8mにわた

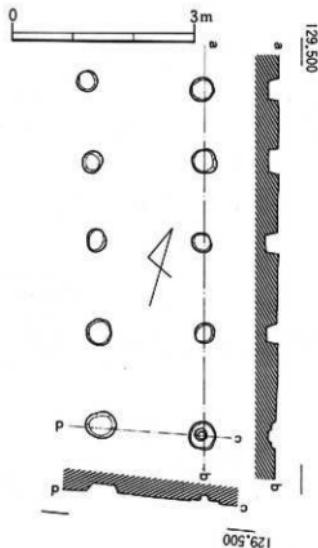


図14 北野遺跡SB6実測図

って検出した。溝内の層位は単層で黒灰色粘質土が堆積していたが遺物の包含はみられない。

S K 1 S B 5 の西 1 m に位置する。東西 65 cm、南北 55 cm、深さ 70 cm を測り、平面形は楕円形を呈する。土壌内の埋土は 2 層に分かれ、上層には黒灰色粘質土、下層には灰色砂質土が堆積しており、土師器片を包含していた。

S K 2 S B 5 の北東部に位置する。径 55 cm、深さ 25 cm を測り、平面形はほぼ円形を呈する。土壌内には黒灰色粘質土が单層で堆積し、須恵器蓋（遺物番号 6）、土師器の細片を包含していた。

S K 3 S B 7 の東に位置する。径 55 cm、深さ 60 cm を測り、平面形はほぼ円形を呈する。土壌内の埋土は 2 層に分かれ、上層には黒灰色粘質土、下層には灰色粘質土が堆積しており上層からは土師質皿の細片、鉄滓、下層からは土師器片数点を検出した。

S K 4 S B 6 の東 2 m に位置する。東西 70 cm、南北 100 cm を測り、平面形は楕円形を呈する土壌内には黒灰色粘質土が单層で堆積し、土師器片、須恵器片を包含していた。
(木谷秀次)

SK5 (土壙墓・図 20) 本土壙墓は B 地区 T31 の南半部にあり、掘立柱造構 S B 4 の西側 1.5 m、S B 8 の西方 15 m に位置する。

造構の主軸は N 19° - W をとり、規模は南北で長さ 120 cm、東西で長さ 55 cm を測り、墓壙の形状は長方形であるが、短辺は北辺が 60 cm に対し南辺は 50 cm のやや台形状を呈する。深さは約 20 cm で掘り方はほぼ垂直におちるが南辺・北辺は緩やかな傾斜面をもつ。

造構内の埋土は暗茶褐色の單一層である。

検出された遺物は土師質皿、羽釜、須恵器、山茶柄、中国製磁器である。その出土状況は造構面からほぼ一様に検出され、レベル別にみた場合、上層（0 cm ~ 5 cm）、中層（5 cm ~ 15 cm）、下層（15 cm ~ 20 cm）に区分する

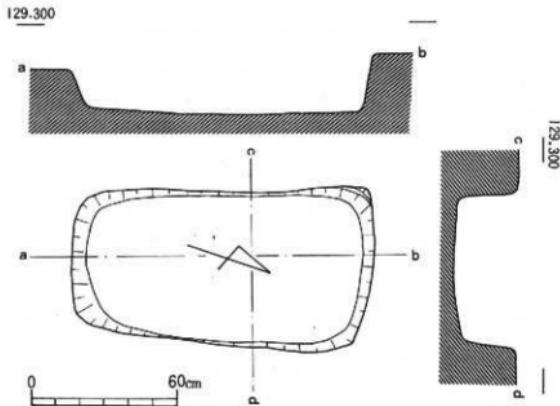


図15 北野遺跡SK5(土壙墓) 実測図

と、上・下層に濃密であるが、中層は希薄である。(第2表)

出土遺物は中国製磁器と山茶楓を除きすべて小破片であり、完形のものは認められなかった。故意に打ち碎かれた可能性も考えられる。また、出土した遺物のなかに6世紀末～7世紀初頭の須恵器の小破片があるが、墓擴を掘り込んだ際に混入した可能性がある。

(二谷重明)

3. 小 結

掘立柱建物遺構はA地区・B地区あわせて8棟検出された。8棟は7世紀末頃から8世紀初頭を中心とした時代の建物(SB3・4・5・6)、平安時代末期～鎌倉時代の建物(SB8)、時期不明の建物(SB1・2・7)の3つに分けることができる。このうち、SB3・4・5は主軸の方向が一致し、隣接して構築されているので1つのまとまりとして把握することができる。遺構の特徴は藤原京の時代を中心とした時期の建物に比べて、平安末～鎌倉時代の建物の柱穴が小さく、浅いそこである。これは掘立柱構築の技術が進んだことを示すものと考えられよう。

B地区で検出した5ヶ所の土塙のうち、SK1・2はいずれも比較的整った形をしており人為的なものと思われるが、出土した遺物は土塙内に堆積した土砂に包含されたもので、直接その性格を示す資料はない。ただ多くの鉄滓を検出したSK3は性格を明確にはできないが、今後十分に検討する余地がある。

一方A、B両地区で検出された溝状遺構は遺物が検出されなかったことから、時期は不明である。また、高低差をもたない。

B地区で検出された土壤基(SK5)は出土遺物より時期は鎌倉時代前半期に比定できよう。壁面がほぼ垂直で長方形を呈し、底面が平坦であることなどにより、木棺が使用されたと想定できる。遺構の特徴として掘立柱

遺位 物	上層		中層		下層		セクション内	
	0～5cm		5～15cm		15～20cm			
	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
土師質皿	63	20	21	5	52	15	36	12
羽釜	12	1	3	0	11	0	12	1
須恵器	3	1	1	1	2	1	4	2
山茶楓	3	1	1	0	0	0	0	0
青白磁	2	1	0	0	0	0	0	0

※ 個体数は口縁部などから想定した。

第2表 土塙基(SK5)出土遺物表

遺構SB8に隣接した墓地である点が注目される。現在のところ、中世において住居に近接した墓地の類例は、大阪府高槻市宮田遺跡の例があげられる。

(三谷・木谷)

(註)

①『高槻市史』 第一巻 (高槻市史編さん委員会昭和48年)

b. 出土遺物

今回の発掘調査において出土した遺物は、縄文式土器・石斧・須恵器・土師器・磁器・陶器・土師質皿・鉄滓などである。量的には須恵器・土師器・土師質皿が大部分を占める。出土遺物の総量は破片数で約1300個、コンテナ約2箱分程度であり、試掘した45ヶ所のうち25ヶ所で遺物が確認された。しかし、そのほとんどが包含層ないし擾乱層からの出土で遺構に伴うものは、SK5以外では少ない。

ここでは遺物の種類・時代・器種ごとに概観し、個々の遺物については本章末の観察表に一括した。またSK5出土の遺物は別途に観察表を作成し、写真図版の遺物地号は実測図版の遺物番号と同一番号に統一した。

1. 縄文式土器 (図16)

検出された縄文式土器は10数点あるがすべて小破片であり、原形がうかがえるのはこの他に貼り付け凸帯を有する1点があるにすぎない。(1)は甕の体部の一部で貼り付け凸帯を有し、その上部を指で押さえて波状にし、更に条線を凸帶上に4条、体部に数条施し、外面をヘラ研磨している。胎土は径2mmの大細砂を含み、色調は暗褐色を呈する。焼成はやや悪い。縄文時代後期のものと思われる。

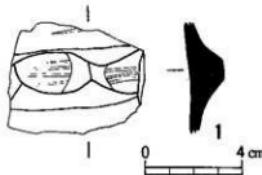


図16 北野遺跡縄文式土器実測図

2. 石斧 (図17)

石斧が1点検出されており、大型蛤刃磨製石斧である。刃部は曲線凸状をなし、表面とともにゆるい凸状を呈

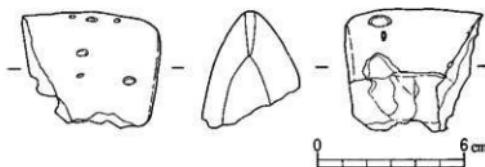


図17 北野遺跡石斧実測図

し、側面は平坦で下方にしたがって内湾する。刃部先端は磨滅し平坦面を有する。残存面はすべていねいに研磨されている。石材は安山岩を使用している。

(三谷)

3. 須恵器 (図18)

須恵器はT1・T6・B地区を中心に出土し、そのほとんどを固化した。器種は杯蓋(3~8)、杯身(10~24)、提瓶(25)、台付碗(26)、高杯(27)、台付瓶(29)、薬壺の蓋(9)のほか器種不明の底部がある(28)。これらは(6)を除いて、すべて包含層あるいは擾乱層よりの出土であり造構にともなわない。

これらの遺物のうち最も時代の遅いものは杯蓋(3~5)、杯身(10~11)、提瓶(25)であり陶邑TK217の初期に相当し、6世紀の終末に比定できる。

これにつづく時期として考えられるのは、SK2出土の杯蓋(6)と杯身(12~13)である。(6)は内面のかえりの部分が退化しており、7世紀の中葉頃のものと考えられる。

第3の時期を示すものは、杯蓋(7~8)、薬壺の蓋(9)、杯身(15~22)である。杯蓋の内面のかえりは消滅し、杯身には底部に断面長方形の高台をめぐらす。これらは陶邑MT21に併行する時期を示し、7世紀末~8世紀初頭に比定できる。

第4の時期として考えられるものは、杯身(23~24)、台付碗(26)、台付瓶(29)でありこれらは奈良時代~平安時代初頭の時期を示す。

このように出土した須恵器には約200年の時期差があるが、その中でも、7世紀末~8世紀初頭の須恵器の出土量が多い。

(中野)

4. 土師器 (図19)

出土した土師器のうち実測可能なものは10点に満たないが、器種は壺(30~33)・鉢(34)・土師質皿(37)の3種類と他に把手(35~36)がある。これらは一地区に集中して検出されていない。壺の口縁の形態はそれぞれ異っている。(30)はやや内湾し、それに対し32は外反する傾向にある。(31)と(33)は壺部に面を持つ。体部まで残存するものは少ないが、いわゆる体部の張りが弱い長壺と呼ばれるものであると思われる。鉢は大型で、体部に刷毛目を施したのちに口縁部にヨコナデを行なっている。把手はいずれも貼り付けの手法を用いており、(35)は鈎か鉢、(36)は浅い鉢に貼付されたものであろう。これらは全て造構に伴なわないと明確な時期を判断することはできないが、7世紀から8世紀のものと考えてよいだろう。

土師質皿については、多数破片を確認したが固化し得たのはわずかに1点である。口径は8.3cmを測り、底部外面には擦痕が見られる。これは形態や手法の特徴より13世紀に比定できよう。

5. 鉄 淬

B地区のSK3より出土した7点の鉄滓はいずれも2×2cm程度のものである。T24より出土した鉄滓は大形で、出土時、緑灰色の錆の様なものが付着していた。このことから銅滓の可能性もある。(土谷 恵)

6. 土壙墓内(SK5) 出土遺物 (図21~22)

土壙墓(SK5)からは土師質皿、羽釜、須恵器、山茶碗、中国製磁器などが検出された。このうち土師質皿が最も多く、続いて羽釜、須恵器の順となっており、山茶碗、中国製磁器は各1個体ずつとなっている。須恵器

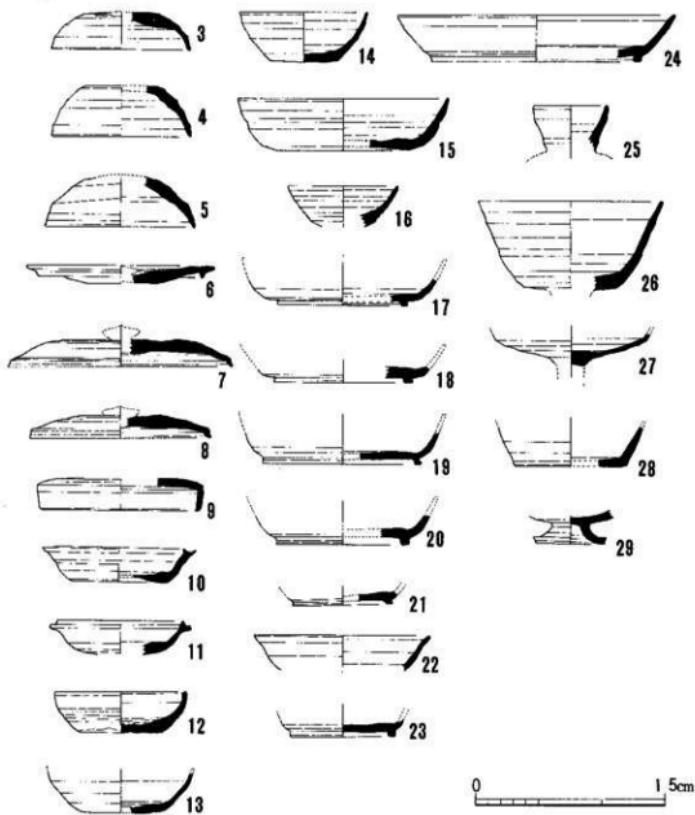


図18 北野遺跡須恵器実測図

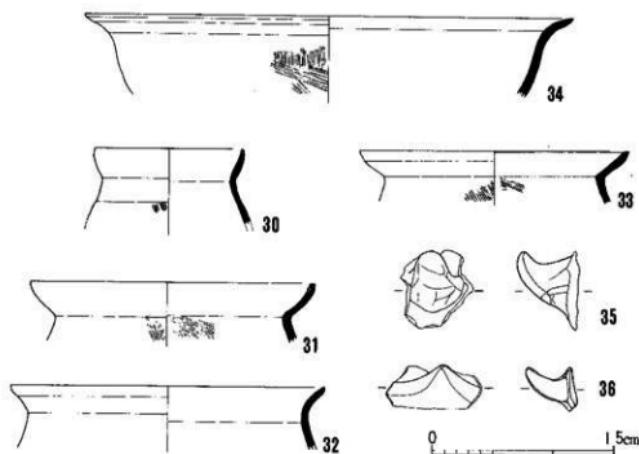


図19 北野遺跡土師器実測図

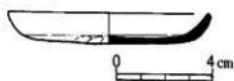


図20 北野遺跡土師質皿実測図

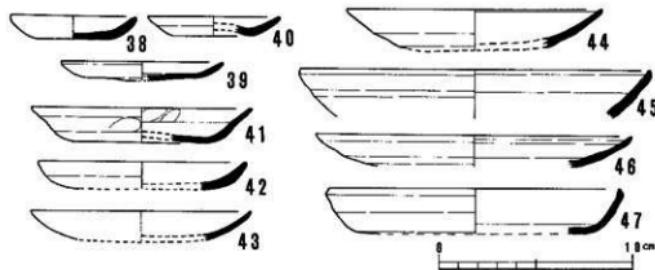


図21 北野遺跡土塙墓内出土土器 I (土師質皿)

以外はいずれも13世紀に比定できるものである。

(1) 土師質皿 (38~47)

土師質皿は検出総数162片で個体数は約50個になると推定されるが、そのうち実測不能なものは約10点である。大きさから大皿(口径約15cm)、中皿(約10cm)、小皿(約7cm)の3種類に大別できるが各々深さや形態は異なるものが多い。

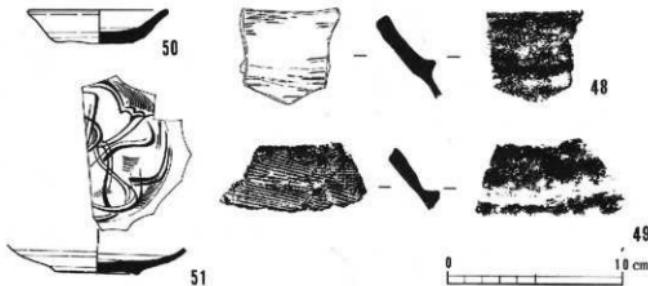


図22 北野遺跡土塙墓内出土土器II

(2) 羽釜形土器 (48・49)

羽釜形土器の検出総数は38片で個体数は2点と推定される。両者とも同様な形態をとる。

(3) 須恵器

須恵器は杯と甕の小片を検出した。杯蓋と思われる1点と、器種不明の口縁部1点、甕は胴部のものが8点あり、内面に同心円タタキ目がみられるものと、タタキ目をナデて消すものがある。個体数は合計3点と推定される。検出した破片が小さいため時代は判定し難い。

(4) 山茶椀 (50)

山茶椀とは通称行基焼と呼ばれる東海地方で焼かれたものである。3分の2程遺存する1点と、同一個体の口縁部小片を2点検出した。

(5) 中国製磁器 (51)

底面以外に釉がかかっており、底部内面にへら様の施文具で文様を描く。色は青白色で文様の部分がやや濃くなる。

(三谷)

7. 小 結

本遺跡からは多種多様の遺物が出土したが繩文式土器と石斧を除けば、ほぼ二つの時期に限定される傾向にある。ひとつは須恵器の陶器MT21の型式に代表され、7世紀末~8世紀初頭を中心とした時期である。これらはほとんど遺構に伴なうものではないが、当遺跡の中心である掘立柱建物遺構の時期を裏付ける遺物と考えられる。

もう一方の時期は、SK5出土遺物に代表される鎌倉時代前半のものであり、特にB地区東半からは土師質皿

の出土量が多い。

以上のことから、本遺跡は長期間にわたって継続するものでなく、500年以上隔てた2時期に集中して短期間常なまれたものであると考えられる。(中野)

c. まとめ

北野遺跡の発掘調査は、この調査にひき続いてさらに西側の部分を秋に調査が実施されている。そのため、遺跡の全体像を描くには、その後の調査における図面、遺物などの整理結果をまたねばならない。昭和54年度に実施した北野遺跡の総合的な報告は、後日刊行予定の『ほ場整備関係遺跡調査報告書』Ⅶ(滋賀県教育委員会)にゆずり、ここでは我々の調査担当した地区で明らかになった点を列記するにとどめたい。

(1) 縄文時代の遺物

調査当初に予想された縄文時代の遺構、遺物は、微量ではあるが縄文式土器の破片と、磨製石斧が1点出土したのみであった。出土した土器はかなり磨滅していることから、さらに上流の地点から移動したものと推定される。このことから、付近に縄文時代の遺跡があることはほぼまちがいなかろう。

土器は、おそらく甕か深鉢で、凸帯の刻みが二枚貝腹縁による押引の手法を用いていることから、東海地方を中心分布する縄文時代晚期—五貫森式のものであろう。同一手法の土器は、坂田郡伊吹町杉沢遺跡からも出土が報告されている。

(2) 遺物の時期

主な出土遺物(須恵器、土師器など)の時期は、大きくⅠ期—6世紀末、Ⅱ期—7世紀末~8世紀初頭、Ⅲ期—13世紀の三時期に分けられる。このことと歴史的な背景から見て、すでに6世紀末段階から当地域への定着が始まったものと理解してよいだろう。おそらく地理的状況から考えて、平野の開発が6世紀末ごろには扇状地の上半部にまでおよび、北野の地に新たな集落が営まれたものと推定される。

(3) 建物跡の時期と問題

検出された掘立柱の建物跡は、各トレンチより出土した土器から、Ⅱ期とⅢ期のものとみられるが、建物の大半はⅡ期のものである。

(a) Ⅱ期の掘立柱建物は、各建物の規模や配置などからみて、集落跡として誤りはなかろう。ただ掘立柱建物は、比較的住居跡の調査例が多い湖北地方にあっては、類例にとぼしい。接する地域で多くの住居跡が調査されている、伊香郡高月町保延寺大海道遺跡、井ノ口遺跡では、奈良~平安時代初頭まで竪穴式住居が営まれている。一方、北野遺跡例に近い年代を有えている掘立柱建物は、長浜市大東遺跡に認められる。これについては坂田郡の都衙が推定されているように、北野遺跡の建物群とは性格の異なるものかもしれない。こうしたことから考えると、おそらく湖北地方においては、奈良・平安時代前期ごろまで、竪穴式住居が集落に一般的なものであったとみてよいだろう。そうした観点にたてば、北野遺跡の掘立柱建物からなる集落跡は、湖北地方にあっては早い時期のものと言えよう。北野の立地と開発の開始時期を考える時、湖北地方で一早く先進的な建物構造による集落がこの地に営まれることに一つの意義を見るのである。

(b) Ⅲ期の掘立柱建物は、Ⅱ期の建物と同一方向で、また現在の村を構成する建物とも方向性については大きな違いはない。おそらく北野の集落は、Ⅱ期以来ほとんど同じ位置に、多少の場所の移動はあっても順次建て換えをくりかえしながら今日に至ったのである。

こうした点から、北野遺跡は、古代から中世、近世をへて現在に至る集落のあり方を知る好資料といえよう。

以上3点を今回の調査より導き出された結論としたい。

(著者保明)

（註）

- ①杉原莊介・外山和夫「豊川下流域における縄文時代晚期の遺跡」（『考古学雑誌』2-3、東京考古学会 昭和39年）
- ②小林行雄・藤岡謙二郎・中村春寿「近江坂田郡春照村杉沢遺跡—縄文式土器合口型棺発掘調査報告—」（『考古学』9-5 東京考古学会 昭和13年）
- ③丸山竜平・成瀬法途・勢田広行・本田修平「高月町保延寺大海道遺跡調査報告」（『は場整備事業関係遺跡調査報告書』II 滋賀県教育委員会 昭和50年）
- ④田中勝弘「高月町井口遺跡」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-1 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和52年）
- ⑤中谷理治・鬼柳彰・大橋信弥・別所建二・松浦俊和・大木造跡の発掘調査」（『北陸自動車道開通遺跡発掘調査報告書』I 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和49年）

II. 西部地区

1. 遺構

トレンチ調査の結果2箇所で遺構を検出した。

〔L-M地区〕（図23）

L-M地区では、屋敷の外郭を画すると考えられる掘跡、その内郭で井戸跡や多数のピット群を検出した。

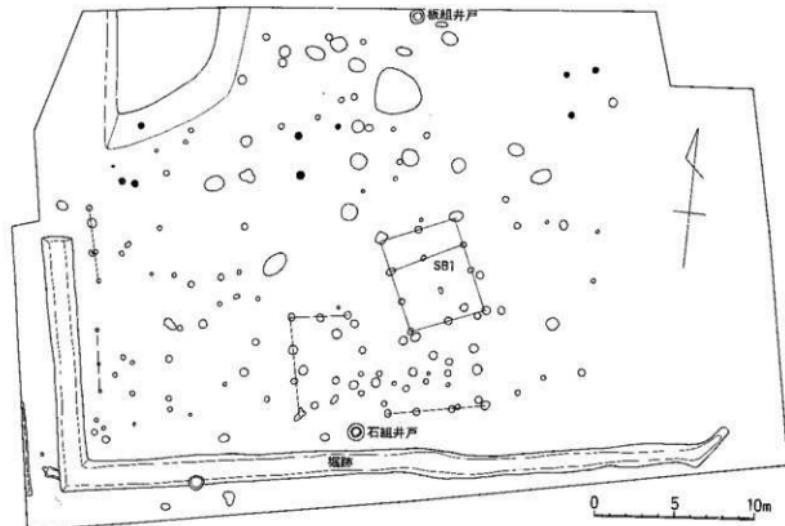


図23 北野遺跡西部地区 L - M地区遺構平面図

(掘跡) 幅1.9~1.2mのもので、東西に約40m、その西端で直角に折れ、北へ16mまで伸びるものである。北端は、垂直に切り落とされ、以北には、少なくとも11mまでは堀のための掘削は見られない。東端は、約45°に北東に折れ、約3mで自然に途切れる。深さは、東西部分で、東が30cm、西が40cm、コーナー部分で30cm、南北部分では60cmを計る。

(井戸跡) 2基検出している。1基は、堀の東西部分の中央よりやや西寄りで、堀の底か80cm北側で検出した。径1mの掘方を持ち、径50cmの石組のものである。他の1基は、石組井戸の北26mの位置で検出している。板を桶状に組み合わせたもので、時期的には新しいものである。

(ピット群) 径20cm足らずから、大きいもので3mまでのものを多數検出している。多くのピットには炭

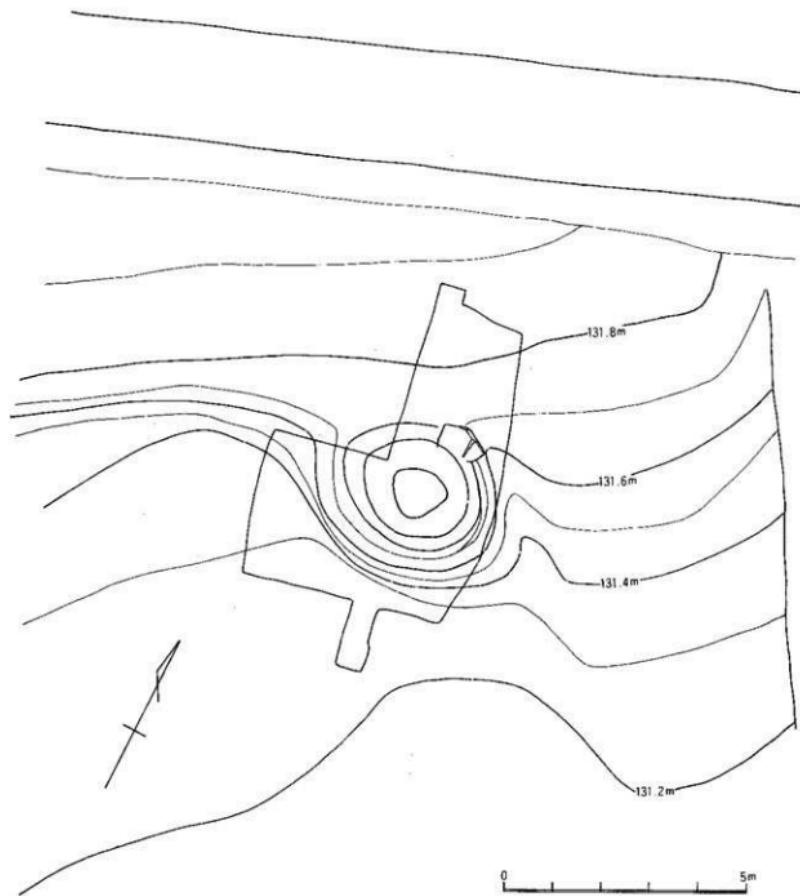


図24 北野遺跡西部地区元天神地形測量図

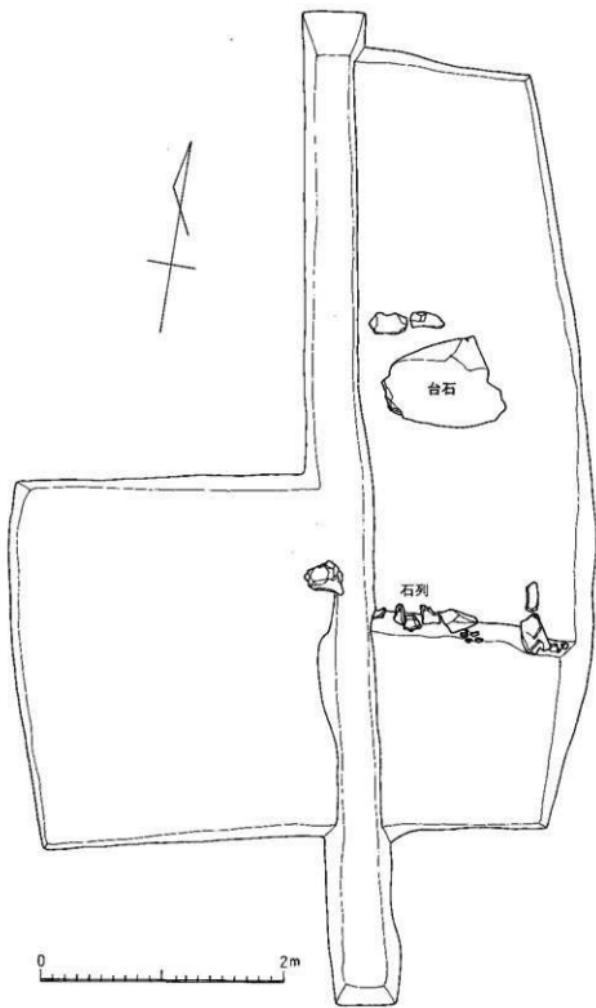


図25 北野遺跡西部地区元天神造構実測図

が含まれ、陶磁器や土師器の破片が含まれている。また柱根を残すものもある。柱根を残すものは、おおよそ径30~40cmの規模の掘方を持つもので、柱根は径20cmほどのものである。

(掘立柱建物) ピット群の中には、2間×3間の南北棟の掘立柱建物になると思われる配列を示すものがある。塙の北側7mほどの位置で検出しているが、塙の方向より更に西に振れるものである。4.9m×6mの規模を持つ。壠跡に先行する建物跡であろう。

[竜安寺元天神地区] (図24・25)

径約10m、高さ約80cmの円墳状の高まりを残すもので、元天神と通称され、塙の伝承を持つものであった。調査の結果、長さ1m幅50cmの平坦面を持つ大石と、その南約1.5mの位置で東西に並ぶ石列を検出した。石列は1.7mほどが遺存していたが、この石列を境に、南側は一段低くなっていた。元天神の通称や地元の方々の話から、大石は祠の台座であって、南側の石列はその区画を示すものであって、これを境に段差を持つことは、祀が南面していたことを示すものであろう。祠の位置は、北野地先と竜安寺地先との字界付近に位置し、竜安寺への出入りはこの南側の里道を利用していと言われている。従って、祠は、竜安寺地先の入り口に位置し、村の入り口を守る役割を担っていたものと考えることが出来る。

2. 遺物 (図26・27)

[土師器]

(皿) 犬どが皿類である。縦軸に器高、横軸に口径を取って、規模の度数分布表を作成した結果、凡そ、口径9cm前後、器高1.3cm前後の小皿と、口径14cm前後、器高2.3cm前後の大皿との2類に分類できる。

大皿A II線端部下端5mmほどが内側に折れるもの。口縁部が直線的に開くA1、内湾気味に開くA2、外反するA3、口縁部の中程で屈折するA4の4形態がある。底部は平底で、口縁部との境は、A2になだらかなカーブを描くものが多いが、概ね稜を取って屈折している。淡黄灰色のものや灰白色を呈するものが多い。

大皿B 口縁端部が三角状に尖り気味に終わるもの。口縁端部下端外面に5mm程の面が形成されている。口縁部が直線的なB1、内湾するB2、外反するB3、II線部の中程で稜を取るB4の4形態のあることは大皿Aと同様である。ただし、B4は、A4ほど屈折せず、口縁部の外面下部が窪み気味となるものである。底部は平底で、口縁部との境は、B2にカーブの付いたものが多いが概ね良く折れている。色調は、灰白色、あるいは、黄灰色のものが多い。

大皿C 口縁部が内湾気味に単純に終わるものである。口縁部外面に撫でによる稜を残さないC1、1本の稜を残すC2、2本の稜を残すC4の3形態が見られる。底部は平底であるが、口縁部との境はなだらかなカーブを描くものが多い。黄灰色のものが多く、灰白色の色調を示すものもある。

小皿A 口縁部の端部が内側に折れるもの。口縁部が直線的に開くA1では、平底との境が屈折する。口縁部が内湾気味に開くA2は、底部は平底であるが、境はなだらかなカーブを描く。茶灰色、黄灰色等の色調を呈するものが多い。A3は2段目の撫でがやや強く、窪み気味になるもの。

小皿B 口縁部の端部が三角形状に、尖り気味になるもの。口縁部が直線的に開くB1と内湾気味に開くB2とがある。共に平底であるが、B1では口縁部との境が屈折し、B2ではなだらかなカーブを描いている。また、II線部外面の2段目の撫でがつよく、窪み気味になるB3がある。底部との境はなだらかなカーブを描くものが多い。灰白色から暗灰色の色調を呈するものが多い。

小皿C II線部の端部が単純に終わるもの。II線部が内湾して単純に開くC1では、底部との境がなだらかなカーブを描く。淡黄灰色のものが多く、灰白色の色調を呈するものもある。II線部が直線的に開くC2では、

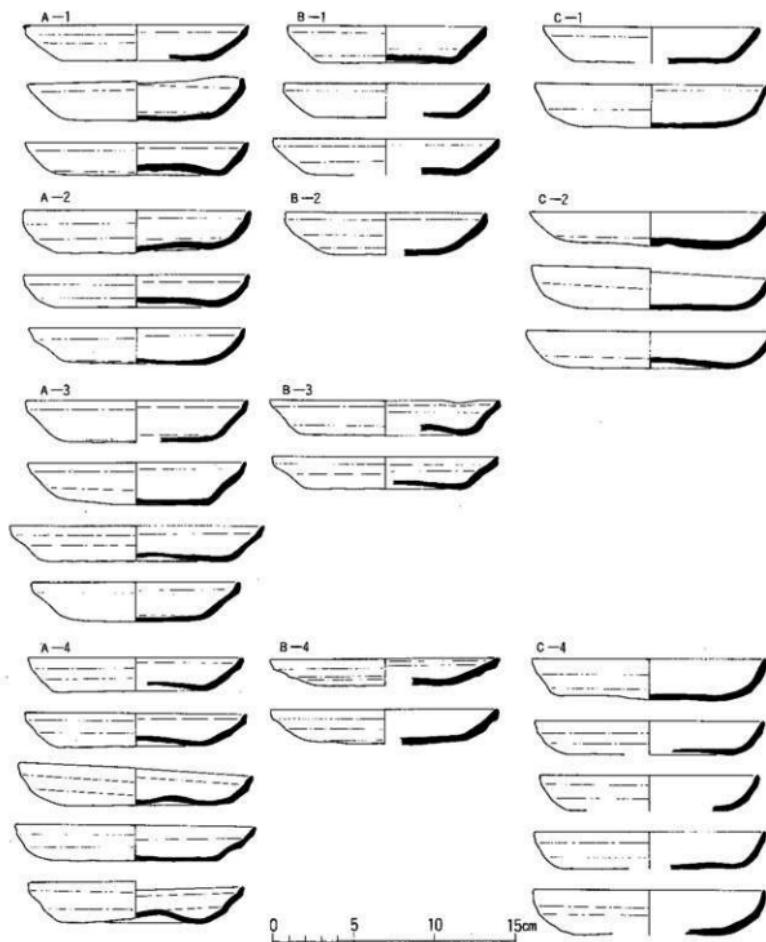


図26 北野遺跡西部地区出土大皿実測図(1)

底部との境に棱を取るものがある。2段目の撫でが強く当たっているものでは、口縁部の外間に瘤みが生じている(C3)。赤灰色や灰白色の色調を呈するものが多い。

小皿D 小皿のうち、器高が2.3cmと高いものである。口縁部はやや直線的に開き、端部の内面に段を持つ。底部は平底であるが、口縁部との境はなだらかなカーブを描く。灰白色の色調を呈している。

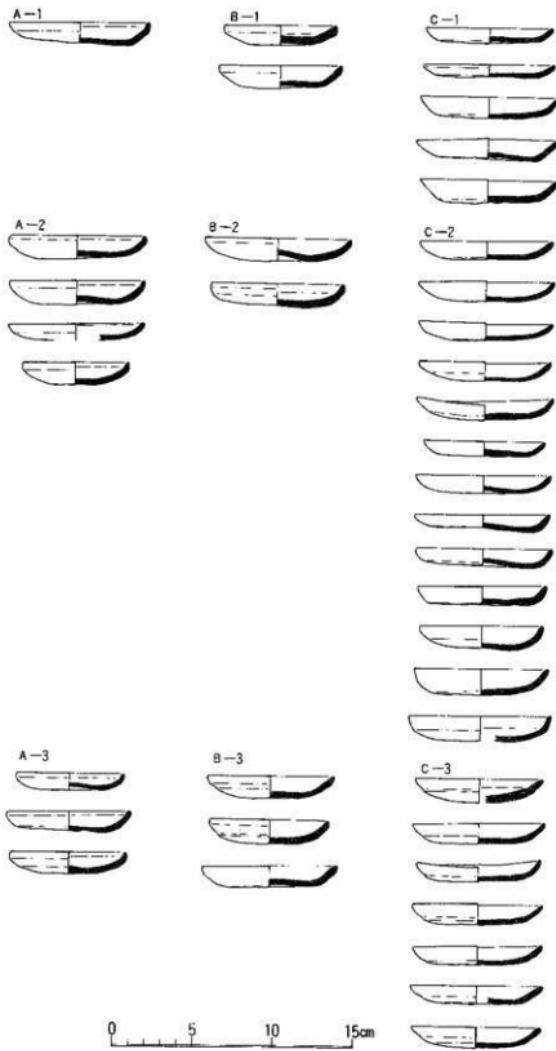


図27 北野遺跡西部地区出土小皿実測図(2)

(表) 「く」の字形の頸部で口縁部はその中程で内折し、端部は摘み出して外反する。体部は、胴部の張りが少ないものである。外面には刷毛目が施されている。胎土に紗粒が多く、赤灰色を呈し、焼成は良好である。

[山茶碗]

底部片で、幅の広い断面三角形の高台が付く。高台の外底部には模の压痕が見られる。

[陶器]

高い高台を持つ底部片である。

[鉄製品]

厚さ3mm程の鉄板で、勾玉のような形状をしているものである。先の細いほうが曲がり、勾玉の背に当たる側に刃部がある。幅の広いほうは円弧状となり、2箇所に方形の切り込みがある。また円孔が穿たれている。総長18.5cmで、刃部は12.5cmを計る。

3.まとめ

西部地区では、遺構の主なものとしては、掘立柱建物、屋敷跡を示す塙跡及び井戸跡、ピット群、祠跡等である。遺物は殆どが上師器の皿類であり、極少量の上師器の壺、山茶碗、陶器等が含まれる。

土師器の皿類については、大皿と小皿に大別できるが、形態の上では共にA~Cの同様の特徴で分類することが出来る。A~Cは更に3~4類に細分することが出来るが、この細分も大皿と小皿共に共通した分類基準によるものである。^①平安京左京四条三坊十三町の発掘調査に基づく土師器皿編年表によれば、大皿と小皿のCはA 2タイプ、BはA 3タイプ、AはA 3タイプ後半のものに対応すると考えられる。小皿のDは唯一白色系のものであるが、B 1タイプと考えて良いものである。従って、皿類は、12世紀の初頭から15世紀の間にあって、4期に大別できるものである。

上師器の皿類は、一括した出土状況にあるものは少ないが、屋敷跡を示す塙跡や井戸跡、多数のピットなどはこの皿類の示す年代観に対応するものと考へる。掘立柱建物については、その時期を示す資料を欠くが、出土土器からすれば、山茶碗あるいは土師器の壺の示す時期を当てることが可能である。

(注)

①横出洋二「土師器皿の分類と編年表」(『平安京左京四条三坊十三町 一 長刀鉾町造跡 一』平安京跡研究調査報告第11輯 昭和59年所収)

ホ. お わ り に

かつて出土している石棒に対応する遺構は検出できなかったが、東部地区において、绳文時代晩期の土器片が出土しており、付近に同時代の遺構の存在する可能性を残した。また、今回の調査では、新たに6世紀末から13世紀にかけての建物群が検出され、また12世紀から15世紀の屋敷跡が検出される等当遺跡に関する新知見を得ることができたのである。建物群については、谷水田の開発や付近に分布する古墳との関係、また、南に広がる条里水田の開発との関係などの問題を提示する資料であるし、屋敷跡は、西側の山丘に所在する小谷城とのかかわりの深いものと考える。

5. 東浅井郡湖北町伊部遺跡

イ. はじめに

伊部遺跡は、県営ほ場整備工事による仮排水路工事中に発見された遺跡である。当該工事範囲内においては、ほとんど田面の切り下げが無いため、排水路工事部分においてのみ発掘調査を実施した。

調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。調査の担当は滋賀県教育委員会文化財保護課 技師 田中勝弘が当たり、本報告書も田中が執筆した。調査にあたっては、京都産業大学考古学研究会員の諸氏の補助を得た。

ロ. 位置と環境 (図1)

伊部の集落は、湖北町と浅井町との町境に位置する標高143m の雲雀山の西側山裾にあり、標高495m の小谷山の南側に位置する。遺跡は、集落の北側で発見された。付近には、西の虎御前山、北の小谷山、東の雲雀山や瓜生の山丘に極めて多数の古墳が分布しているが、平地にあっては周知されている遺跡の希薄な地域であった。

ハ. 調査の経過 (図2)

調査は、工事による排水路計画部分にかぎり、当初トレンチ調査とした。その結果遺構、遺物包含層などが確認された場合にかぎりトレンチを拡張し、それらの分布範囲を確認したうえで発掘調査を実施することとした。

二. 調査の結果

トレンチ調査により遺構を確認したのは第1トレンチにおいてのみである。トレンチを横切る形で東西方向に伸びると考えられる溝状遺構を検出したのであるが、このトレンチを中心南北方向に拡張したが、結局この溝跡を確認したのにとどまった。しかし、この溝跡からは、極めて良好な状態で土器類の出土を見ている。

I. 遺構 (図3)

第1トレンチで検出した溝跡1条のみである。幅2.2m 、深さ0.3m で東西方向に向いている。3層にわたる土の堆積があり、その最下層から多数の土器が出土している。

II. 遺物 (図4、5)

第1トレンチの溝跡の最下層から出土した土器類のみである。壺7個体分、かめ7個体分、器台6個体分、高杯3個体分、鉢1個体分が出土している。

〔壺〕 (図4)

長頸壺 (12~14) 14は張りの少ない球体に近い胴部に、外反ぎみに開口口縁部が付く、口縁部内外面、体部外面に擦での痕跡がある。また、内面で、頸部直下及び胴部中程に指頭押圧痕が残る。軟質で淡赤黄色を呈し、胎土に砂粒を含む。器壁は薄い。

12、13とも口縁部のみである。ともに外反ぎみに開いた口縁部の端部をわずかに内湧させている。胎土に砂粒

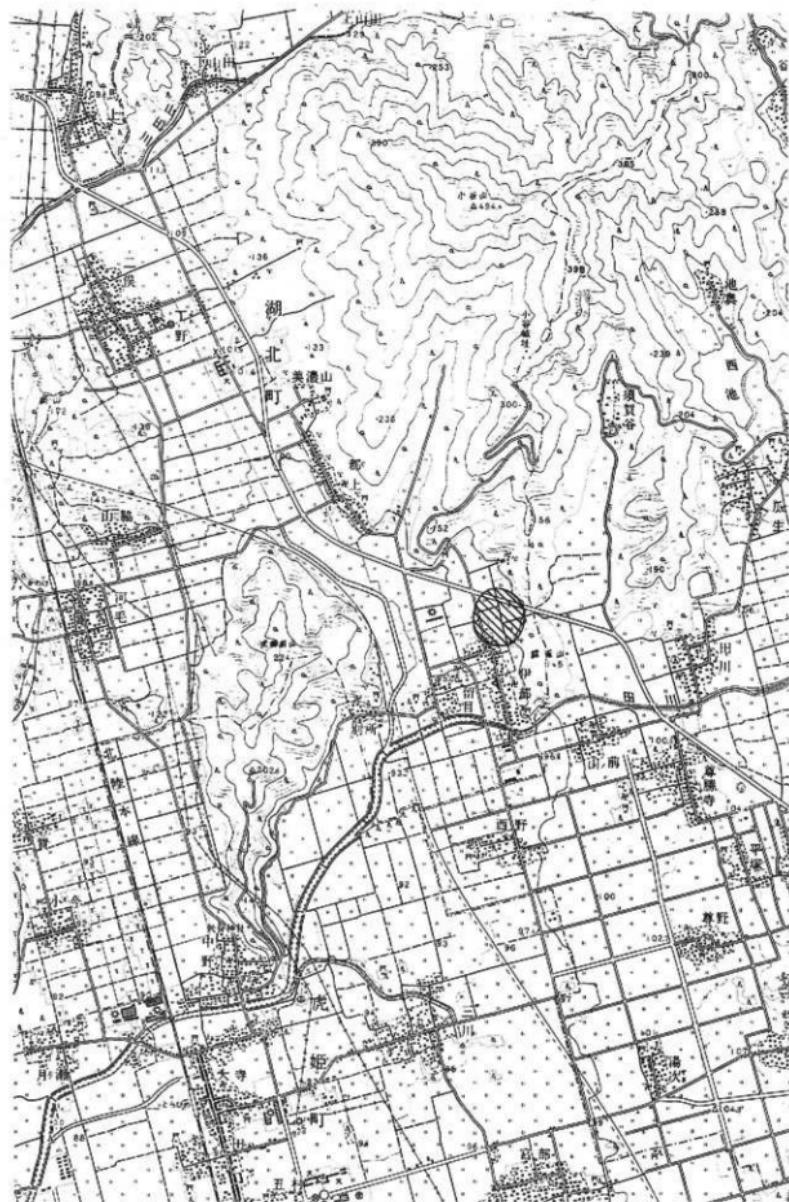


図1 伊勢遺跡位置図 (S=1/25,000)



図2 伊部遺跡付近地形図及びトレンチ配置図

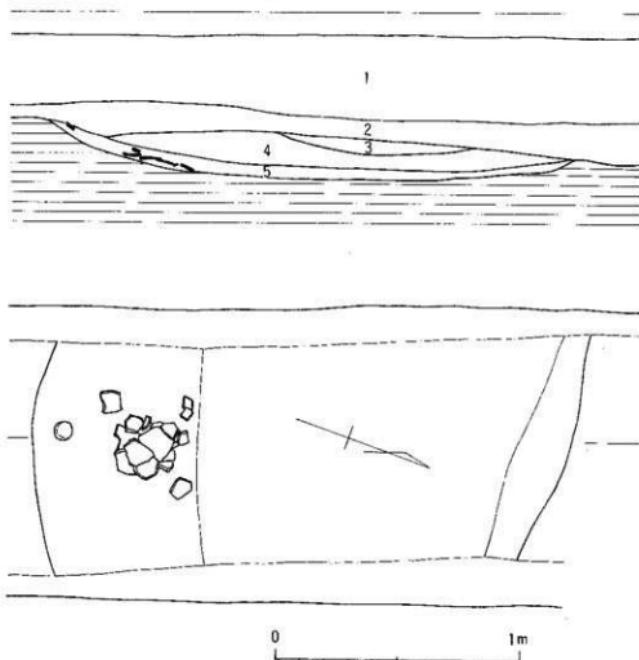


図3 伊部遺跡トレンチ1遺構及び遺物出土状況実測図

を含み、淡赤褐色ないし赤黄色を呈し、焼成は良好である。

短頸壺（9） 器高14.6cmの小形のものである。底部は平底で、胴部最大径16.9cmが中央にあってよく張り、算盤玉状を呈している。口縁部は径9.6cmで、ほぼ垂直に立つ。胎土に砂粒を含み、淡赤灰色を呈し、硬質である。

広口壺（7） 口縁部は大きく外反し、端部に面をとる。体部は中程よりやや上方に最大径があってよく張り、算盤玉状を呈している。底部は平底となる。器高24.4cm、胴部最大径23.5cmの中型の壺である。体部外面には、磨滅しているが刷毛目痕が見られる。内面は頸部直下に指頭圧痕があり、体部は撫でているようである。下底部には黒斑がある。胎土に砂粒を含み、赤茶褐色を呈し、やや軟質である。

不明壺（10） 短いが、直線的に開いた頸部に、内湾して大きく開く口縁部が付く。端部は欠損している。焼成は良好で、淡黄灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。

〔甕〕(図4)

A類（4～6） 「く」の字形に簡単に外反させた頸部と、端部を薄くして内側に折り曲げた口縁部を持つもの。6では口縁端部の屈曲部に刻み目文を施し、頸部と肩部とに7条の平行沈線文とその間に割突列点文を施している。口径17.3cm、胴部の最大径は22.2cmで胴部の上半部にあり、やや継長に膨らみ、下半部が細長い形態のものと思われる。体部の内外面共に刷毛目調整しているが、その後に撫であげて整形している。胎土に砂粒を

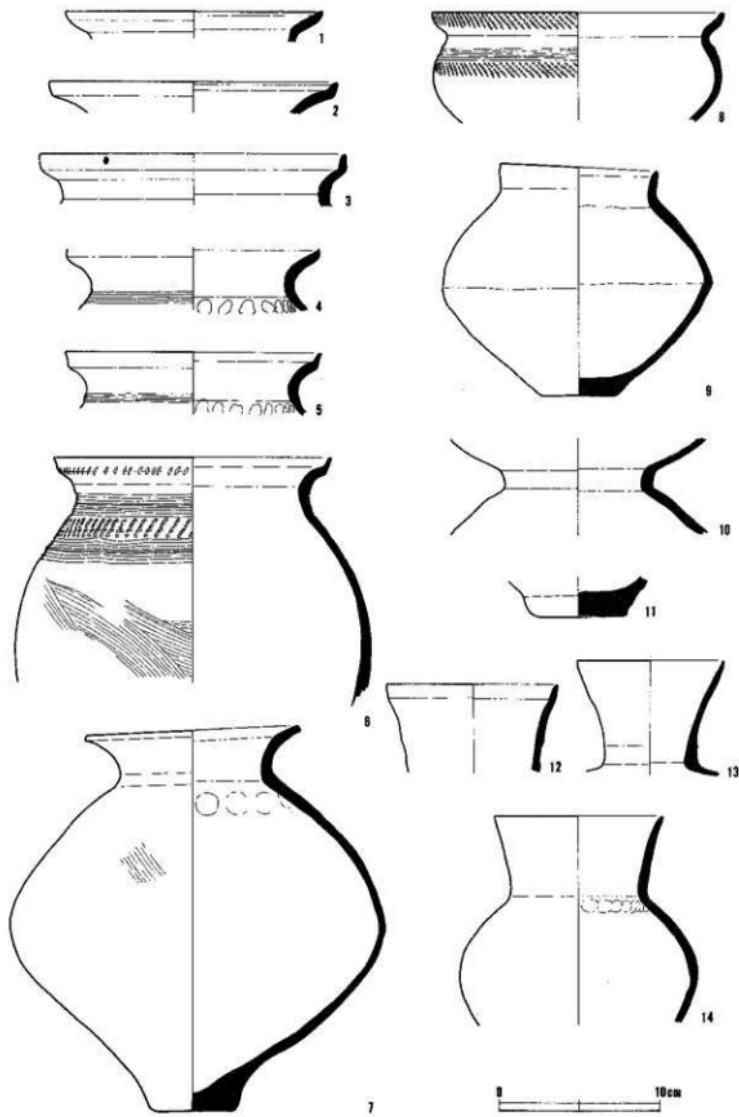


図4 伊部遺跡トレンチ1SD出土遺物実測図(1)

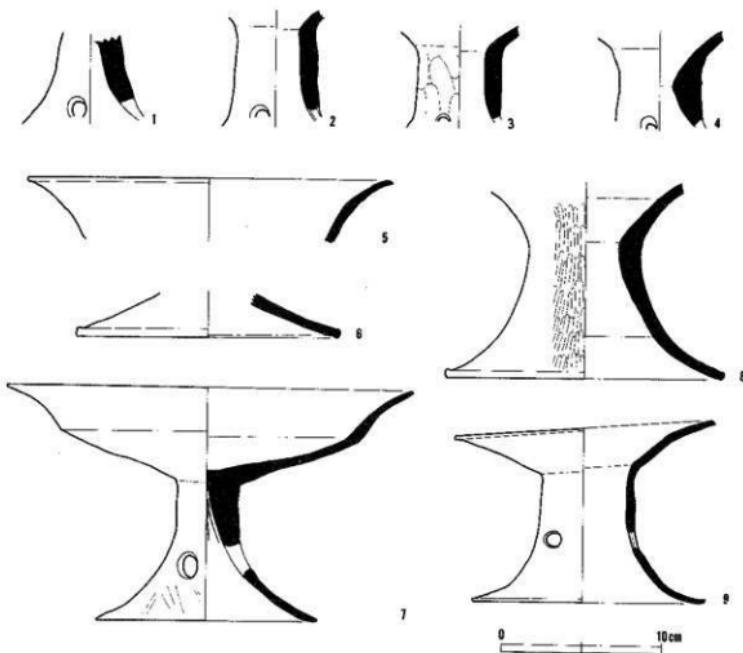


図5 伊部遺跡トレンチ1SD出土遺物実測図(2)

含み、明茶灰色を呈し、やや軟質である。4・5は8と同様の口縁部を持つが、口縁部への施文はない。施文は、頸部に5条の平行沈線文が見られるだけである。また、共に頸部内面に指頭圧痕が見られる。胎土に砂粒を含み、淡黄灰色あるいは淡赤灰色を呈し、軟質である。

B類(3) 口縁部は「く」の字形に簡単に外反し、その端部は折り曲げて垂直に立たせている。無文である。胎土に砂粒を含むが焼成は良好で、淡黄灰色を呈する。

C類(1・2) 口縁部は大きく外傾し、その端部を短く内側に折り曲げる。口縁端部に内傾する面を持つ。胎土は1に砂粒が含まれるが、2は精良である。焼成は共に良く、赤茶褐色あるいは淡灰褐色を呈する。

(底 部) (図4)

IIは盃あるいはかめの底部である。外底部の中央がわずかに窪む。胎土に砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。焼成は良好である。

(器 台) (図5)

いずれも太い脚部を持つものであるが、形態的に2類ある。

A類(9) 脚台は基部から直線的に伸び、中程から大きくカーブしながら開いて縁部にいたる。脚部には円孔が3方に穿たれている。受け皿部は僅かに外反しながら開く。受け皿部径16.5cmで、脚部径14.6cmに対して僅かに大きい。器高は11.4cmを計る。受け皿部及び脚部とも外面を鍛磨きしているが、内面は不明である。胎土

に砂粒を少し含み、淡赤褐色を呈す。焼成はやや不良である。

B類(8) 脚台が基部からカーブしながら開き、裾部に毛る。端部は僅かに上方に肥厚し、面を取る。受け皿部は、端部を欠失しているが、斜上方に大きく開く。脚部部径17.4cmとA類より大型で、器壁も厚い。外面は施磨きしている。脚部の円孔はない。胎土に砂粒を少量含むが、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。

その他(2~4・8)8は脚部部で、形態的にはB類に似ている。2・3は脚筒部で、A類に似たものであり、ともに3方に円孔を穿っている。4は基部から聞く脚部を持つようでありB類に似ているが、3方に円孔が穿たれている。しかし、2~4のいずれもA・B類に比べて筒部が細く、器壁が厚い。

〔高杯〕(図5)

7では、杯部が口縁部と下底部との境界に棱を取り、口縁部を外反させて大きく開く。脚部は細く、裾部で大きく開く。脚部には3方に円孔が穿たれている。脚部外面は施磨きされているが、他は不明である。胎土には僅かに砂粒が含まれているが、焼成は良好で、黒灰褐色を呈している。5は7と同形態のものの口縁部の破片であろう。1は脚の筒部であるが、7と同形態のものの脚として差し支えはなかろう。

〔鉢〕(図4)

8の1点で、浅鉢形のものである。口縁部はS字形に屈曲し、胴部は丸みを持つが底部は不明である。口縁部には刺突列点文が配され、肩部に平行沈線文と刺突列点文が配されている。胎土には砂粒がふくまれ、暗褐色を呈し、やや軟質である。口径は18.2cmを計る。

ホ。ま と め

当遺跡出土の土器群は、極限られた狭い範囲ではあるが、溝跡出土として一括性のあるものと考える。その上器組成は、総数24点のうち壺7点、甕6点とほぼ同数である。器台5点、高杯3点と器台の数が極めて多い点も注意される。同じ溝跡出土で、欠山の時期と考えている高月町円通寺遺跡では、甕対壺の割合が3対1程度となっている。豊穴住居跡が検出されている余呂町坂口遺跡は、畿内V様式末から布留式古段階並行期の土器類が出土しているが、その割合は同様である。壺類に関しては、円通寺・坂口両遺跡に、東海の影響を受けた口縁部を飾るもののが多数を占めているのに対し、当遺跡では、装飾性の無い広口壺、短頸壺のほかに小型の長頸壺が多い。長頸壺は、畿内V様式の典型的な形態を受け継ぎながら、一方で、体部が球体に近い直口のものが含まれる。甕類ではほとんどが近江型の受け口状口縁をなすものであり、その形態に2類がある。概して装飾性の少ない点壺類と同様である。器台は数量の多い割に形態差が少ない。何れも鼓型のものであるが、受け皿部は単純である。高杯も1種類のみであるが、欠山の特徴である脚部が湾曲するものはない。

このように見えてくると、欠山の特徴を持った高杯などを含み、庄内並行期と考えている円通寺遺跡に比べて、より畿内V様式に近い特徴を有している。しかし、長頸壺の体部の退化程度や直口壺の存在など典型的な畿内V様式に比べると新しい要素が多く含まれている。また、高杯や鉢などの小数のものに東海系のものが含まれるが、数の多い壺は畿内の要素が強く、甕は近江の特徴を有している。

ヘ。おわりに

詳細な検討は後者に譲るが、弥生時代後期終末の土器群の一様相を示す一括資料としての価値を持つものと考える。狭い範囲の調査であり、土器類の出土遺構の性格は不明であるが、周知された遺跡の極めて少ない当遺跡付近において、今回の発見は、付近に多数分布する古墳を形成した社会の前代の様子を知らしめることとなった。

6. 東浅井郡湖北町留目遺跡

イ. はじめに

留目遺跡は、寺院跡として周知されていた遺跡である。しかるに、当該地において県営のほ場整備工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施することとなったのである。発掘調査は、当初専門部に限定して実施していたが、その途中、南西方の虎姫町との町境付近の畠地において、多数のかわらけの出土することを地元の方から教えていただいた。実地調査した結果、中世の土師皿が多数分布しており、生産遺跡か寺あるいは神社跡を想わせるものであった。この付近も工事区域に含まれており、地元及び関係機関との協議の結果、引きついで調査を実施することとした。

調査にあたっては、地元留目区の方々、湖北町教育委員会、京都産業大学考古学研究会の諸氏にお世話になつた。ここに記して謝意を表します。

ロ. 位置と環境 (図1・2)

当遺跡は、東浅井郡湖北町留目地先に所在する。西に虎御前山、北に小谷山、東に小谷山から派生する雲雀山に開まれた狭い平地に位置している。しかし、小谷山と虎御前山との間に北国脇往環道が通過し、小谷城が築かれているように、交通の要所ではある。周囲の山裾などに多数の古墳が築造されているが、平地に立地する遺跡は少なく、わずかに、当遺跡の南側の虎姫町中野地先で弥生土器の出土を伝え聞くにすぎない。また、東側の伊部地先の本報告書掲載の遺跡も最近知られた遺跡である。

ハ. 調査の経過

調査は、遺跡地に排水路計画がないため、田面の切り下げ計画にかかる部分に限定して実施した。調査の対象地が二箇所に分散したため、調査地点の小字名を取って、当初部分を堀大屋敷地区、追加した地点を松橋地区として区別した。

二. 調査の結果

I. 遺構

1. 堀大屋敷地区 (図3)

いずれも鎌倉時代の遺構である。大型の土壙3基 (D 1~3)、ピット群、落ち込み (D 4) 等を検出している。
(大型土壙) 炭、焼土、灰、焼け壁などと共に土師器の皿や陶器などを含んだ大型の土壙を3基検出している。

D 1は、 2.4×5.6 mの不整形なもので、深さは0.29mと浅い。

D 2は、 3.5×3.5 mの方形に近いもので、0.29mの深さを持つ。

D 3は、 4.7×5 mの方形に近いもので、深さは0.18mを計る。

(落ち込み (D 4)) 調査区の北西部で検出している。焼土や炭などを含むが、さほど多くはない。深さは0.25m程

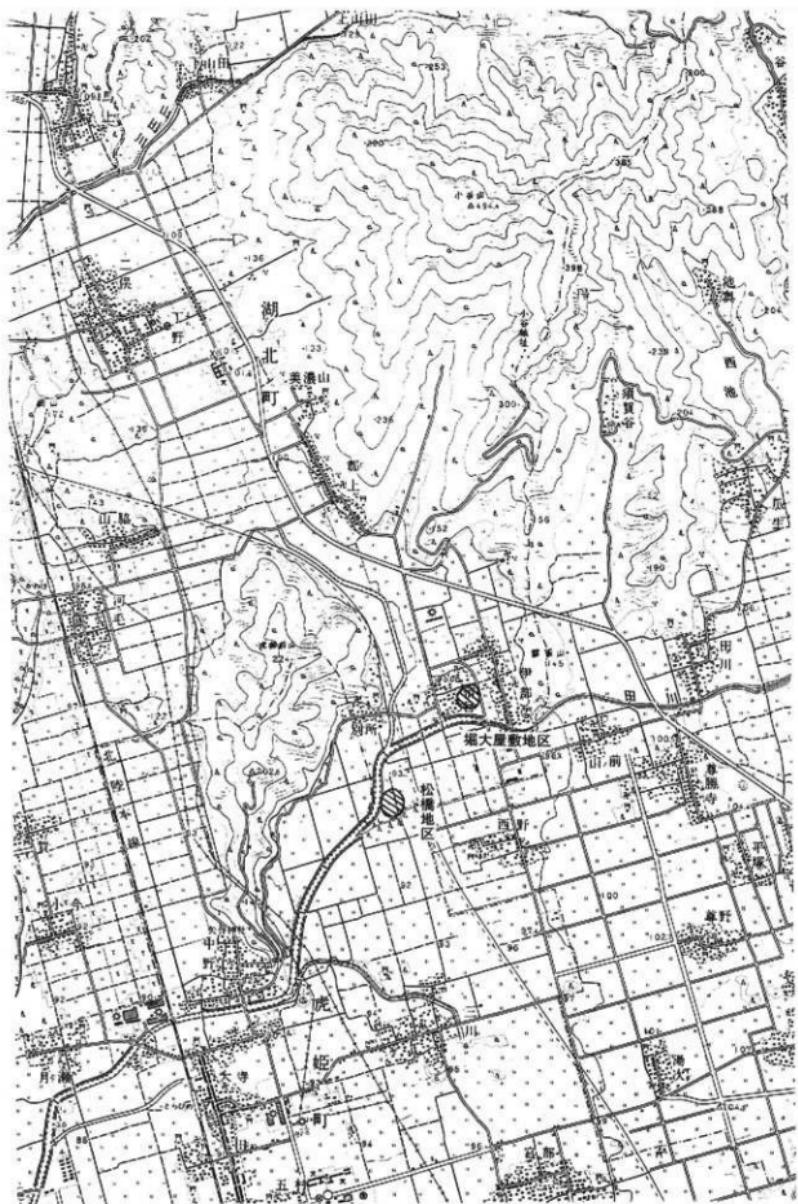


図1 留目遺跡位置図 ($S = 1/25,000$)

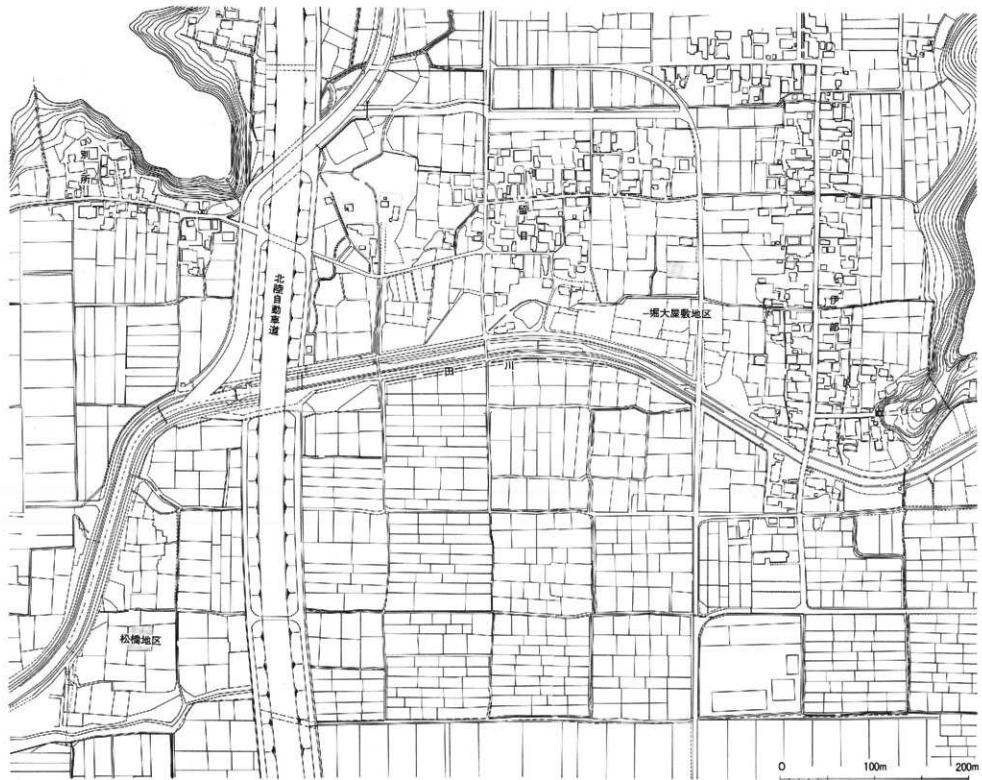


図2 留目遺跡付近地形図及び調査地区位置図

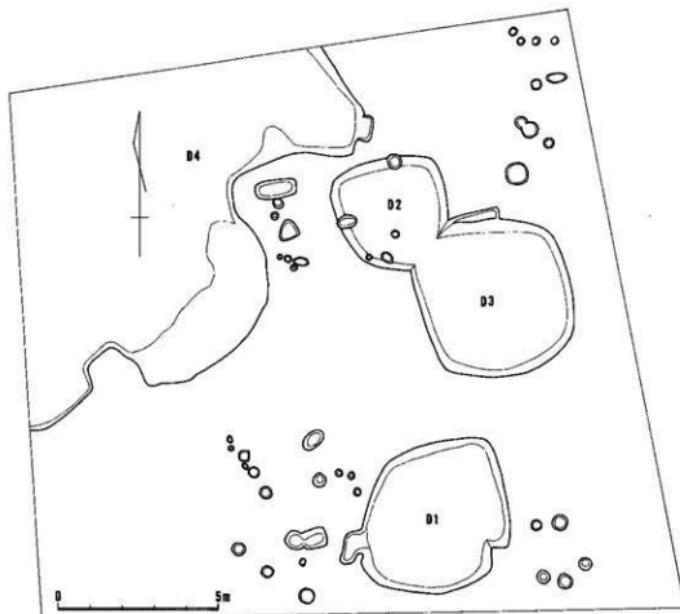


図3 留丹遺跡櫻大屋敷地区遺構平面実測図

で、北西方向に傾斜している。

(ピット) 50基弱のピット群を検出している。埋土は大型の土壤に似ている。建物を思わせる規則性はない。

2. 松橋地区(図4~18)

[鎌倉時代](図5~8)

溝跡、大型土壤、ピット群、井戸跡などを検出している。何れからも土師器の軋を多量に出土している。

(溝跡) 東西方向に走るもの7条、南北方向のもの6条を検出している。

M1は、東端をM3に切られて終わる。東半分が幅狭く、20cm程で、西側で広くなり、最大幅85cmを計る。深さは10~20cm程で、高低差はほとんどない。

M1'は、M1に切られて重複している。やはり東端をM3に切られて終わる。幅は不明で、深さは5~10cmと浅い。

M6は、調査区の中程で、M7と直角に交わる。幅は一定でなく、50~140cmを計る。

M10は、M6の南3m程、M1より14.5mの位置にあるもので、東端はM12に交わって終わる。中程でM7と交わるが、M7以西は幅が一定で、25cmを計り、直線的である。M7以東は形が乱れ、幅も一定ではなく、最大90cmを計る。深さは15cm程である。

M9は、M7からM12の間にあって、M10と1m程の間をおいて並行する。幅は30~45cmとほぼ一定で、直線

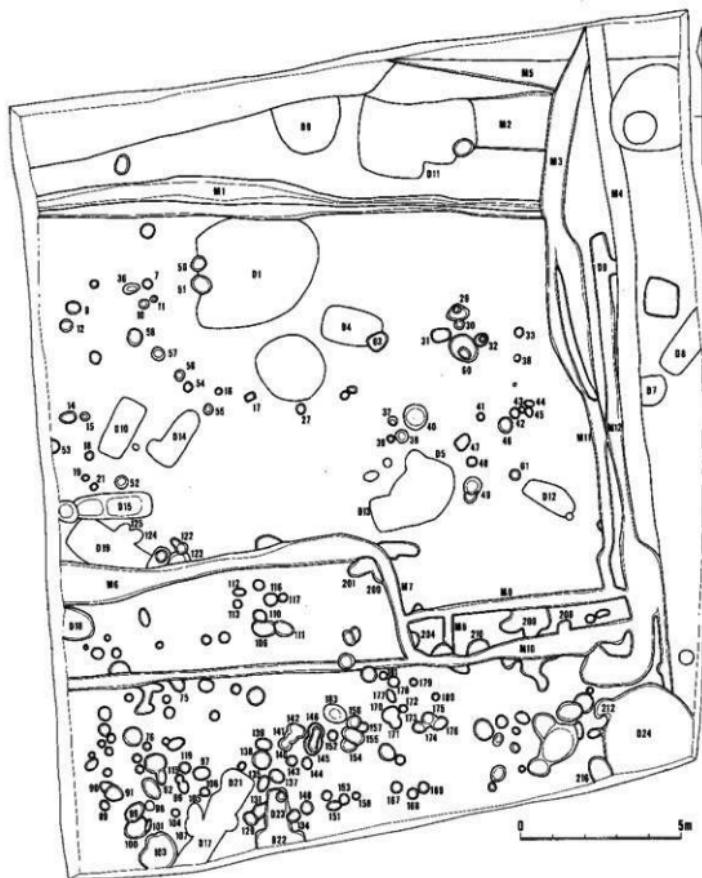


图4 留日遺跡松橋地区遺構平面実測図

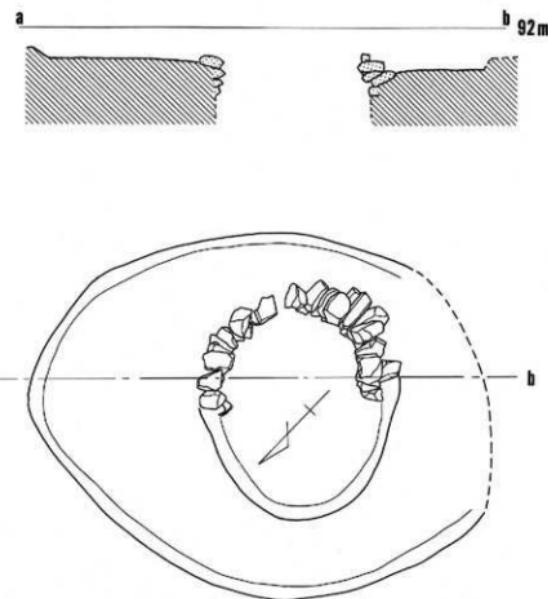


図5 留目遺跡松橋地区井戸跡(D1)実測図

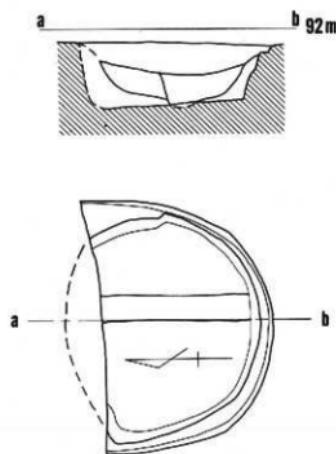
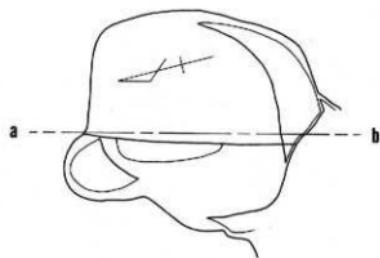


図6 留目遺跡松橋地区D9実測図

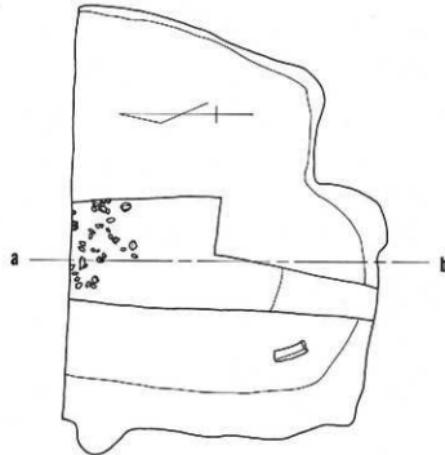
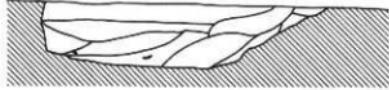
a b 92 m



0 1 2m

图7 留目遺跡松橋地区D11実測図

a b 92 m



0 1 2m

图8 留目遺跡松橋地区D5実測図

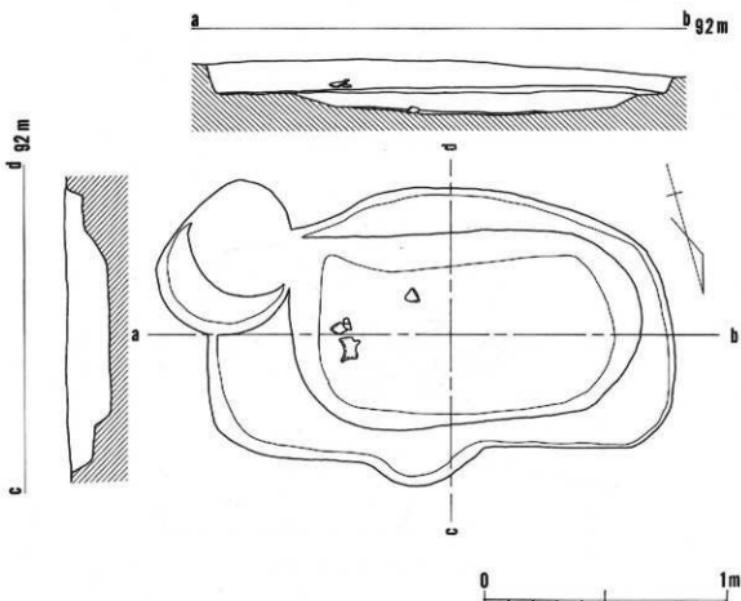


图9 留目遺跡松橋地区D4実測図

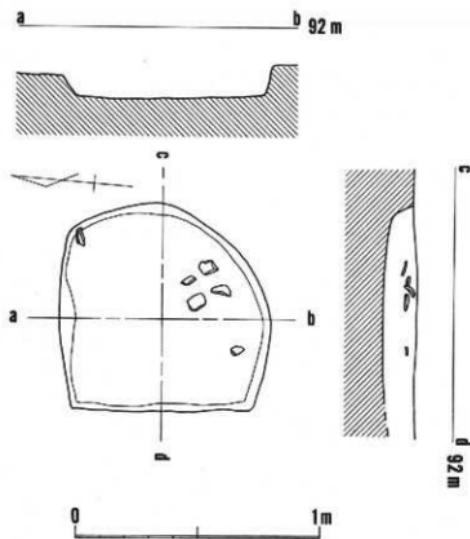


图10 留目遺跡松橋地区D7実測図

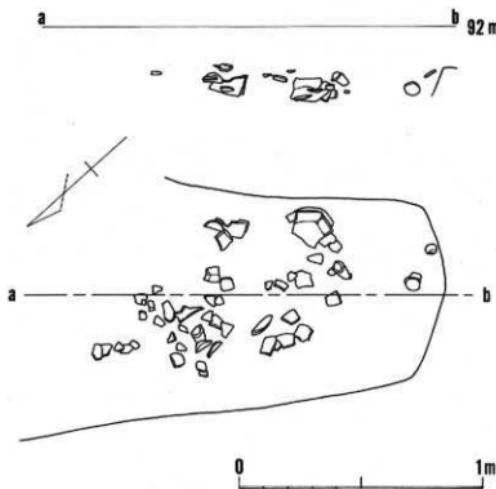


图11 留目遺跡松橋地区D8実測図

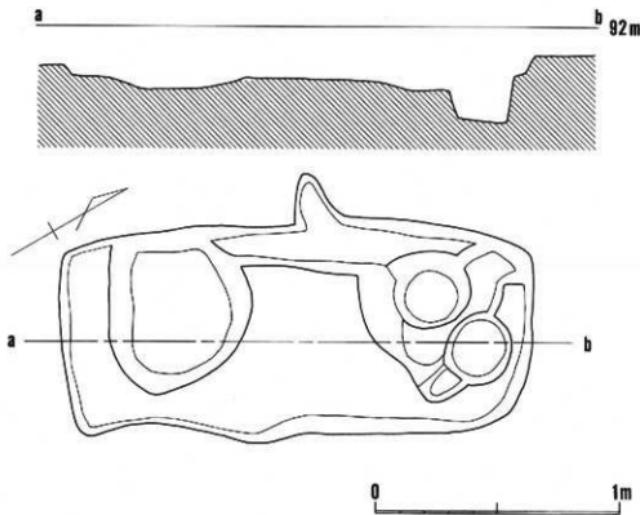


图12 留目遺跡松橋地区D10実測図

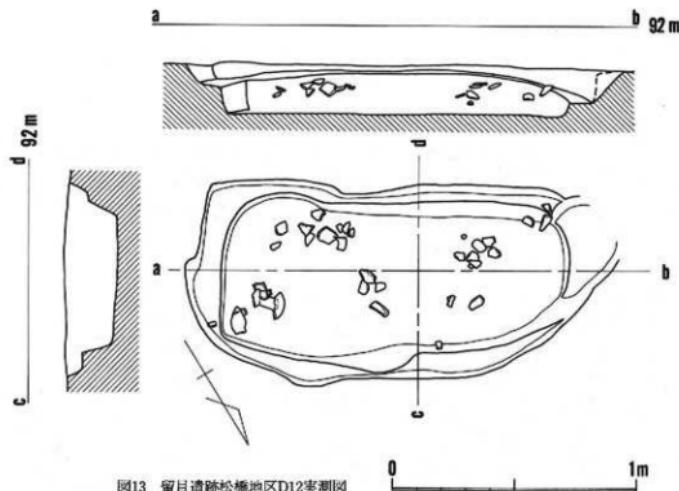


图13 留目遺跡松橋地区D12実測図

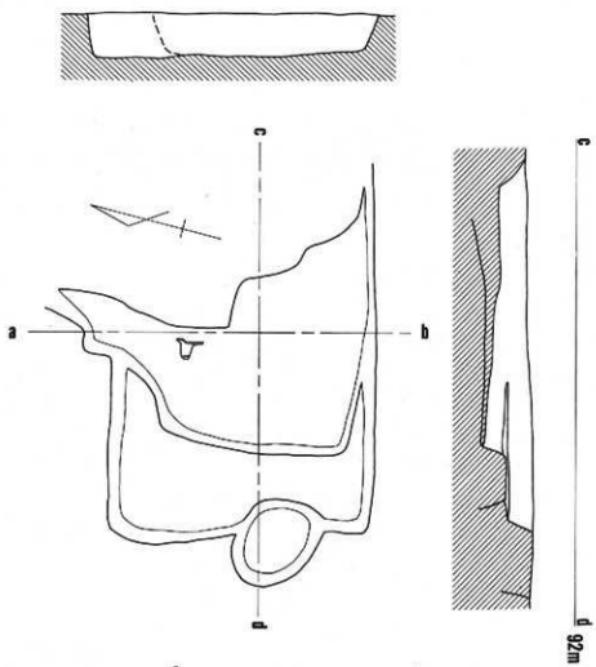


图14 留目遺跡松橋地区D13実測図

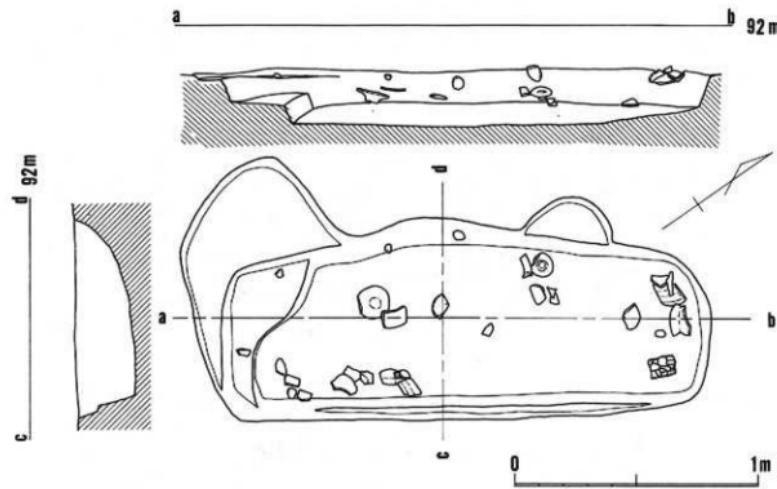


図15 留目遺跡松橋地区D14実測図

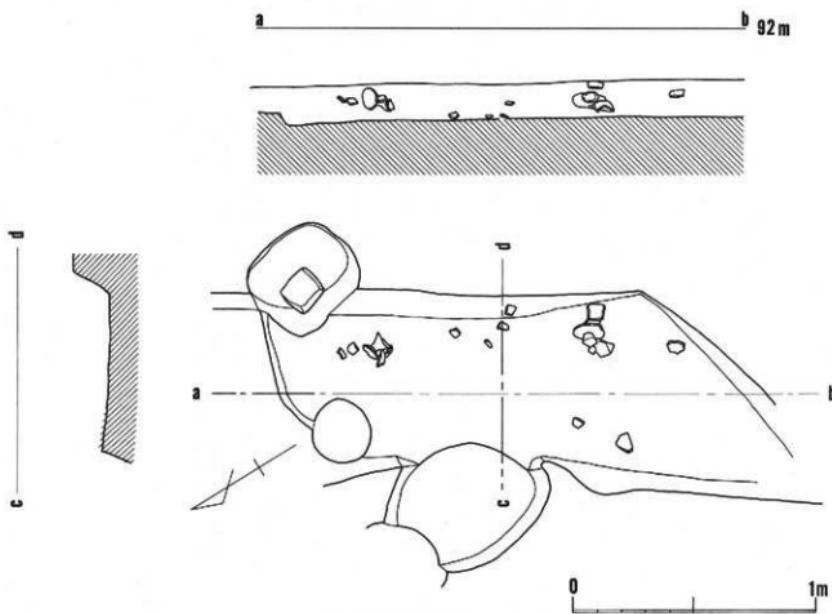
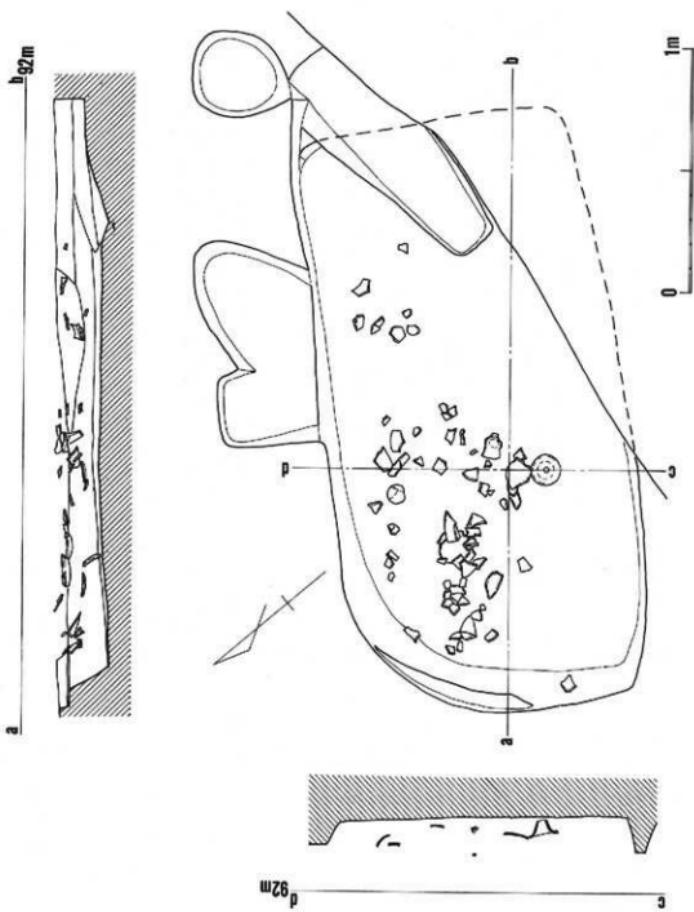


図16 留目遺跡松橋地区D17実測図

图17 留日道断层带地区D19井测图



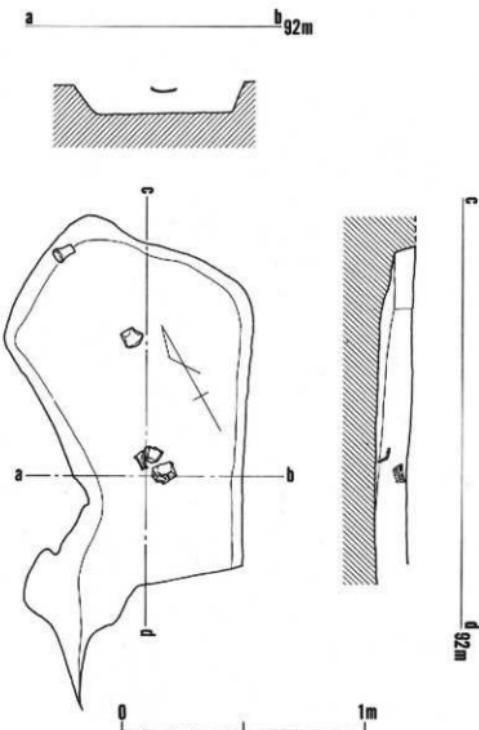


図18 留目遺跡松橋地区D21実測図

的である。

M5は、M3に切られるもので、北側に傾斜している。溝になるかどうか不明である。

M2は、D11とM3の間にあって、両者に切られる。幅は150~180cmで、深さは約10cmである。

M4は、M12に切られる。幅55~75cmで、深さは20cmほどで、底部は比較的平坦である。高低差はほとんどない。

M3は弓状にカーブし、北端をM4に切られ、南端はM11と合流する。幅55~85cm、深さ10~20cmで、南寄りがわずかに深い。

M12はM11とM4に挟まれ、M4を切る。北はM3の中程で途切れ、南はL字形に折れ曲がって終る。幅30cmほどであるが、M9とM10とに直行するあたりで広くなり、最大1mほどとなる。深さ10cmほどの浅いものである。

M11は緩やかなS字カーブを描き、北はM3と合流し、南はM9と直行する。深さ10~20cmで、底部は比較的平坦である。

M7は、M6の東端からM10にかけての短いものである。幅は35~45cmとほぼ一定である。

M8は、M9とM10との間にあって、それぞれに直行している。幅30cmを計る。

(大型土壙) (図6~8) 5基を検出しているが、特徴的なものはD9、11、5の3基である。

D9(図6)は、短径2.15m、長径1.7m以上の楕円形になると思われるものである。深さは54cm以上あり、ほぼ垂直に掘られている。下層に暗灰色を呈した灰の層が厚く堆積している。この上に2~3層の堆積土があるが、何れの層からも土師器の皿が多量に出土している。なお、この土壙は上端で5cmほどの段があり、下段の掘り方は径1.75mほどの円形となっている。

D11(図7)は、不整形な掘り方を呈している。50cm程を掘下げたが、緩やかな傾斜をもって掘り進められている。横壁に沿って厚さ10cm程の灰混じりの暗灰色粘土が堆積しており、多量の土師器の皿が包含されていた。この層の上に、やはり横壁に沿って堆積した2層の土の上に、炭や灰の層が厚く堆積していた。この層にも土師器の皿が多量に包含されていた。

D5(図8)は、1.94m程の円形に近いもので、北側によって深い掘り方となっていて、深さ53cmを計る。横壁全体に灰を多量に含んだ厚さ10cm程の茶褐色土の堆積があり、この層を中心に多量の土師器の皿が出土している。この上に6層の堆積層が認められるが、下層ほど灰を含む量が多い。

(井戸跡) (図5) 石組井戸(D1)と板組井戸(D25)とそれぞれ1基づつ検出している。

D25はM4を切り込んでおり、また、耕土掘削途中に発見したもので、時期的に新しいものである。

D1は直径1.1m程のものでM1に切られている。短径3m、長径3.7m以上の楕円形の大きな掘り方をもつ。

(ピット) 200基以上のピット群を検出している。大小様々であるが、円形あるいは楕円形のものが多い。さほど深くなく、何れからも土師器の皿が出土している。

[古墳時代] (図9~18)

この時代のものとしては土塙墓のみで、前期にさかのぼるもの15基(D4, 7~10, 12~15, 17~19, 21~23)を検出している。何れからも棺上部に置かれていたものが下落したような状況で土器類の出土をみている。墓壙は、長さ1.44m~2.46m、幅0.69~1.26mで、ほぼ垂直に掘り込んでおり、墓壙規模に近い箱型の木棺を埋設したものと思われた。

D4(図9)は、1.92×12cmの規模を持ち、0.23mの深さを持つが、2段掘りとなっている。2段目は1.44×0.8mで、棺の規模に近い数値と思われる。およそN12°Eの方向に直交する。

D7(図10)は、M4に切られ、長さは0.86mしか残っていないが、1.9m以下である。幅は0.87mを計る。およそ磁北に直交しているようである。

D8(図11)は、長さが2.42m以上あり、群内で最長のものと思われる。幅は0.98mである。N32°30'Eの方向にある。

D9は、両端をM4とM12に切られ、長さは不明である。幅は0.5mを計るが、上塙墓になるかどうか判然としない。

D10(図12)は、1.94×0.9mの規模を持つが、西側の横壁部分に段を持ち、0.73mの幅となっている。棺幅を示すものであろう。N27°30'Eの方向にある。

D12(図13)は、1.68×0.85mの規模を持つ。周囲に段を持つ2段掘りとなっており、二段目は1.44×0.69mである。N32°30'Eの方向に直交する。

D13(図14)は、D5に切られており、長さは不明であるが、残存長は1.2mをはかる。幅は1.1mである。

東短辺にやや幅の広い段を持つ。長辺両側にも段があるよう、二段目の幅は0.86mを計る。東西に長く、N11°Wに直交する方向にある。

D14(図15)は、2.01×0.83mの規模を持つ。南短辺と東長辺側に段があり、二段目で1.88×0.77mを計る。壇底は北側がやや浅くなっている。N32°30' Eの方向にある。

D15は、磁北に直交してほぼ東西方向にある。約2.5mの長さを計るが、壇底が東側1.5mの長さで深くなつており、西寄りで土師器の皿の破片が出土しており、西半分は後後に被掘されていると考えられる。従って、およそ1.5×0.8mの規模を持つものと思われる。

D17(図16)は、D21を切る。長さ2.46m以上、幅0.85mを計る。N32°30' Eの方向にある。

D18は、土師器の皿の破片が混在しており、土墳墓かどうか不確実であるが、方向はN12°Eに直交して東西にある。長さ1m以上、幅1mを計る。

D19(図17)は、N32°30' Eの方向に直交して東西に長い。東端がM6に切られ、長さは不明であるが、2.7m以上、3m以下である。幅は1.26mを計る。西短辺が二段になっており、棺は20cm程短いものと思われる。

D21(図18)は、南端をD17に切られ、長さは不明であるが、2m以上である。幅は1.02mを計る。N32°30' Eの方向にある。

D22は、ほぼ東西方向にある。D23を切る。長さ1.6m、幅0.6m以上である。

D23は、ほぼ磁北方向にあり、南端はD22に切られている。長さ1.3m以上、幅0.8mを計る。

II. 遺 物

1. 墳大屢数地区(図19~22)

陶磁器、土師器等が出土している。何れも3基の土壙から出土したものである。3基の土壙は時期差がないと考えるので、一括して説明していくこととする。

[土師器]

すべて皿類である。口縁部径を横軸、器高を縦軸にして度数分布表を作成し、高さを高径比(器高÷口径×100)でみると、31と器高の高いもの、11から14の間にあって器高の低いもの、15から22の間にあるものの3類に区別することができる。口径の規模からは、7cm以下、7.4~9cm、10~12.8cm、15cm以下の4類に区別できる。器高の高いものは口径の小さいものに見られ、器高の低いものは口径7.4~8cmと小ぶりのもの、15cmと最大規模のものにみられる。以上から、AからEの5類に分類した。次に、形態的な特徴から分類すると、I類として、口縁部に内湾して開くものをあげることができる。これには底部が上げ底になるものと丸底風になるものとがある。上げ底になるものにはA類の規模のものが多く、丸底風になるものはA類のほかB類の規模のものが見られる。II類としては、内湾して開く口縁部の端部を僅かに外反させ、内側に丸く曲げて納めるものを上げる。底部は丸底風のものとなる。規模はA類と最大規模のC類になるものが多い。III類は直線的に開く口縁部の端部を上方に突出するもので、底部は平底となる。規模はB類である。IV類はIII類と同様であるが、口縁端部が外反するものである。底部は平底で、規模はC類と大きいものである。V類は内湾気味に開く口縁部の端部が外湾するものである。底部は丸底風となる。B類の規模である。VI類は平底風の底部から開く短い口縁部を持つもので、極めて浅いD類のものである。VII類はII類と同様な形態を示すが、口径に比べて器高の高いものである。以上から、I.II=A、I.III.V= B、II.IV=C、VI=D、VII=Eと言った規模による形態分類ができる。

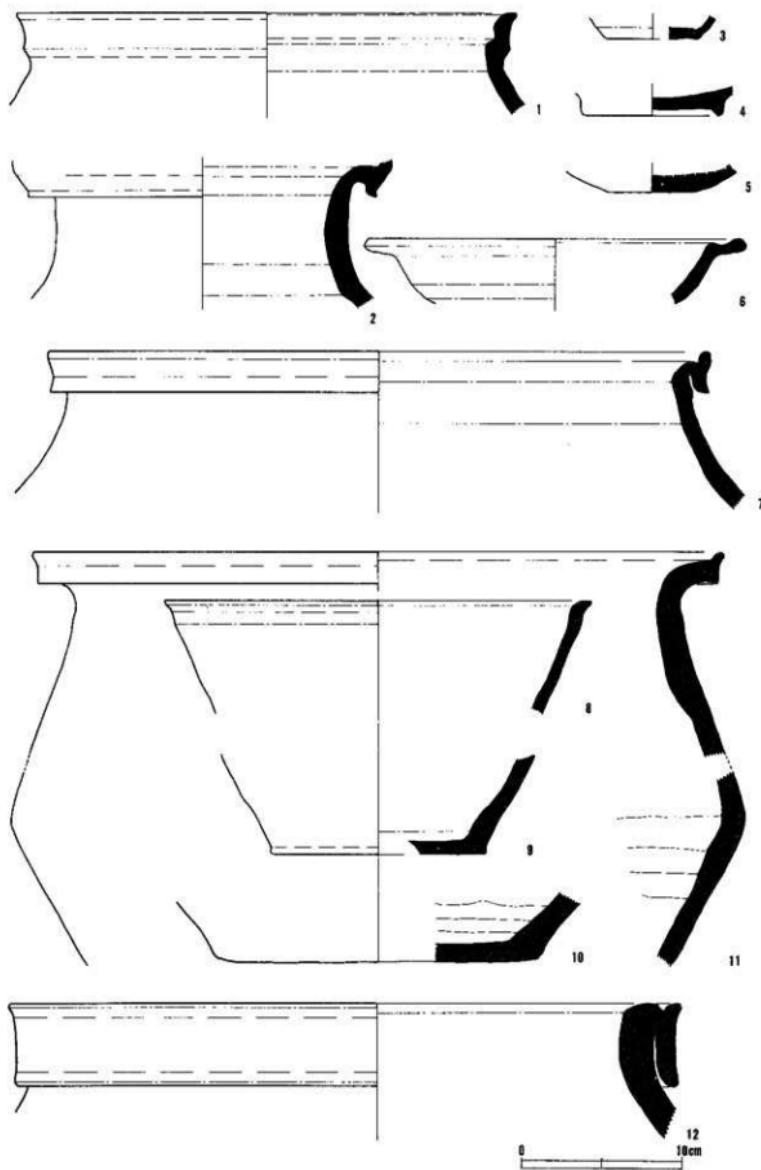


图19 留目遺跡堺大屋敷地区出土遺物実測図(1)

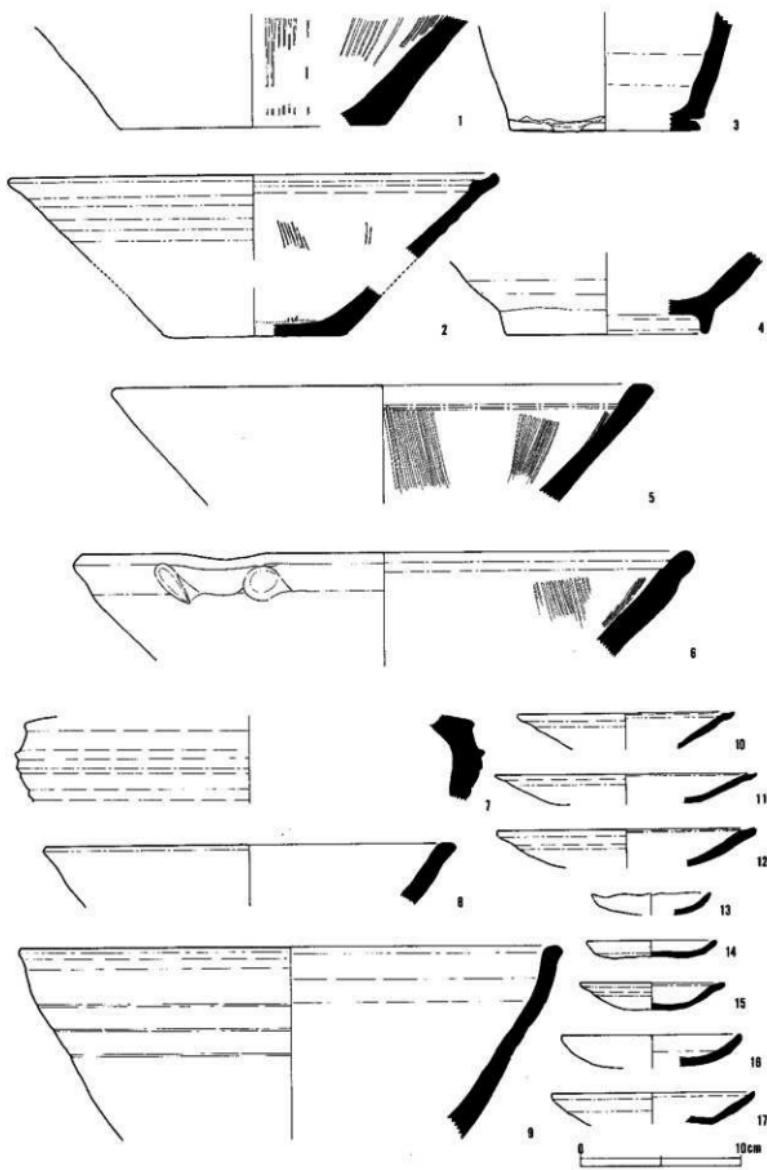


图20 留目遗址湖大屋敷地区出土遗物实测图(2)

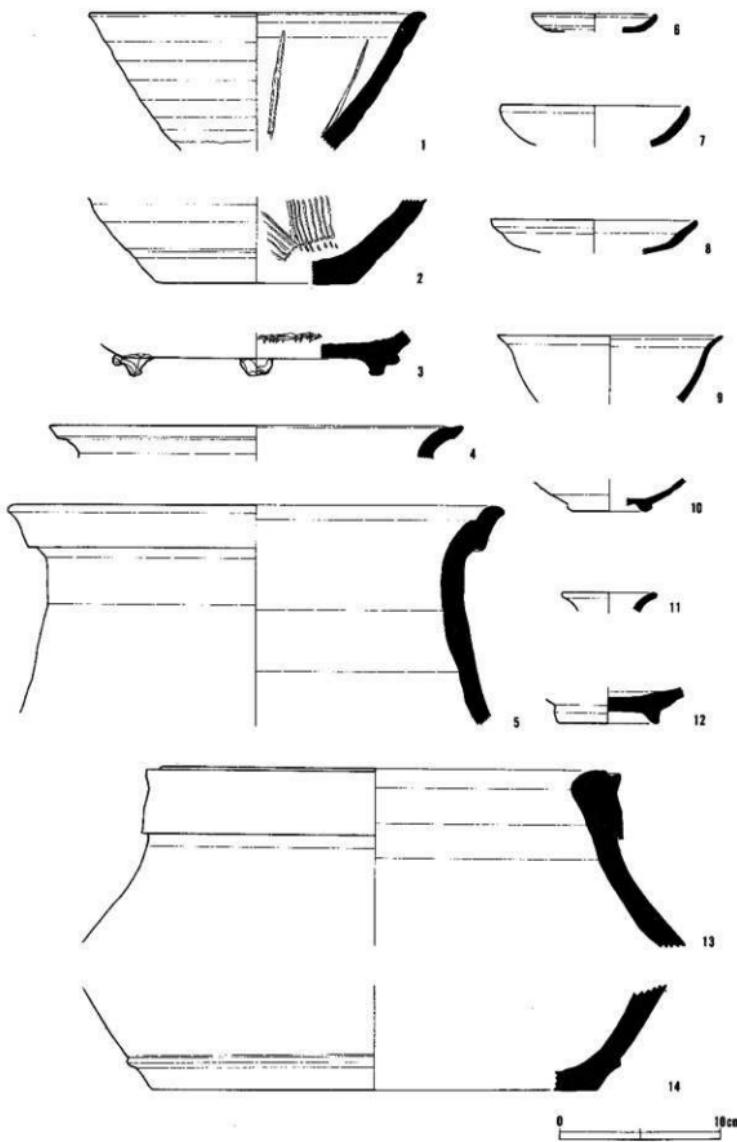


图21 留几遗址墙大屋敷地区出土遗物实测图(3)

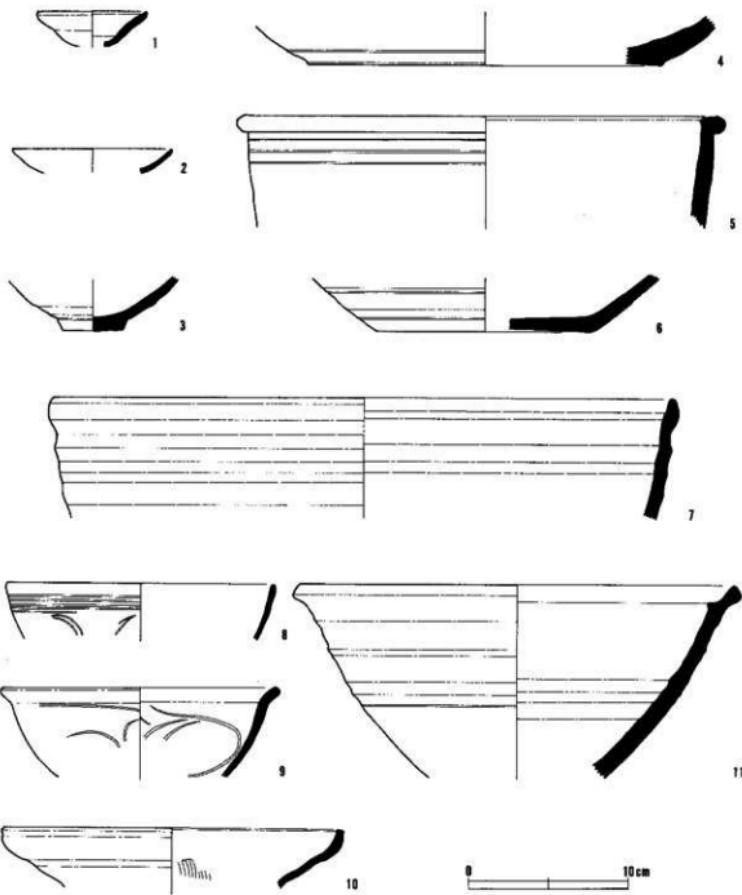


図22 留目遺跡堀大屋敷地区出土遺物実測図(4)

[陶磁器]

(大妻) I類はN字状の縁帶部を持つものである。図19-2はII縁部の渋曲が残り縁帶部は上下に肥厚させて作り出している。縁帶部は外傾している。口径は約23.6cmを計る。図19-7も同様のものであるが、口縁部の屈曲が強く、縁帶部は垂直に立つ。口径41.4cmと大きい。図19-12は縁帶部が口縁部にほぼ接し、縁帶部の上端は口縁部と同じ高さで止まり、玉縁状になっている。口径42.1cmを計る。図21-13は、縁帶部が口縁部に接着して玉縁状となり、その上端は摘みだして面を取っている。口径59.6cmを計る。以上は何れも暗茶褐色を呈している。II類はS字状に屈折する口縁部を持つものである。図19-1は口径31.2cmで、II縁部が垂直に立つが、図21-

5は口径30.2cmを計り、外傾する。また、図19-1は淡灰褐色を呈するものである。Ⅲ類は図19-11で、湾曲する口縁部の端部を上方に肥厚させて面を作り出している。口径43.2cmで、やはり暗茶茶褐色を呈するものである。同一個体と思われるものの胸部の破片があるが、肩部に当たると思われる。棱を取って屈折するが、撫で肩で張りが弱い。Ⅳ類は図21-4で、大きく外反する短い口縁部を持つものである。口縁端部を上から擒んで撫で上げており、渦み気味の面を取っている。灰白色を呈するものである。

(摺鉢) D 3出土の3点は何れも棒状工具により数条の掻き目を加えるものである。図20-6は口径38.8cmで、片口鉢である。口縁部は内外から押さえでて薄くなる。赤褐色を呈する。図20-2は口径30.6cmで白っぽい器肉に茶褐色の器壁を持つ。口縁部は受け口風に内面を窪ませている。比較的薄手である。図20-5は口径33.8cmで、口縁部の端部が肥厚気味となるものである。2と同様の色調を呈する。他のものは(図20-1、図21-2)黒紫色を呈するものと赤褐色を呈するもので、ともに底部片である。Ⅱ類は蒐刻線一条を等間隔に巡らせるもの(図21-1)である。灰白色的器肉に暗赤褐色を呈する器壁を持つ。口径21cmを計る。

(練り鉢) 図20-9は暗赤褐色を呈するもので、口縁端部はやや肥厚気味である。口径は25.8cmを計る。同様のものが他に2点出土している。口径34cmのものと26.4cmを計るものである。Ⅱ類は口縁部の端部が受け口状になるもの(図22-11)で、摺鉢に同形態のものがある。暗褐色の色調を呈している。口径28cmを計る。

(鉢) 図22-5は口縁端部を外側に折り曲げ、正縁状にしている。暗紫色の色調を呈している。図22-7は淡灰色を呈するもので、口径50cmを計る大きいものである。

(卸し皿) 図19-5は平底で、灰茶褐色を呈するものである。他に脚の付くもの(図21-3)がある。

(鍋) 図19-6で、灰綠色を呈するものである。外面に煤、内面に炭化物が付着している。口縁部は水平に折り曲げて鉗状の受け口にしている。口径23.8cmを計る。

(火舎) 図20-7で、明茶褐色を呈するものである。2条の突帯に挟まれた部分と2条の沈線に挟まれた部分に文様帶がある。

(碗) 白磁、青白磁、天目、その他の碗がある。D 3からは白磁2点が出土している。図19-3は平底のもので、内底面周縁に凹線が巡る。図19-4は高台を持つものである。図22-3は大目茶碗である。その他からは高台付の青白磁、緑白色の色調を呈し、内外に陰刻文のあるもの(図22-8・9)が出土している。また、三角高台を持つ灰釉陶器(図21-12)が極少量ながら出土している。

2. 松崎地区

[土壌墓] (図23~25)

D 9, 15, 18, 22, 23からも土器類が出土しているが、小片であり、図示できたのは以下のものである。

(D 4) (図23) 褐形土器9個体分、壺2個体分、高杯2個体分が出土している。図示できたのは壺2個体分である。10は口縁部の下部がわずかに内折し、「く」の字形の頸部を持つものである。口径は15.4cmを計る。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈していて、焼成はやや不良である。11はわずかに外反したやはり単純な口縁部で、頸部は「く」の字形にカーブしている。体部の上半部は撫で肩である。

(D 7) (図23) 褐形土器4個体分、高杯3個体分がある。図示できるものは壺1個体分のみ(12)で、受け口状口縁のものである。頸部の屈曲が大きく、口縁部も棱を取って屈曲し、外傾した短いものである。口縁端部は肥厚し、外傾した面を取る。口縁部は横撫でしているが、頸部より体部にかけての外面には掻き目状の刷毛目が縱方向に施されている。胎土に砂粒を含み、灰白色を呈し、焼成は良好である。口径14.2cmを計る。

(D 8) (図23) 壺9個体分、壺1個体分、高杯7個体分が出土している。壺9個体のうち図示できたのは

2個体分で、1は頸部が「く」の字形にカーブし、やや外反気味に単純に聞く口縁部を持つ。口径は17.6cmである。2は、「く」の字形の口頸部に球体の体部を持つものである。口縁部はやや内湾気味で、口縁端部は小さく内側に肥厚し、面をとる。調整は磨滅していく不明な部分が多いが、口縁部は横撫で、体部は外面を刷毛目調整し、内面を範削りして器壁を薄くしている。口径16.8cm、胴部の最大径26.2cmを計る。胎土に砂粒を含み、淡黄赤色を呈し、焼成は良好である。高杯については7個体分とも図示した。3・4は杯部で、4は口径15.2cmを計る。内湾して聞く口縁部を持つ。3は口縁部が外反している。何れも口縁部と底部の境の後は不明瞭である。また、若干の砂粒を含むが、胎土は精良で、淡灰赤色を呈し、焼成はやや良好である。5~9は脚部で、何れも円筒状の筒部で、7でみると裾部は大きく聞く。筒部内面には絞り込んだときの痕跡が残り、外面は、磨滅しているが、施磨きしているようである。胎土、色調、焼成とともに杯部と似ている。

(D10) (図23) 壺4個体分、高杯1個体分が出土している。図示できたのは高杯1個体分(14)のみで、大きく聞く掘の部分ある。

(D12) (図25) 壺8個体分、壺6個体分、高杯11個体分が出土している。壺は8個体分のうち5個体分を図示することができた。12は、中程で僅かに肥厚する単純な口縁部である。口径は15.2cmを計る。胎土に砂粒を含み、赤褐色の色調を呈していく、良好な仕上がりである。13も中程で肥厚するが、端部が丸く僅かに内側に肥厚している。口径は15.4cmで、胎土に砂粒を含み、茶褐色を呈し、焼成はやや不良である。14は直線的な口縁部で、端部直下を内外共に窪ませ、丸い口縁端部となっている。胎土には砂粒が含まれ、灰褐色を呈し、焼成はやや不良である。口径は17.8cmを計る。15は「く」字形にカーブする頸部を持ち、内湾する口縁部の端部を折り曲げて外反させている。口径は21.2cmで、胎土に砂粒が多く、白褐色を呈するが、焼成は良好である。6は受け口状の口縁である。口径12cmの小さいものである。口頸部の屈曲は緩やかで、外傾し、端部を外側に肥厚させて面を取る。胎土に砂粒を含み、淡褐色を呈している。焼成は良好である。壺は2個体分を図示できた。18は口径6.6cmの小型のもので、長い口縁部を持ち、体部は丸底になるものと思われる。胎土は細かく、焼成は良好で、茶褐色を呈している。17も同形になるものと思われるものであるが、口径11.3cmで大きい。砂粒が多く、焼成はやや不良で、色調は暗赤褐色を呈している。高杯は4個体分を図示した。19、20の杯部は共に口縁端部が外反気味のもので、底部との境は棱を取らない。口径は16~17cmとほとんど変わらないが、20は浅く、19は深いものとなっている。共に焼成はやや不良で、赤褐色あるいは灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。21は脚部で、細くあまり聞くかない筒部から屈折して大きく聞く裾部になる。筒部内面は横方向に範削りしている。また外面は施磨きして調整している。赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。また、胎土には砂粒が多い。22は脚の裾部で、内湾気味に開いている。胎土に砂粒が目立ち、灰褐色を呈し、焼成はやや不良である。

(D13) (図23) 高杯1個体分(13)のみである。脚部の破片で、筒部は殆ど開かず、内面に絞り痕が残る。裾部は水平近くに聞き、端部を上方に肥厚させて面を取る。外面は施磨きされている。胎土に砂粒を含み、灰白色を呈しているが、焼成は良好である。

(D14) (図25) 壺15個体分、壺3個体分、高杯7個体分が出土している。壺は3個体分を図示した。1は「く」の字形の頸部と外反して聞く口縁部を持つ。口縁端部は上方に折れ、僅かに内傾する面を持つ。口縁部中程に粘土の接合痕が残り、その外面に指押さえの痕跡が残っている。口径は14cmを計る。胎土には砂粒が含まれ、暗灰褐色を呈し、良好な焼成を示す。2は頸部の屈曲が比較的大きく、口縁部の聞きが大きい。口縁端部は内側に僅かに折れ、外側に引き出してやや幅広い水平な面を取る。体部は撫で肩で、張りがない。口径18cmを計り、胴部の径に近いものと思われる。赤褐色の色調を呈し、焼成はやや不良である。胎土には砂粒が含まれる。3は外反気味

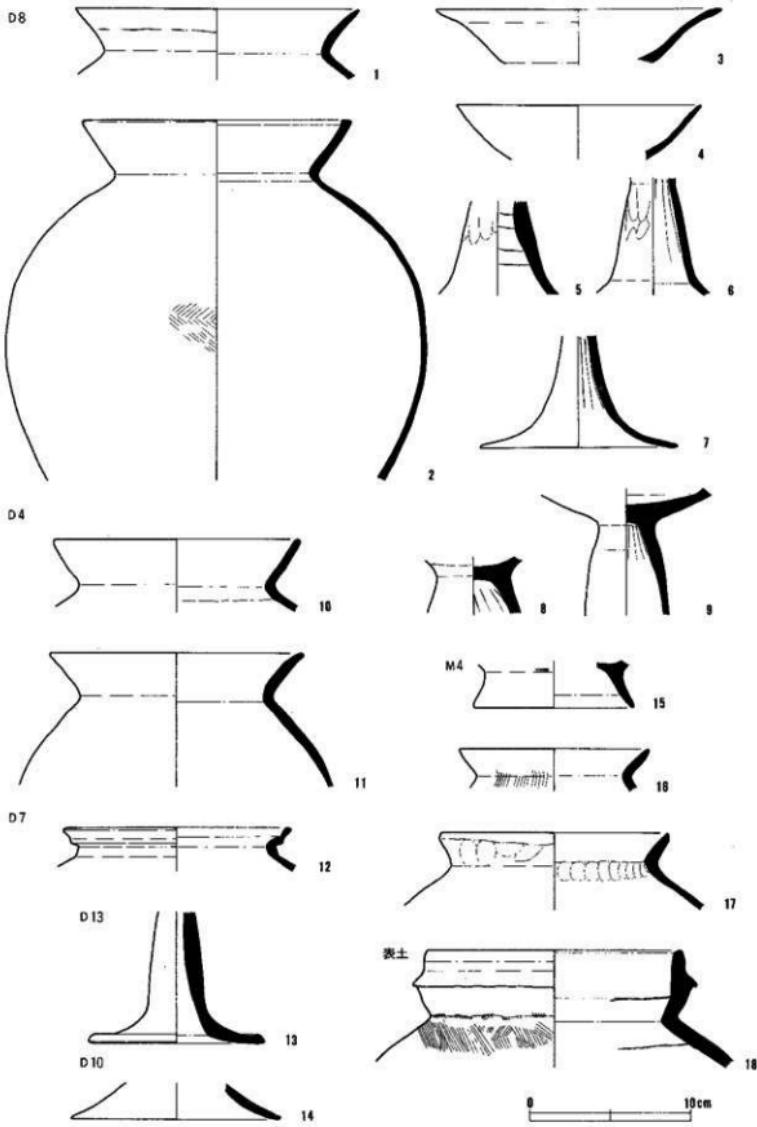
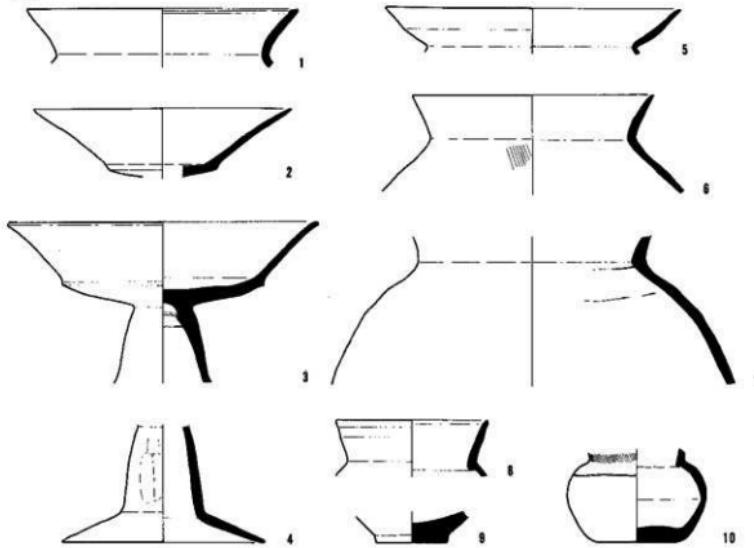
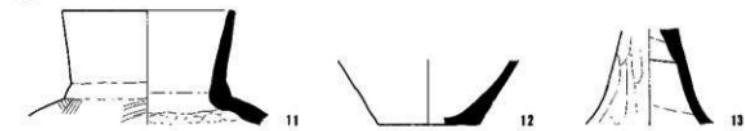


图23 留日遗址松涛地区土坡墓出土土器实测图(1)

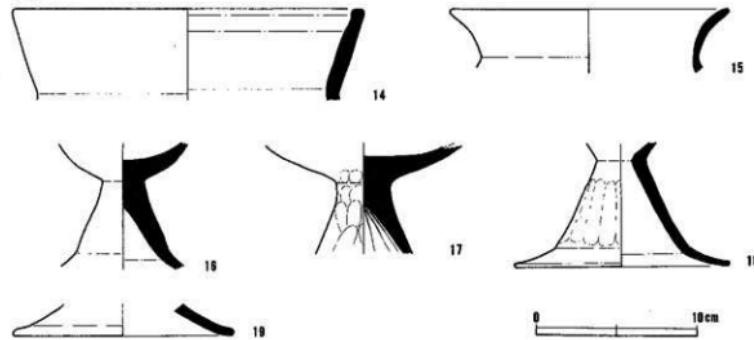
D19



D21



D17



0 10cm

图24 留日遺跡松橋地區土坡墓出土土器實測圖(2)

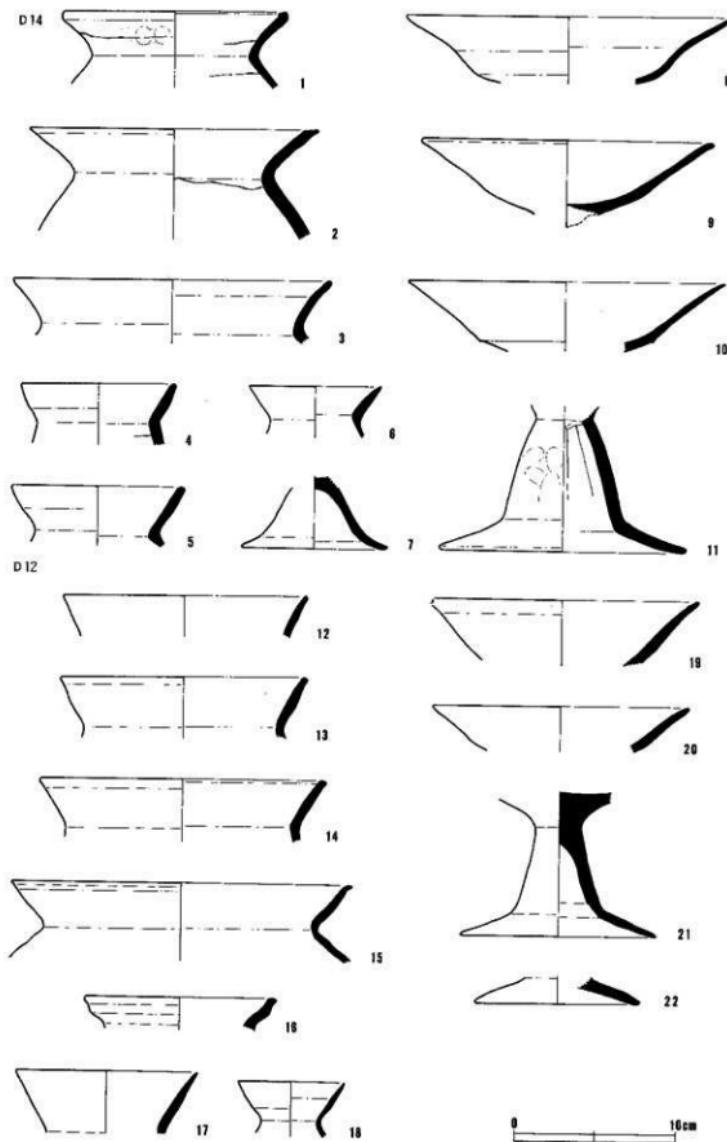


圖25 留日遺跡松橋地區土坡墓出土土器實測圖(3)

の単純な口縁部を持つものである。口径19.8cmを計る。砂粒は少ないが、焼成はやや不良で、色調は赤褐色を呈している。壺は3個体とも小型の丸底壺となるものと思われる。6は口径8.7cmで、「く」の字形の口頭部である。口縁部の内面に指揮さえの痕跡がある。灰黄色の色調を呈した焼成良好な土器である。胎土には砂粒を含む。5は口径10.8cmとやや大きく、やはり「く」の字形の口頭部を持つが、内湾気味の口縁部は6に比べて長い。口縁端部には面取りが見られる。焼成はやや不良で、胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈している。4は頸部の開きが小さく、内湾気味の口縁部を持つ。口径は9.6cmである。胎土に砂粒を含み、褐色の色調を呈し、焼成は良好である。高杯は5個体分を図示することができた。8~10は杯部で、口径18.2~20.2cm、深さ4cmほどとほぼ同規格のものである。10は僅かに外反する口縁部と底部との境を、小さい突起状の稜を取って区別している。8はS字状にカーブする口縁部で、体部との境は緩やかにカーブし、稜を取らない。9は底部より緩やかにカーブして口縁部に至るものである。口縁部と底部との区別はなく、口縁端部が僅かに外反する。何れも砂粒を若干含み、灰赤色ないし灰黄色を呈している。焼成はやや不良である。7、11は脚部で、大小2点ある。7は裾部径9.1cmの小さなものの、杯部との境から開き始め、裾部で大きくカーブする。胎土に砂粒を含み、淡灰赤色を呈し、焼成は良好である。11は、内湾して中太の筒部と屈折して聞く裾部とからなる。裾部径15.4cmを計る。筒部内面には絞り痕が残り、外面には範削り痕がのこる。筒部と裾部との境には指揮さえの痕跡がのこる。胎土に砂粒が含まれ、淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。

(D17) (図24) 壺4個体分、高杯3個体分が出土している。壺は2個体分を図示することができた。15は頸部より内湾して聞く口縁部を持つものである。頸部外面はやや屈折する。胎土に砂粒が含まれ、暗灰赤色の色調を呈し、良好な焼成を示す。口径17.4cmを計る。14は開きの少ない直線的の口縁部を持つ。口縁端部内面に窪みがあり、端部が内側を肥厚させたようになり、面取りをしている。胎土に砂粒を若干含み、淡赤褐色を呈していて、硬質の良好な焼成となっている。高杯は3個体分を図示した。17は杯部の底部と脚部の上半部である。杯底部は緩やかなカーブを描き、口縁部との剝離痕を残す。脚部は「ハ」の字形に聞く筒部で、内面に絞り痕があり、外面には範削りしている。16も同じ部分の破片で、杯部は碗型となっている。脚部は筒部から屈折して裾部に移行している。16、17共に胎土に砂粒を含み、淡灰色の色調を呈していて、良好な焼成を示す。19は脚の裾部である。端部が僅かに外反している。杯部と同様の焼成状況である。

(D19) (図24) 壺7個体分、壺2個体分、高杯5個体分、器台1個体分が出土している。壺は5個体分を図示できた。6は口径15cmを計るもので、「く」の字形の口頭部を持つものである。口縁部は直線的で、単純に聞く。体部は張り気味で、外面に刷毛目痕がみられる。胎土には砂粒を含み、淡灰赤色の色調を呈し、焼成はやや不良である。5は頸部の屈曲が強く、「口縁部は内湾気味に大きく聞く。口縁端部は僅かに外反している。砂粒を含む胎土で、黄白色を呈し、焼成は良好である。口径は18.4cmを計る。7は頸部から体部の上半部の破片である。頸部は内面に明瞭な稜を取るが、外面は緩やかなカーブを描く。体部は張りが少なく、撫で肩である。器面の内外共に指揮さえによる凸凹が激しい。胎土に砂粒が少なく、淡灰褐色を呈していて、極めて良好な焼成となっている。9は底部片で、平底である。底径4.4cmを計る。また黒斑がある。砂粒を含む胎土で、淡灰赤色を呈し、良好な焼成を示す。壺は2個体で、8は直口気味の口縁部で、「く」の字形の頸部を持つ。口径は9.4cmで淡灰黄色を呈し、焼成良好である。胎土には若干砂粒を含む。10は小型の壺で、口縁部を欠く。胴部の最大径が上方にあり、底部は平底である。頸部に縦方向の刷毛目がある。また体部外面には指揮さえによる凸凹が残る。砂粒を含む胎土で、淡灰赤色を呈し、焼成は良好である。胴部最大径は8.6cmを計る。高杯は3個体分を図示することができた。2は口径16cm、深さ3.6cmのやや小型のものである。僅かに外反しながら聞く口縁部から後を取って

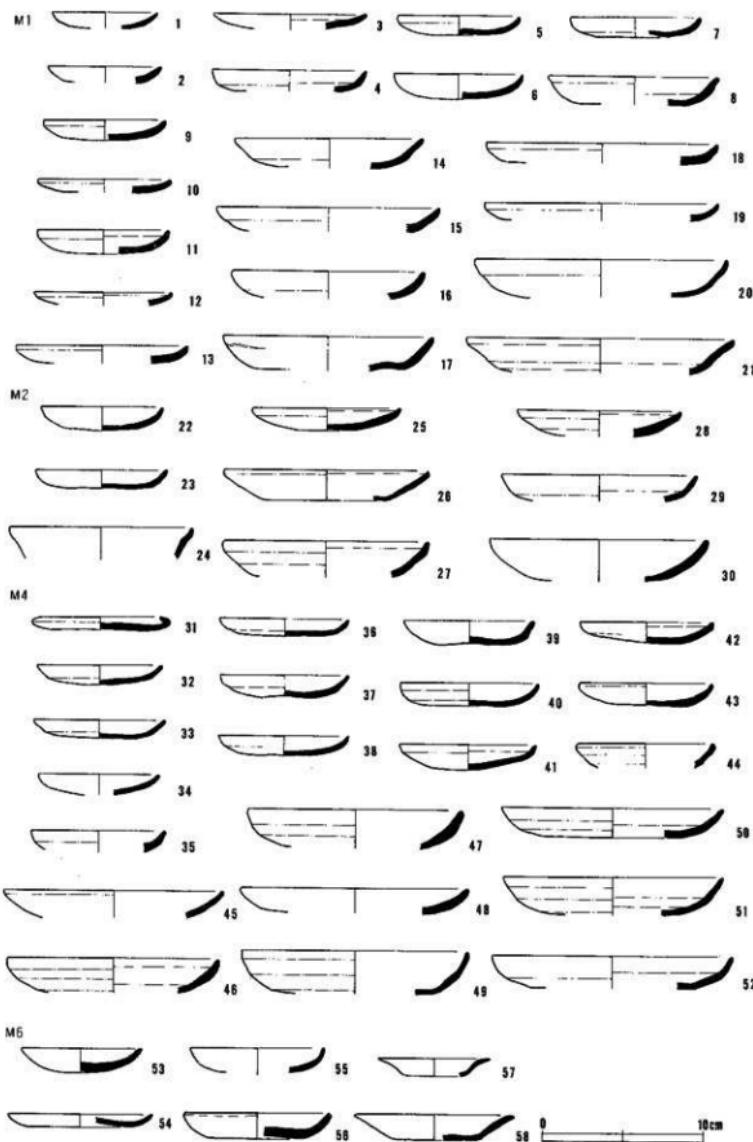


図26 留目遺跡松櫛地区溝跡、ピット等出土遺物実測図(1)

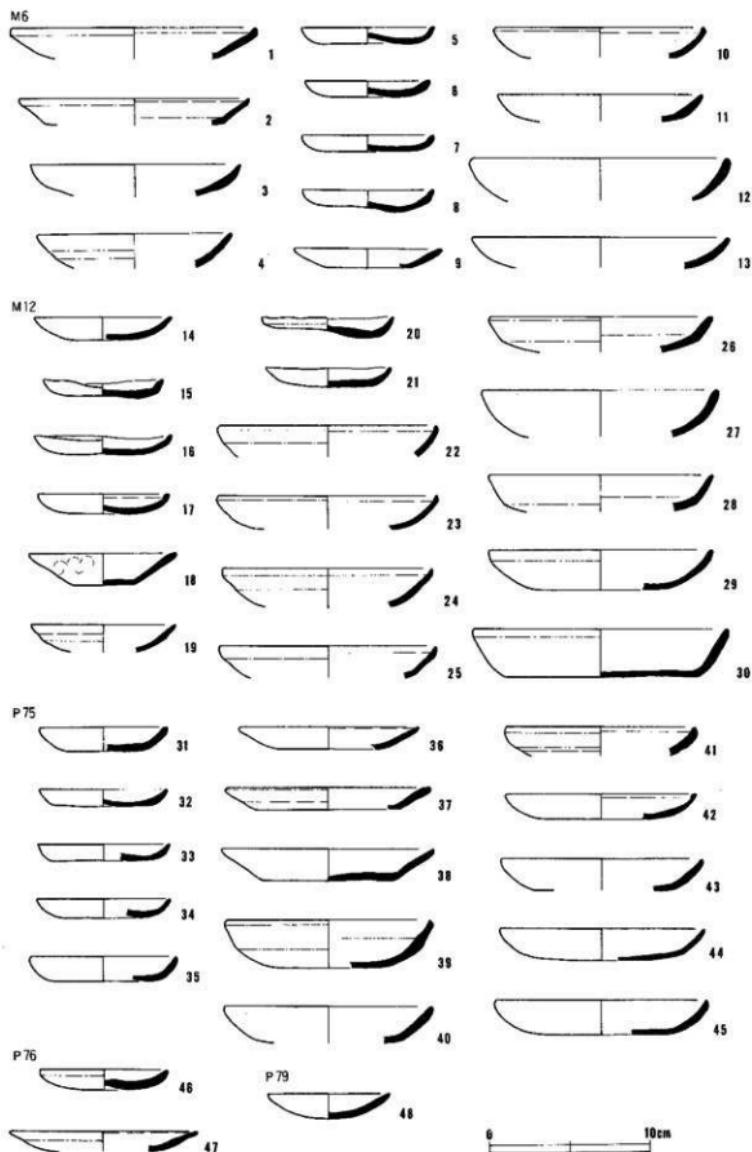


図27 留目遺跡松橋地区溝跡、ピット等出土遺物実測図(2)

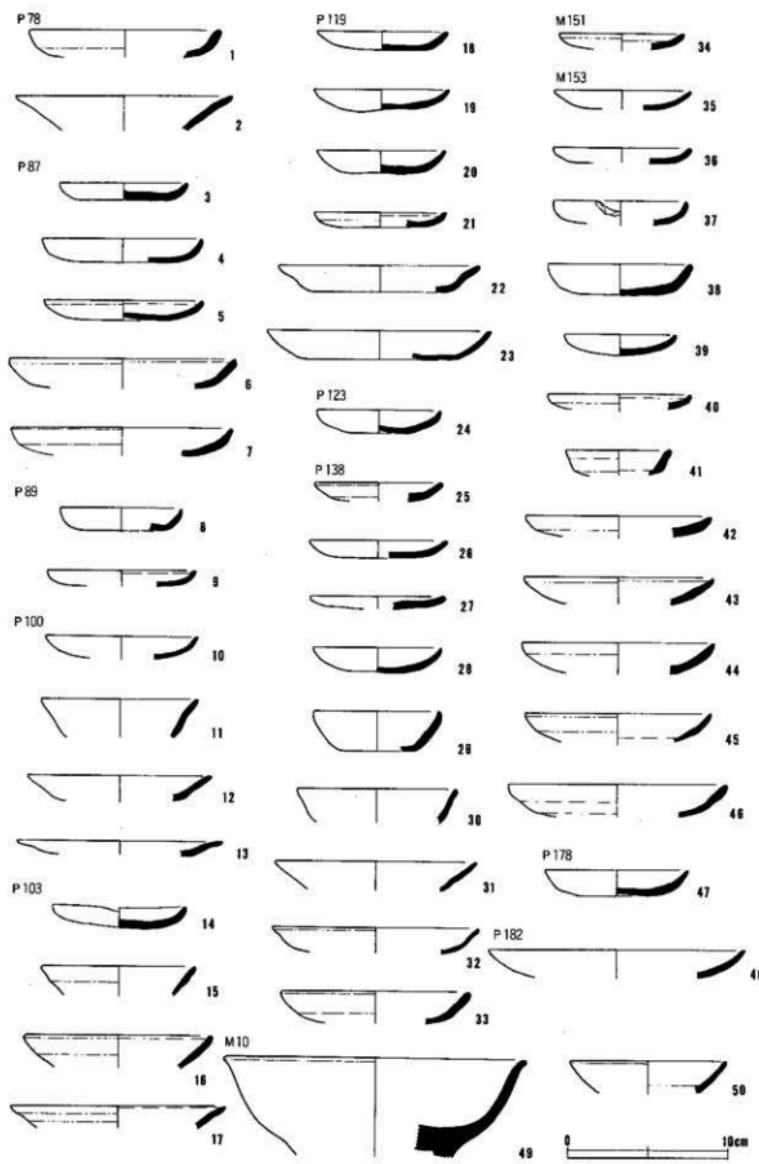


図28 留目遺跡松橋地区溝跡、ピット等出土遺物実測図(3)

底部にいたる。淡赤灰色の色調で、焼成は良好である。胎土には砂粒が多い。3は杯部の口径 9.4cm、深さ 4.2 cmを計り、比較的大型のものである。外反して聞く口縁部から、突唇状に稜を取って底部に至る。脚部は膨らみ気味の筒部で、内面は横撫でして調整している。胎土に砂粒が多く、淡赤褐色の色調を呈し、焼成は不良である。4は脚部で、膨らみ気味の筒部から屈折して直線的な脚部に至る。筒部外面は窓削りし、内面は横撫でしている。裾部の径12.6cmを計る。器台は1個体分のみである。「ハ」の字形に聞く筒部から屈曲して裾部に至る。受け皿部は不明であるが、残部からすれば「ハ」の字形に聞くものようである。筒部外面は窓削りし、内面は横撫でしている。裾部の径は13.4cmを計る。淡灰赤色を呈する色調で焼成は良好である。胎土には砂粒が含まれる。

(D21) (図24) 壺1個体分、壺1個体分、高杯2個体分が出土している。壺(12)は底部片で、平底のものである。暗灰色の色調で、焼成は良好である。胎土には砂粒が含まれる。底部径は 6.2cmを計る。壺(11)は直口のもので、口径10.8cmを計る。口縁部は直線的で、頸部に粘土の継ぎ足しがある。体部の外面には刷毛目が見られる。胎土には砂粒が含まれる。色調は赤褐色で、焼成は良好である。高杯(13)は1個体分だけ岡示できた。脚の筒部の破片で、外面には窓削り痕がある。赤褐色を呈し、良好な焼成である。胎土には砂粒が含まれる。

〔溝跡、土壤、ピット〕 (図26~28)

P 142から土銭1点が出土したほか、若干の陶器片を出土しているピットもあるが、他は全て土師器の皿である。極めて大量に出土しているので、個々に説明を加えることを避け、全体を見通して形態及び容量からの分類を行い、説明に替えることとする。

(皿) 極めて大量に出土しているので、個々に説明を加えることを避け、全体を見通して形態及び容量からの分類を行い、説明に替えることとする。

まず容量についてみると、口径、器高の知れるものの主なものうちから高径比 (器高÷口径 × 100) を出してみた。18から26の間にあり、比較的器高の高いもの、あるいは、31と器高の極めて高いものが若干あるが、大半は10~11から21~23の間に納まるものである。口径を横軸、器高を縦軸に取って度数分布表を作つてみると、高径比18から26の器高の比較的高いものは口径7cm以下の小型のもの (A類) と口径16cmの大型のもの (F類) に限られている。高径比31のものは口径8cmで、口径規模の上からは量的に多いものであるが、分布表からすれば別に分類すべきものである (G類)。他の大半のものは、規模に応じてBからEの4類に区別することができる。BからEの各類では、B類がもっとも広い分布を示し、E類がもっとも狭い分布状況にある。C、Dの2類は、量的にも向者の中間にある。

次に形態的に分類してみる。I類としては、口縁部が単純に内湾して立ち上がるもので、外面を1段あるいは2段に横撫でして調整しているものがある。II類は、内湾して立ち上がる口縁部の端部を内側に屈折させているものである。屈折部分を含めて2段に撫でるものが多い。これに類似したものとして、口縁端部を三角形状に描み出すものがある。II-1類とする。III類は、II縁部を直線的に外傾させるもので、口縁端部が単純に終わるもの。IV類は直線的に外傾する口縁部の端部を三角形状に描み出しているものである。V類はII縁部と底部との境に不明瞭ながら稜を取り、平底となる。共に口縁部外面を2段に撫でている。VI類はII縁部が外反して単純に聞くものである。口縁端部をやや外側に引き出し氣味のものもこれに加える。口縁部と底部との境は良く屈折し、内底部周縁を窪ませるものが多い。底部は平底となる。VII類は口縁部が緩やかなS字に似たカーブを描くもの。すなわち、口縁部の中程で屈折し、大きく外反するものである。口縁部と底部との境界はきほど明瞭ではなく、完全な平底とはならない。VIII類は、底部より直ちに内側に折れ曲がって短いII縁部となるものである。IX類は、直線的に聞く口縁部の端部を内湾させるもので、底部が平底となるものである。以上のI~IXに分類し

た諸形態を容量から分類した結果と照合すると、I類とII類は容量のB、C類とE類のものに多い。III、VI類はE類のものが多く、V類はC類が多い。VI類のものはD類が多く、僅かにA類が含まれている。VII類はB類に限られ、VIII類はG類である。従って、形態に応じた容量規模があつたと見ることができる。

(陶磁器) (図28) M10から出土したもので、碗と皿がある。

ホ. ま と め

I. 堀大屋敷地区

(遺構) 堀大屋敷地区では、大型の土壙を検出した。土壙内の埋土中には土師器や陶磁器などの上器類のほか炭、灰、焼土塊等を含んでいた。特に焼土塊は壁土を想わせるものであつて、このことから、建物跡は検出されなかつたが、今回検出された遺構が建物が火災を受けた後に整地されたことにより生じたものではないかと考えることが出来るのである。火災を受けた建物の性格は明確ではないが、出土土器類を見ると、各地の陶磁器類が比較的豊富にあり、当該地の小字名通り、大量敷の存在していた可能性が強い。

(遺物) 出土土器類から屋敷跡の年代を考えてみると、最も古いものとして灰釉の碗がある。三角高台で、外底面は糸引き痕を撫で消している。11世紀後半頃のものと思われるものである。陶磁器類では、特徴的な大壺でみると、N字状の縁部を持つものと折り返しただけで、平縁状縁部で終わるものがある。13世紀後半から14世紀前半、及び、室町時代の後葉の所産であろう。その他の陶磁器類については明確を欠くが、およそ鎌倉時代から室町時代のものと考えて大過ないものと思う。土師器の皿でみると、V類とした外反した口縁部を持つものの中に、平安京での分類によるA1タイプに似たものが見られるが、小皿であり、II類は1段撫である。II類、IV類の大皿と共にB3タイプとして良いものであろう。III類の中皿は口縁端部の特徴からA3タイプの後半のものであると考える。I類のB規模のものやVII類の小皿はA3タイプの前半、あるいは、A2タイプの後半の特徴を持つものようである。従って、土師器の皿でみると、13世紀から16世紀に亘る時期幅が考えられる。このように見てくると、当地区の出土遺物には、11世紀のものを別として、13世紀から16世紀、鎌倉時代から室町時代にかけてのものがあることになる。すなわち、消失したと考えられる屋敷跡の存続期間を示しているものと考えられるのである。なお、陶磁器類は、大壺の多くは常滑のものと思われる。また、掛鉢や練り鉢は信楽焼き、卸し皿や碗には瀬戸のものが見られる。器種により搬入元を選別しているように見受けられる。

II. 松 橋 地 区

[鎌倉時代]

(遺構) この時期の遺構としては、大型の土壙、溝跡、ピット、井戸跡などを検出している。特に大型の土壙のうちD5、D9、D11については、何れの土壙底にも炭の堆積があり、その上面から土師器の皿が出土すると言う特徴を示していた。他の何れの遺構からの出土土器も殆どが土師器の皿であることを考慮して、少なくとも3基の土壙が土師器の皿を焼成していたものである可能性が強いと考えたい。民俗事例に見るものとの比較では、その構造が竈に近いものであり、比較し難いが、湿気抜きに竈を用いて4時間ほど燃やし、さらに松などの割り木で、竈の上面に生灰を厚くかけて4時間ほど燃やす作業がなされている。相当量の灰や炭が生じたであろうと思われる。

井戸跡を除くその他の遺構については、その性格は判然としないが、少なくとも墓地跡などではないと理解し

ている。

(遺物) 出土遺物の殆どは土師器の皿である。小皿と大皿とがあるが、小皿の中には、口縁部を内側に折り曲げるものが極少量であるが含まれている。小皿の多くは褐色系のA 2 タイプとされるもので、大皿の多くもこのタイプである。また、小皿の中には口縁部が外反し、底部周縁に強い横撫を施すものがある。大皿には、外反しないが直線的な口縁部で、擒み上げ三角形の端部を作りだしているものがある。小皿、大皿共にA 3 タイプと考えられるものである。以上のようなことから、当地区の土師器の皿類は、13世紀頃の特徴を持っていると考えることができよう。

〔古墳時代〕

(造構) この時代の遺構としては木棺の直葬墓のみである。15基を検出している。木棺の規模にはほぼ近い墓塚を作り、箱式の木棺を納めたものと考えられる。棺の規模は不明だが、墓塚の規模から長さの知れるものでは、168cmが最小であり、この推定される木棺の長さは144cmである。従って、検出された何れの木棺墓も十分に成人を納めることの出来る規模であると考える。逆に言えば、小児を納めたと考えることの出来るものを含んでいないと言ふことになろう。これら木棺墓は、周溝等の施設が一切無く、マウンドをもっていたかどうか不明である。しかし、木棺墓には近接するものや重複するものなどがあり、盛り土はなかったのではないかと考える。15基の木棺墓群の分布状況は、極めて散在的である。軸線の方位だけからみれば、D 8、12、14、19、21、17の6基が一致し、また、D 7、9、15、23、22の5基も同じ方位を向いている。他の4基はこれらの何れにも一致していない。分布状況からすれば、寧ろ、こうした散在的な分布の仕方がこの頃のこうした墓の特徴であるのかもしれない。

これらの木棺墓には、副葬品は一切見られなかったが、供獻品として多くの土器類を用いていた。出土状況は、棺の上部にあったものが、棺の腐朽にともない、棺内に下落したように、土壤の肩の部分から土壤底に向かって出土している。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての上蓋墓が検出されている湖北町丁野跡跡では、供獻土器は個々には伴っていないかったが、5世紀末の古墳である高月町涌出山古墳や余呉町長山古墳群などでは、同様の状況で供獻土器が出土している。従って、当地区的木棺墓が、上器の供獻方法の面期を成すものと考えることが出来る。

(遺物) 供獻土器の器種構成は、甕、壺、高杯、器台であるが、器台は極めて少なく、寧ろ3器種としてよい。壺は6%から25%と少なく、甕が最も多いが、高杯とは同数に近い比率となっている。壺は小型のものが多い。

次に、土壤墓相互の相対的な時期関係についてみてみると。まず、D 8 の甕には、口縁端部を内側に丸く肥厚させるものがあるのに対し、D 12 では、口縁端部の中程を肥厚させるものや内溝気味の口縁部の端部を僅かに外反させるもの残り、口縁端部を肥厚させるものはない。D 12 には小型の丸底壺が出土しているが、D 14 出土のものに比較して、口縁部が大きく、より古式の様相を呈している。更に、D 19 のものと D 14 とでは、D 19 のものは短く外傾の少ない口縁部を持ち、また、扁平な平底風のものがあり、D 14 に比べて新しい要素を持つものである。高杯について見ても、D 19 では杯部の口縁部と底部との境に明瞭な稜を持つものがあり、脚部についても筒部と襠部との境は明確に屈折している。D 14 では杯部の口縁部と底部との境に稜を持つものもあるが、なだらかにカーブするものが多い。D 8 と D 12 とでは、D 8 の口縁部の外反程度が大きい。D 8、12、14 を比較すると、12 → 8 → 14 の順に杯部の口縁部の外反程度が大きくなる。以上から、D 12 → D 8 → D 14 → D 19 と言う新古關係を考えることができる。D 21 には平底の底部があり、直口の壺があって、弥生時代に遡る可能性が考えられ

る。従ってD12に先行するものといえる。D4の外反気味の妻はD19に類品があり、両者は近似した時期のものと思われる。D7の妻はS字状口縁のもので、口縁部の屈曲程度はD8の布留式の妻と並行する段階のものと思われる。D17の高杯は、杯底部が碗状のものと緩やかなカーブを描くものとがあるが、後者はD8やD14のものに見られる。脚の形状からすれば、D8に近いものであろうか。D10、13については高杯の脚の破片のみで比較し難い。以上から、D21→12→8、7、17→14→19、4の造墓順序が考えられる。その期間は弥生時代の終わりから、いわゆる布留式の新しい段階までの間であろう。

ヘ. おわりに

今回の調査では、周知されていた堀大屋敷地区において、屋敷跡の火災後の整地土壙かと考えられるものが検出できた。建物の様子は明らかにすることはできなかったが、中世の屋敷における日常容器類の様子を知ることができた。調査中に地元の方の御教示により知ることのできた松橋地区では、上師器の皿類の焼成土壙ではないかと思われる遺構を検出すると共に、更に、古墳時代を中心とする土壙墓群を検出することができた。この墳のもので、土壙墓のみで構成される墓跡は類例が極めて少なく、古墳以外の民衆墓の在り方に問題を提示するものであった。

7. 東浅井郡虎姫町五村遺跡

イ. はじめに

五村遺跡は、かつて、町立虎姫小学校の校舎の建設工事の際に、弥生時代の土器類を出土したことで周知されるようになった遺跡である。しかし、遺跡の範囲などについては不明であった。この度、小学校の北側一帯ではほ場整備工事が計画されることになった。小学校の隣接地域については、当然遺跡範囲に入ると考えられたが、それが北側にどれだけ広がるか明らかでなかったので、工事により切り土される部分全域において、試掘調査を実施し、その結果により範囲を決定した上で、発掘調査を実施することとした。

調査は、現地調査を(財)滋賀県文化財保護協会嘱託調査員 中川通士が担当し、整理調査については、滋賀県教育委員会文化財保護課 技師 田中勝弘、奈良大学学生 林 純が当たった。

ロ. 位置と環境(図1)

五村遺跡は、東浅井郡虎姫町五村地先にある。湖北平野のほぼ中央を西に流れる姉川の右岸500m 足らずのところにあり、小谷山の南にある独立丘陵である虎御前山の南500mあたりの平地に立地している。標高はおよそ93m付近にある。

付近には、東の宮部地先、北の中野地先等で弥生時代中期から後期の土器類が出土しており、また、虎御前山の南端からは、漢式鏡を出土した丸山古墳がある。姉川左岸に対しても、右岸は弥生時代の遺跡の濃密な地域である。

ハ. 調査の経過(図2)

調査は、ほ場整備工事により、切り土が計画されている排水路部分を中心に実施した。かつて土器の出土している虎姫小学校に隣接する部分については、頃初から排水路計画部分の全域について発掘調査を実施することとした。小学校から離れる部分については、トレンチ調査とし、遺構等を確認した時点で、トレンチを排水路計画部分に沿って拡張することとした。ただし、一部分、遺構の性格を確認するため、排水路計画部分外にトレンチを広げた。結果的には、小学校に隣接した南端で多量の遺物を出土した包含層を検出し、北端で方形周溝墓群を検出し、墓域と集落域の一部を調査したことになった。

二. 調査の結果

I. 遺構(図3・4)

〔方形周溝墓〕

小学校の北200mの位置、及び、西100~200mの位置で3基確認している。何れも1辺を南北方向に向けるものである。

(1号方形周溝墓)(図3) 台状部で10m×10mのほぼ正方形を呈するものである。周溝は深さ20cmと非常に浅くしか残っていないが、間断なく四周する。幅は南西コーナと南東コーナが狭く、僅か30cmを計るにすぎない。



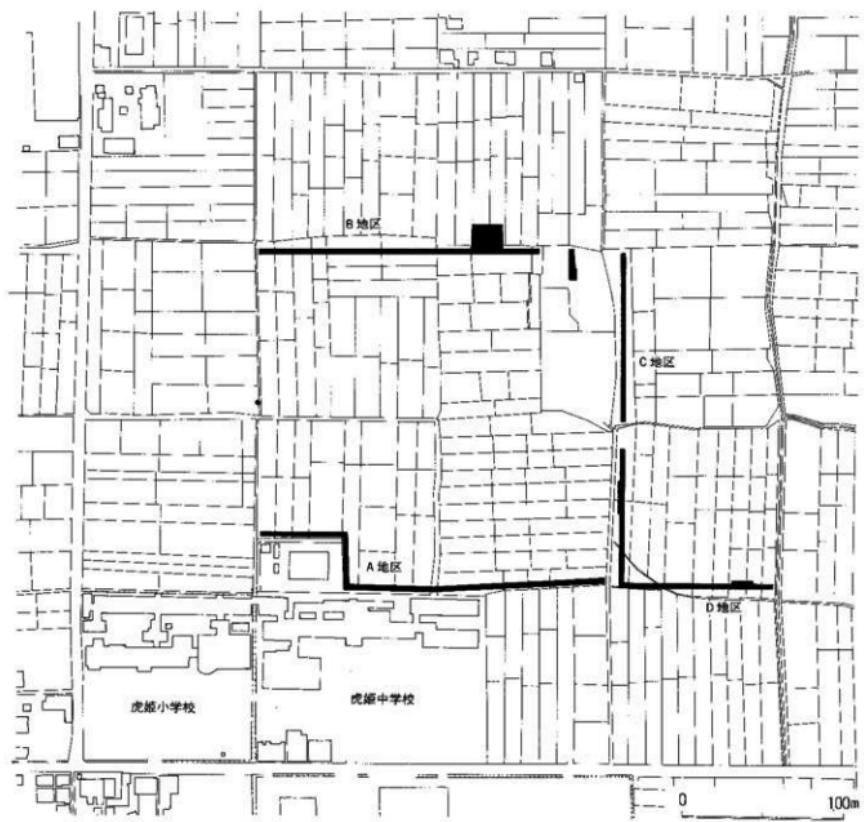


図2 五村遺跡付近地形図及びトレンチ配置図

70~170cmを計る。なを、周溝の南辺の東寄りで、鋳型土器が出土している。

(2号方形周溝墓) (図4) 西半分を確認した。台状部の南北長が4.8mと規模の小さいものである。周溝の西辺の肩部が新しい溝により削平されているが、幅60~70cmと均一である。深さは10~15cmと遺存状況は悪い。

(3号方形周溝墓) (図4) 北半分を確認した。台状部の東西長は8.8mを計る。幅85~120cm、深さ15~40cmを計る。

なお、周溝の北辺の東半分の位置で、その上面から柵跡が検出されている。柵跡は横倒しになった状態で出土しているが、杭が30cmほどの間隔で7本まで並んで検出され、これに横板が3段まで残っていた。横板は最長のもので3mほどを計る。出土位置から方形周溝墓とは直接関連しないものと思われる。

[包含層]

包含層は、小学校に隣接する部分、調査対象範囲の南端で検出した。およそ、厚さ20cmほどの耕作土(第1層)の下に、10~40cmほどの灰茶色の粘質土(第2層)があり、その下に5~40cmと厚薄のある層がある。この層は基本的に砂質土(第3層)であるが、部分的に粘質土が加わっている。砂質土の下は、5~30cmほどの黒灰色の腐食土層(第4層)である。この下に基本ベースとなる青灰色砂層(第5層)がある。この青灰色砂層を切り込む形で、幅9mほど、深さ45cmほどの落ち込みがあり、青灰色の砂の混じる黒茶色の腐食土(第6層)が堆積していた。遺物は、第4層の腐食土層及び第6層に当たる落ち込みの中から出土している。

II. 遺 物

遺物は、土器類を中心とし、木製品、巴型銅器なども出土している。

[巴型銅器] (図5)

第4層から出土している。左捻じりで、脚は6本突出するが(1本は欠落)、それぞれの脚は太き及び捻じりの程度が不揃いで、シンメトリーに欠ける。中央の座は半球形を呈し、座裏面に小さな棒状に近い環状紐通しが付く。全径6.4cm、座径2.9cm、座高1.1cm、器厚0.2cmを計る。座径指標(座径/全径×100)は45.3。脚部分は表裏両面共に放射状に研磨するが、表面のほうが入念である。座部分の表面は不定方向に磨かれるが、裏面は鉛上げたままである。脚周縁部は、削り磨きを施し僅かに整形しただけで、鋳型から取り上げたままの面を残す。成形面からいえば、全体的に粗雑な感じを受ける。また、紐通しは本体鏡上がり後に付加されたように見られる。

[土器類]

検出した遺物群を時代別に概観すると、弥生時代中期・後期に帰属する土器が大部分を占め、当該期のものにはこの他に木器、青銅器がある。これ以外には、平安時代後半期の灰釉陶器と無軸の所謂、山茶壺が若干ある。

これらの出土状況は、前述の通り、方形周溝墓の周溝や溝跡から出土した数個体分を除けば、大半が遺物包含層からのものであった。しかもそれらは、一定の秩序を保持した層位関係にあるものではない。したがってここでは、それらを一括して取り扱い、土器については型式的に大略な時期別に、器種毎に詳説を加えることとする。

(1) 弥生時代中期の上器

甕A-1 (1・3・4)

甕Aとしたものは、所謂「受口状口縁甕」である。これには、成形・調整技法とそれに伴う形態や、装飾施文の差異によって、A-1~5に細分している。

A-1は、頸部の屈曲が弱く、しかも比較的長く伸展したもので、これに反し口縁部は鋭い棱をなして屈曲し、短く内傾して立つ。口縁部は截然と切り換えた面で終る。口縁外面は、丁寧なヨコナデによってハケ調整痕を

消去し、そこへの施文は右上り列点文を基本とするが、粗い水平列点文(3)も見られる。口径を復元してみると、15~16cm前後(1・3)と20cmを超えるもの(4)とに分かれた。なお、胎土は石英・長石・黒雲母を少量含む。

壺B (41)

この壺は、頸部から緩くカーブして開いた口縁部を作り、その端部は僅かに拡張することで端面を作り出している。この端面には、小豆大の刺突文を巡らせており、器壁調整は、体部外面は右下りの細密なハケ調整であるが、頸部内面には更に指ナデ調整の一工程を加えていた。(41)の口径は、18.1cmに復元したもので、胎土は石英や長石等の砂粒を多く含有した粘土を使用し、淡灰黄色を呈している。

壺A (48)

壺Aは、胴張りのあるやや長胴の体部に、短い口頸部の付く壺である。頸部は短く外反し、それに続く口縁部は強く屈曲することで内傾気味に立った短いもので、その先端は切り揃える。体部外面の調整は、粗いハケ調整を縱方向、次いで横方向と重ね、内面は指腹によって丁寧に搔き上げていた。口縁部はヨコナデ調整。胎土には、石英・長石類の細砂を均一に多く含み、灰褐色を呈する。(48)は、1号方形周溝墓の東周溝南隅から出土。^⑤

この種の壺は、比較的に類例に乏しいものではあるが、守山市下之郷遺跡第1地点環濠3下層の畿内第IV様式併行期の土器群中に見られる。

壺B-1 (59)

壺Bとしたものは長頸壺で、これにはB-1~3の3類に分けられる。

B-1は、口縁部及び胴部下半が欠如するため、全容は知らない。加えて、器表の磨滅も激しい。頸部のくびれや胴部の張りはゆったりとして、頸部から口縁部へ垂直に伸びる。頸部及び胴肩部には、6条を単位とした櫛描き直線文を配し、残存部では4帯を数える。施文の間隔は、頸部は1cm以内で胴部は2cm程となっていた。

高环A (111・112)

この高环も、畿内第III~IV様式に盛行した器種であるが、相異点も見られる。まず环部は、深目の底部から弯曲して直立からやや内傾気味となる口縁部に連り、口端部は内傾した面で切り揃える。口縁外面には、浅い5条の凹線文帯を巡らせている。なお、口縁部には焼成前に径3mm程度の小孔を2cm間隔で2個穿ち、左右に一对配す。また、脚と环部とは円盤充填法によって接合し、脚部は环に比して非常に矮少化した感じを受けるもので、重厚な脚柱部は太短い筒状から開き、脚部で短く伸びる。

环部内面は、ヨコナデ調整を入念に施すが、反面、环外面と脚部は細密なハケ調整のもの(111)とヘラ磨き調整(112)がある。胎土には、石英・長石・クサリ礫等の砂粒を少量含み、淡茶灰色を呈す。なお、(111)は1号方形周溝墓の周溝に供獻されていた。

鉢A (73)

台付鉢又は台付無頸壺の脚台部である。肉厚の脚部で、僅かに湾曲するものは直立し、その端部は水平に拡張して安定した面を作り、端部上縁に浅い凹線文を数条巡らすことによって凸線帯を作り出している。脚台部外面はヨコナデ調整であるが、内面は指ナデの上から部分的に削りに近いタッチでハケ調整を施す。なお、この脚台の上部、すなはち鉢部との接合部付近には、大きな円孔を開けたものと想定する。

(2) 弥生時代後期の土器

壺A-2 (2・5~17)

口径は復元数値による限り、最少12.5cm~最大20.0cmとなるが、これは12cm台・14~17cm・18~20cmの3群に区分でき、器高もこれに相対するであろう。ちなみに、復元口径18.5cmを測る(17)は、器高を27.9cm程と推定し

ている。

口頭部の形状は、頭部を短く外反させ、それに付く口縁部は屈曲して外反気味に短く立ち上るもの、屈曲度はA-1のものよりは緩く、外面下端の稜線は鈍い。口端部は僅かに外方に拡張するものも見られ、水平ないし若干内傾した面で截然と切り揃える。体部の形態は、全容の知れる例に見ると、胸部最大径部が頭から1/3～2/5程の部位にあって、体部下半は薄い平底に向ってすぼまる。

器壁の調整を観察すると、口縁部は例外なく丁寧なヨコナデでハケ調整を消すが、頭部以下は体部外面を右下り又は水平方向の粗いハケ調整し、内面は下半部を下から左上り方向の、更に体部上半から頭部では横方向のハケ調整が基本となる。装飾的に見ると、口縁外面には右上り列点文・刺突文を施すものが主流であるが、中には左上りも(8)散見できた。これは、土器製作者の利腕の差異によるものか。また、頭部から肩部にかけては、無装飾のものも少數あるが、量的には櫛描き横線文・波状文を施し、又は刺突文を加飾したもののが主流をなす。胎土は、石英・長石・クサリ礫等の砂粒を多く含有し、淡黄灰色～淡茶褐色を呈していた。

なお、(6)は1号方形周溝墓西周溝から出土したものである。

甕A-3 (18・19)

口頭部や体部の形状では、A-2のものと大差を見い出すことができず、同型式といえる。反面、底部は平底とならず、所謂脚台の付く甕である。この脚台の形状にも若干の差が存在する。(19)は比較的に高い脚台が付き、底部との接合手法を観ると、脚台と体部下半とを分離成形し、更に粘土の円盤を充填することで底部を構成していた。一方、(18)はこれと異り、平底状に作った底部にやや低く「ハ」字形に開いた脚台を一気に付加する。

口径は(18)が14.3cm・(19)が17.2cmに復元し、器高は(19)で21.0cm程度であろう。胎土や色調はA-2と大差ない。

甕A-4 (20～28)

この甕A-4としたものをA-2のものと比較する時、口縁部の立ち上りは一段と鈍化が進行し、逆「S」字状に近いものさえ出現する。また、端部の仕上げ方も、肥厚するものは全く見られず、單に丸く納めたものが主流となっている。一方、装飾技法はA-2に比して、口縁外面が無文となるもの(22・25)も存在するが、基本的に口縁部か肩部のいずれかに、あるいは両者に櫛状工具を多様に活用した刺突文・列点文・横線文・波状文等を加飾している。口径的にも、A-2の口径分布に近い傾向にある。なお、復元口径14cm前後の(21・22)は、他に比して体部の張りが貧弱であり、器種的には別種として扱うべきものかも知れない。胎土・色調や器壁調整手法は、A-2に準ずる。

甕A-5 (29～34)

口頭部の形状や肩部の張り具合、更に口径による大小の差異などは、(34)を除いてA-2と同型式のものと処理しうる。A-2との最大の相異点は、口縁部や肩部の装飾性が失われ、全く無文化した点にある。

(34)は、今回の調査で出土した甕型土器の中にあっては、最大級の口径を保有するもので、肩部の強い張り出し方などもあって、異質な感じを受ける。口縁部の形状も「受口状」と形容すべきが躊躇する。胎土や調整手法も、基本的にはA-2に準ずる。

甕C (35)

Cとしたものは1点のみである。短く外反気味に聞く頭部に、やや屈曲し外側に鈍い稜線をなして直立した口縁部を付ける。口縁の外面には、3条の浅い櫛描き擬凹線を巡らせ、また、やや張った肩部には口縁部のものと同一原体による横線を施し、更にその下端に刺突文を加えている。器表の調整手法については不明であるが、器

壁が4mm以下の薄手である点、注意が喚起される。

この變型土器は、口縁部に擬四線文帯を作るなど、当該期の北陸地方の土器様式の影響を受けつつも、在地的な特徴も窺えるなど、その成立過程は示唆に豊んだものといえる。胎土は變A群に類似するが、淡茶灰色を呈す。

變D (36)

これも1個体分出土した。体部は球体に近く、細くすばんだ頸部から強く外反し、口縁部は扁曲して縦線を成して短く直立した形態をとる。この口縁部の外面にも、数条の浅い擬四線を施していた。しかし、この擬四線は變Cのものとは異り、むしろ横線文と呼べるものである。体部外面は、胴部最大径部までを3段に分けて縦方向のハケ調整し、内部は横方向のハケ調整であるが、頸部下端は指腹によるナデツケが施される。器壁は概して厚手に仕上り、胎土は特に精選された粘土を使用して淡黄褐色を呈し、焼成も他の變型土器に比較してより硬質であった。復元口径16.0cm。

變E-1 (38・39)

變Eとしたものは、口縁部が概して「く」字形に外反した變であるが、細部の差異によって更に3類に分ける。E-1は、頸部から単純に短く外反させただけのもので、口端部は単に丸く納める。しかし、器壁調整を見るに精粗の差に気付く。(39)は体部のハケ調整は細密で、口縁部のヨコナデ調整も入念に施すなど、全体的に丁寧な作りであるのに対し、(38)は口縁部の折り返しも雑であり、体部や口縁部に残るハケ調整も粗略なハケ原体を使用した稚拙な作りとなっている。

變E-2 (42)

E-1に比較して、口縁部はより大きく外反度も強い。口端部も肥厚することなく、端部上下を強くヨコナデすることでやや凹ませる。胎土には1~3mm大の砂粒を多く均一に含み、色調もやや白っぽい淡黄灰色を呈する。

變E-3 (43)

口縁部の形態は、前二者に比して更に屈曲度が強く、頸部内面に棱が出る。また、口縁部は上下に若干肥厚されることで外面を作り出す。体部は縦方向の細いハケ調整。

變F (40)

形的には變Eの範疇に入るものであるが、ここでは独立して扱う。短く外反した口縁部で、その端部は肥厚して外方に拡張し、体部も胴張りのある倒卵形となろう。口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げ、体部外面は右下り、内面右上り方向の細密なハケ調整で沿壁を搔き削り、厚さ3~4mmまで薄く仕上げていた。肩部には、ハケ調整原体による緩慢な波状の横線を一巡させる。これは、山陰地方の土器様式に系譜を辿るこののできるものとして、当該期の広汎な土器様式の伝播経路を知る上で貴重な事例と言えよう。

口径は14.2cmに復元したもので、胎土は石英や長石等の砂粒を少量含むが大略精良であり、色調は淡茶褐色を呈していた。

變B-2 (54~57)

弥生時代中・後期に盛行した長頸壺の系統にあっては、最も種少化と粗雑化が著しいものである。口縁部はほとんど直立から若干外に反って伸び、その頸の長さは器高全体の1/3程度となろう。口縁部の外縁は、強いヨコナデを加えることで端部を整え、その先端は截然たる面で切り揃えるもの(57)と尖るもの(54・55)がある。体部は、口縁よりも僅かに膨らんだ程度の小さいもので、不整な長脚を呈し、それに小さな平底が付く。

器壁の調整は、全面にわたって粗いハケ調整で終始する。胎土や色調は、變A類のものと比較して若干砂粒が減少する以外は大差はない。

壺B-3 (58)

口径9.5cm・器高25.3cmを測る。この壺は、長頸壺とするには若干の躊躇を感じるほど、体部に比して口頭部はさほど長くなく、器高に占める頭の長さは1/4以下である。口頭部は直立に伸び、口端部は指ナデによって僅に内側に肥厚させて丸く納めている。これは、ピッチャーとしての使用上の液切れを配慮しての意匠と見られる。体部は最大径を胴部中位に保ち、丸味を帯びた胴長のもので、底部はやや安定感のある偏平な平底へと続く。

整形手法としては、口縁部外面はヨコナデ調整し、頭部以下の外面は3~4段に分割して右下りのハケ調整。一方、内側は基本的には横方向のハケ調整である。胎土は僅かに砂粒を含有するものの大概精緻で、淡紅褐色を呈す。

壺C (44・45)

細くそばまた頭部から、「く」字形に屈曲して短く直線的に開いた口縁部を作り、その先端を上下に若干拡張させることで小さな外顔を作り出す。体部は、偏球形に膨らんだものとなろう。器壁調整は、体部をハケ調整。胎土は細砂を多く含むものの概して均質で、淡灰褐色~灰白色を呈す。

これは、今津町弘川B遺跡竪穴住居4の同種の壺と比較した場合、口端部の外面が縮少化し、加えて器壁の調整もヘラ磨きを省略するなど、全体的に粗雑化傾向にあるといえる。

壺D (46)

この壺は、所謂「二重口縁壺」の範疇に属するものである。大きく開いた頭部に、擬口縁をなして更に大きく外反して聞く口縁部を接合する。擬口縁の下端は、垂下した段を作り、また口端部も単に丸く納めたものではなく、やや角張る。器壁は、横方位のヘラ磨きを細密に施することで丁寧に仕上げられ、精成された壺といえよう。口徑は21.0cm程に復元し、胎土には石英・長石・クサリ礫等の砂粒をやや多く含んで、色調も淡赤褐色を呈す。

壺E (47)

口縁部の小片が出土した。頭部が徐々に外反して逆「ハ」字形に開き、口縁部で急速に弯曲してその先端は垂下気味となる。口端部は鈍い面を成して、竹管文を6~8mm間隔で加飾していた。また、頭部の付け根に断面方形の細い粘土紐を貼り付けて突帯とし、その上面と側面に細密な刺突文を加える。

口頭部の外表面には、ハケ原体の板状工具を粗くナデ付けて整形している。これも精成された壺と呼べるものであり、胎土は特に精選された粘土を使い、淡紅褐色を呈す。

壺F (49)

細片である。復元口徑10.5cmを測る小口徑の壺で、口頭部は直立から緩く外弯した短い形状をとる。

壺G (50)

これも口縁部の少片であり、復元口徑には疑問が残る。形態的には、壺A-5としたものに類似するが、口縁部の開きが大きく、頭部も長い感を受ける。

壺H (51)

これも口縁部の少片が1点出土したのみである。復元口徑14.9cmを測り、頭部から内弯しながら垂直に立つ口縁部で、端部を鋭く切る。頭部には、粘土紐で断面方形の突帯を貼り付け、それへ大き目の刺突文を加えていた。体部は偏平で胴部の強く張った器形となろう。

壺I (52)

全体的なプロポーションを見れば、算盤玉状に近い体部に、よく引き締まった頭部から、短く外反して開いた小さい口頭部を付けている。口端部は欠落して不詳。底部も強くそぼまり、小さな平底の中央は円盤を充填して形

形した底部とは異り、その中央は凹む。

胸部の中央位に、3~4cmの間隔をおいて幅6cm程の粘土紐を2条貼付し、それに3~5m等間で大き目の刻み目を施す。また、その突端の上端に接して、縦方向に3cm程の櫛描き横線を5方に加えて胸部を一巡している。更に、頸部下端から肩部にかけて、右上り列点文を二段に配置し、その中间には列点文と同一工具によるらしい櫛描き横線文を巡らす。煩雑なまでに装飾された壺で、同意匠の文様は同期の「受口状口縁壺」に通有に認められるものである。

なお、器壁の調整は、体部外面では肩部を横方向に施す以外は縦方向に数段に分割してハケ調整し、内面は基本的に右上りのハケ調整とするが、頸部付近は指ナデによって整えている。(1)頸部も、体部の調整の延長上にある。また、部分的に違う粘土紐の接合痕から、この壺の体部は10段ほどの粘土紐積み上げによつたらしい。胎土は、石英・長石等の砂粒を多く含むもので、色調は淡黄灰色。

壺J (53)

口径14.0cm・器高22.4cmを測り、容積は頸部までとして約4.5ℓである。全体的に見れば、壺1に近似するが、器高が低い反面、頸部が太く、総体的に厚手作りである。口縁部は、単に「く」字形に反って短く、口端部は丸く納めている。また、底部は凹底風の平底。

この壺は装飾性が貧弱で、文様と呼べるかは疑問であるが、頸部下端に2~0.5cmの不等間隔で左上りのヘラによるカキ目が見られる程度である。体部内面は基本的に壺1と同じであり、外面は肩部を除いて右下りの縦方向ハケ調整を3~4段に分けて施す。肩部にハケ調整が見られないのは、指ナデによるのか土器使用による磨耗かは断じ得ない。口縁部は入念なヨコナデ調整で、胎土は壺1と同じ。3号方形周溝器の周溝に供献されていた。

壺K (60・61)

細頸壺であり、伊勢湾岸周辺地域の欠山式土器の影響下に成立したものであろう。口縁部は細く縮まり、口縁部で内弯しながら膨らむ。体部は、胸部最大径を極めて低い位置に置いたもので、肩部からゆったりと張った腰は、屈折して急激に底部へとすぼまる。

成形や調整の手順を復元すれば、まず、腰部以下を成形し、その外表面を入念にヘラ磨きをした後に、体部上半を積み上げる。その際、外面は下半部同様にヘラ磨きとするが、内面は細密なハケ調整と簡略化している。(61)は、腰部の屈折はないが、大きく張り出す点に変りはない。しかし、ヘラ磨きの範囲を胸部上半部に限定している。共に、胎土は特に精選された粘土を用いている。

壺L (70)

口径8.2cm器高8.0cmの小型壺。偏球体の体部に、「く」字形に屈曲して開いた短い口縁部を付ける。底部は偏平な平底で、中心は凹む。全体をハケ調整で整えたもので、口縁部のみはヨコナデ。胎土には、1mm以下の細砂を多く含んでいる。

鉢B (62~68)

俗に「扁平壺」とも称されるものである。(1)頸部の形状は壺A-4に類似し、また、装飾文様帶も同一意匠によつている。したがって、口縁部だけの細片では、両者を識別するのに困惑をきたす。反面、体部はその名が示す通り極めて偏平なもので、口径と同等かそれより若干凌駕する程度に張り出した腰部は、その最大径を過ぎると急激にすぼまり、径2~3cm程の凹底風からわずかに存在を意識した程度の平底の底までへと続く。したがって、体部に内容物を納めなければ、姿勢を保持できないのではないかとさえ危惧される。

口径は、15cm前後のものと18cm級のものに分かれ、胎土や色調も概して壺A-4に類似する。

鉢C (69)

この鉢は、所謂「ワイングラス型」のもので、これも伊勢湾岸周辺地域の欠山式土器に認められる器種である。鉢部は、当該期の高環Bと同じ技法、すなわち脚部との接合法を円盤充填法によって成形された底部に、「く」字形に鋭角的に折れ曲って直線的に内傾した口縁部を貼り付ける。口端部は単に丸く仕上げるのみであり、視覚的に訴える鉢部外面は、丁寧な縦ヘラ磨きで整えるのに反して、内面はハケ調整を指ナデで軽く消す程度である。脚部は欠落して不明。胎土は、精選された粘土を用いて淡灰黄色を呈す。

鉢D (71)

復元口径12.6cmを測る小型鉢。小さな体部と、「く」字状に屈折して開き弯曲する短い口縁部から成る。体部外面はハケ調整で、内側及び口縁部はヨコナデ調整。この種の鉢は、後に出現する「小型丸底盃」と一線を画するものと考える。

高環B-1 (88~98・100)

高環B類は量的には高環型土器の中心を占めるものであるが、环部や脚柱部にはおのおの形態上の差異が存在し、数類に細分可能である。しかし、全容の知れる個体が少ないために、ここでは环部と脚柱部を分離して説明せざるを得ない。

高環B-1の环部は、底部が浅く弓曲したもので、一旦擬口縁を作り、更に大きく外反して伸長する口縁部を接合している。この接合面は、意識的に明瞭な段として残し、断面三角形を呈するものが多い。また、口縁端部は、単に丸く納めるもの(92~98・100)と、端部を垂下させて外面を作るもの(88~91)とが認められた。环部の口径は、復元数値ではあるが、13.7cmの小型品(88)と24.3cmの大型品(100)を除外すると、ほぼ19~22cmの間に納まる。

高環B-2 (99・101)

B-1との相異点は、环部擬口縁の外周にB-1で認められた段を更に拡大することで、垂下したシャープな突帯を付けた点にある。

以上、高環B-1・2の环部整形手法は、基本的にはハケ調整で粗く調えた後、丁寧な縦ヘラ磨きで平滑に仕上げている。

高環B-3 (100~100)

脚柱部は筒状を取り、裾部で大きく外反してほとんど水平に近くなるもの(100・100)と、裾部の外反度がより弱く、ラッパ状に開いた形態(101・105・106)がある。端部の処理は、丸く納めた例(105・106)と截然と切り替えたもの(100・102)が見られた。しかし、この端部処理と脚部との相互関係は、判然としない。なお、脚柱部には、円孔を3~4方に穿つのが基本であるが、円孔を省略するもの(101)もある。脚部の調整も、环部同様に入念にヘラ磨きで仕上げる。

以上、高環B類は、概して石英や長石等の砂粒を多少とも含有しており、色調も淡黄灰色~淡紅褐色を呈している。

高環C (107)

环部を欠き、全容は不明。脚部は高環Bのように筒状とならず、挿入法によって接合された基部から外反しつつ「ハ」字形に開脚したもの。脚部中程に円孔を3方に穿つ。脚部調整は高環Bと異なり、細密なハケ調整を施すのみでヘラ磨きの工程を省略する。

高環D (109)

所謂「装飾高環」の一種であろう。脚部のみ出土した。筒状となるであろう脚柱部から、大きく「ハ」字形

に開いた裾部に、これより断面三角形の棱線をなした段から一層強く外反して聞く形態となる。この成形技法は、高环B环部の技法を転用したものといえる。なお、棱線の下端には5方に円孔を穿つ。裾端部は截然たる面で構える。入念なヘラ磨きを施す点も、高环B环部に共通する。

高环E (108・110・122)

(110)は口径20.6cmに復元したもので、平坦な环底部から屈曲して内弯気味に開いた深目の环部である。II縁部は単純に丸く納めただけのもので、その内面に凹線文帯は見られない。环部内外面は、細密なヘラ磨きによる。

(108)は「小型高环」の脚部で、平坦な环底部に挿入法で接続された脚部は偏平な感じを受け、基部から大きく開いた裾部は、その先端で一転して内弯気味に終る。裾部に3方の円孔を穿つ。また、脚基部の内面、すなわち环底面中央には、鋭角的な細い棒によって刺突された小さな凹みが見られた。これは、土器乾燥方法に起因するものか。

(122)は、エンタシス柱に近いプロポーションを持つ脚柱部である。丁寧なヘラ磨き調整のうち、3段に分けて櫛描き横線文を巡らせ、更に同じ工具による列点文を配す。胎上は、高环Bに比較すれば特に精緻した粘土を使用したことを見わせる。

高环F (120・121)

これも「小型高环」の範疇に捉えられるものである。环部は欠落しているので、塊状となるか高环Eの(110)环部に類したものか判じ得ない。环部と脚との接合は、高环Bで見られた円錐充填法とは異り、挿入法によっている。このことは、より新しい技法がまず小型の器種から採用されたことを物語るものといえよう。脚基部は細く、これより大きく外反して「ハ」字形に開いた裾部は、その端部で截然とした面で終り、基部近くに円孔が3方に穿たれる。脚部の調整は、2~3段に分けて丁寧にヘラ磨きをかける。

器台 (113~119)

太目の円筒形容部を挟んで、その上部、すなわち受部は胴部より「く」字に屈曲して、直線的に聞く。受部の先端は、細い粘土縁を貼付して断面三角形に垂下させるが、中には1cm近い大きいものもあり、これによって外面を作り出す。この外面には、櫛描きの波状文を加えるもの(113)も見られた。一方、胴部の下方では、大きく外反した裾部となって、その端部は受部ほどではないにしても、若干肥厚して鈍い面を作っている。胴部には、例外なく円孔を穿っており、その配置方法も、胴部下位に4方(117)・胴部に二段に4方(118)・上段に2方と下段に3方のもの(119)など、変化が認められる。受部の口径は16~18cmに納り、器高もほぼ一定である。

器壁の調査を見ると、受部と脚部外面は基本的にヘラ磨きで仕上げ、脚部内側はハケ調整。胎上や色調は、高环B類と同じである。

土鍤 (87)

長さ3.6cmで最大径2.1cmを測る、円柱状の土鍤で重量は約25g。全体を手づくねで成形し、径8mmの孔が開く。

(3)、平安時代後期の土器

灰釉陶器小塊 (123)

II径13.0cm・器高3.7cm・高台径6.6cmに復元した小型塊である。高台は、偏平化した丸味の残る逆台形断面で、体部の塊型は浅い。口縁部は強いヨコナデを施すことで外反気味に仕上げていた。底部は糸切りの後、高台貼付時にヨコナデを施す。胎上は精良であるが、灰釉はほとんど見られない。

灰釉陶器中塊 (124~126)

(124)のII縁部は浅い塊状で、口縁部は強いヨコナデで短く外反する。(125・126)の高台は、「ハ」字形に開いた

比較的高いものである。(124・126)にはほとんど灰釉が見られず、(125)の施釉は漬け掛けによっていた。胎土は精良で、器表に微黒斑を含まない。

灰釉陶器大塊 (127)

高台径を復元すれば10.3cmほどとなる。高台は比較的高いもので垂直に立ち上る。胎土や色調は巾塊と同じ。山茶境皿 (128)

口径9.8cm・器高2.0cm・高台径5.4cmを測る。体部は僅かに弓曲しただけの極めて浅いもので、幅の広い三角高台は低く、並んで接合される。胎土はやや粗く、淡灰色を呈し、薄い灰釉が口縁部内面に見られる。

山茶境 (129・130)

(129)は、底部を除いて比較的薄手に仕上り、浅い塊状の体部からややカーブして口縁部へと続く。三角高台はやや外に張り出で、先端は丸い。胎土は細砂質の粘土を使用し、灰色を呈して無釉。なお、この塊の底面に「穴」の墨書きが見られる。

(130)は厚ぼったい底部で、高台は非常に低い方形断面のもの。無釉で、胎土は細砂質。

〔木 器〕

梯子 (131)

全長186cmを測り、幅18cm・厚さ9cmほどの樹木中心部の角材から削り出して作った梯子で、26~29cm単位で6段の足掛りを削り出し足掛りの奥行は5cm程度であった。梯子の基部はやや不整であるが、上端部は截然と切り揃えられていた。しかし、建物に接続・固定するための枘や枘穴は見られない。樹種は針葉樹と思われる。

杓状木製品 (132)

幅5.2cm・厚さ0.5cmほどの薄板の一端を両側から削り込んで三角形とし、他の一端も幅25cmの柄を削り出している。全長22.0cmを測る。

用途不明木製品 (133)

これは、幅3.0cm・厚さ2.3cmの棒材の一端を残して、片面を両角から削り込んで断面台形とし、削り残した部分を龜頭状にしている。

棒状木製品 (134~136)

幅2.0cm・厚さ1.5~2.0cm前後の棒材の一端を粗く削り込んだもので、用途は不明。二次的な痕跡として、(135~136)は部分的に焼けていた。

註

①山崎秀二「下之郷遺跡発掘調査概報」守山市文化財調査報告書第20号 守山市教育委員会 1986

②肩部の緩慢な波状の横線（やや粗い横位の回転スリナメ【A a 技法】）を、寺沢薫氏は出現期の布留形甕（O式布留形甕）の属性と捉え、これを「山陰形甕」からの技術的影響と考えている。

寺沢薫ほか『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第四十九号 奈良県立橿原考古学研究所 1986

③山口順子・兼藤保明「高島郡今津町弘川遺跡」伊賀祭備関係遺跡発掘調査報告書第1-3 滋賀県教育委員会 1981

ホ. お わ り に

当遺跡から弥生時代の遺物の出土することは、虎姫小学校の増改築のおりに、多量の土器類が出土していることにより周知されていたが、遺物の出土状況や遺跡の性格などについては不明であった。今回の調査では、遺跡が小学校の北200m以上に及ぶこと、また、東西にも大きく伸びることが判明した。特に、小学校より北部から東部

にかけてに方形周溝墓が検出され、当遺跡の墓域の位置が明らかになったことは大きな成果であった。集落が小学校の周辺に存在したであろうことは、遺物の包含層が小学校に隣接する地域で検出され、その包含層から梯子が出土したことからもうなげけるところであろう。調査はほ場整備工事における排水路計画部分に限ったものであり、とうてい遺跡の全容を明らかにするものではなかったが、今後の当遺跡の調査についての出発点となるものと考える。

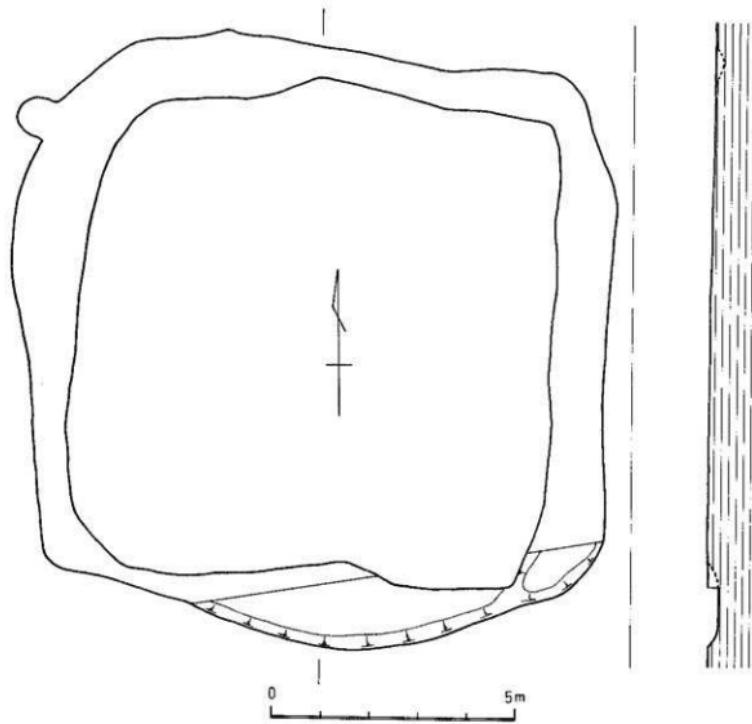


圖3 五村遺跡1號方形周溝墓窯測圖

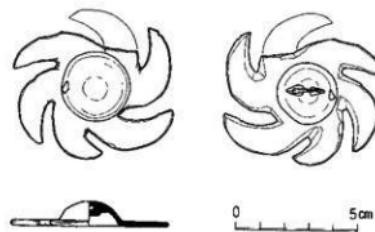


圖5 五村遺跡出土巴形銅韁測圖

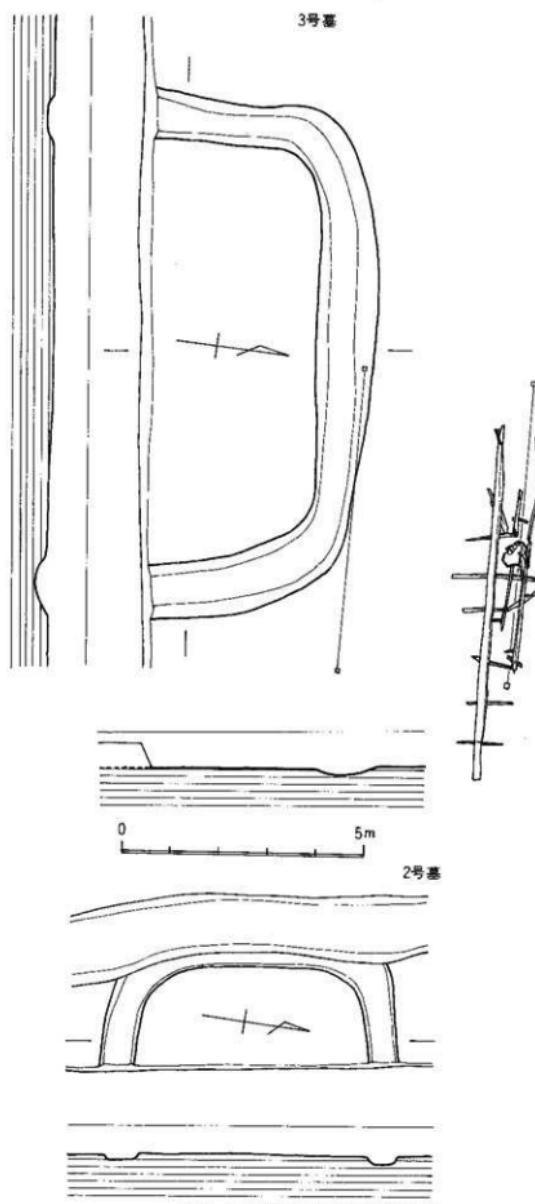


图4 五村遗址2·3号方形周溝墓实测图

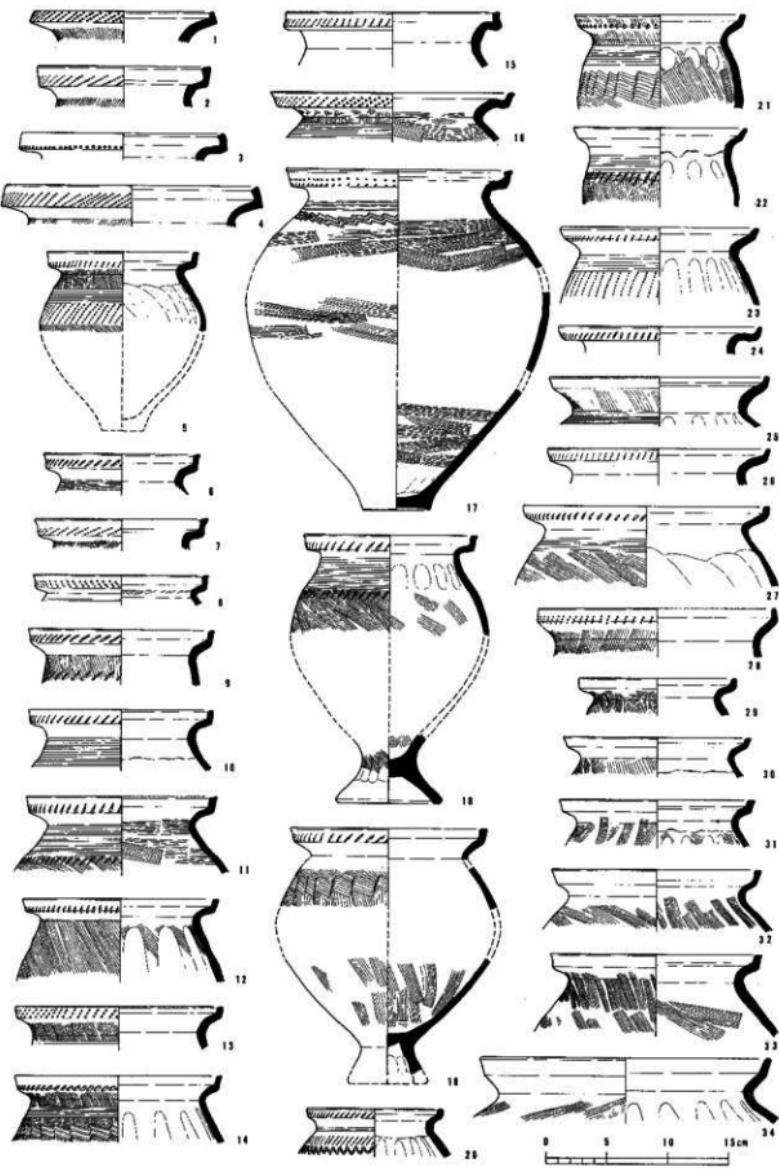


图6 五村遗址出土土器实测图(1)

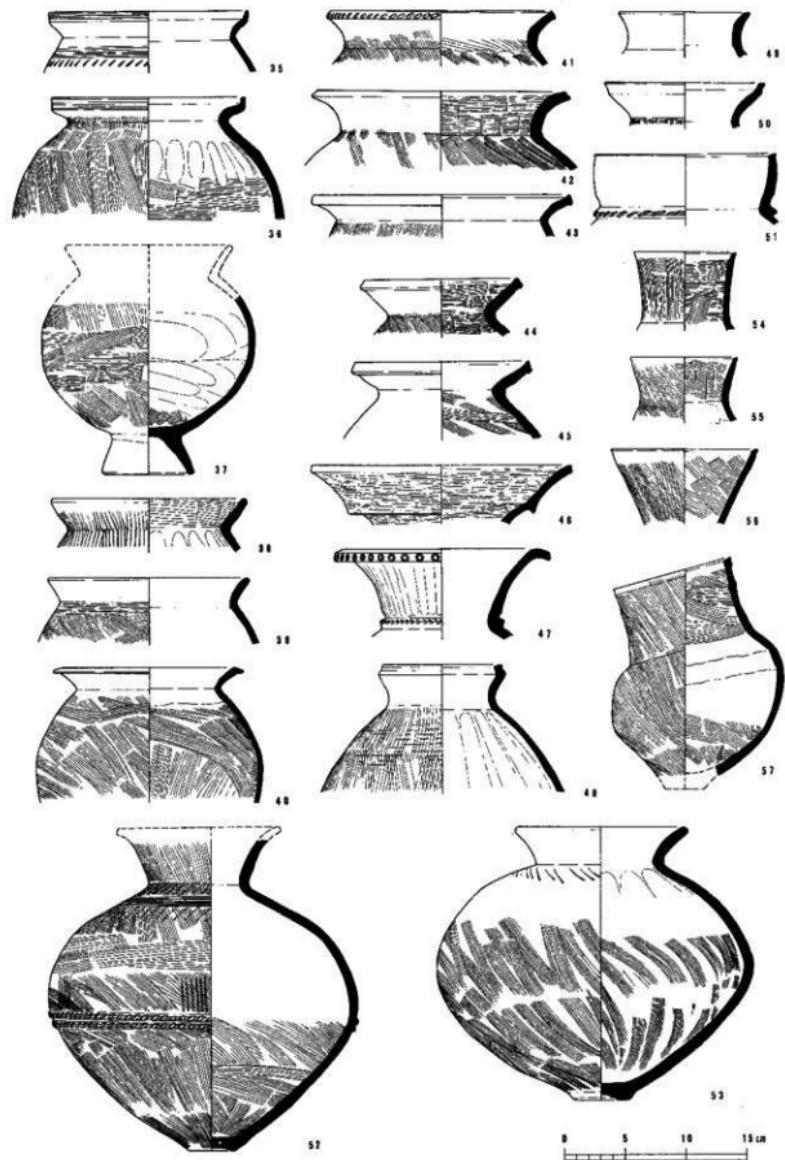


図7 五村遺跡出土土器実測図(2)

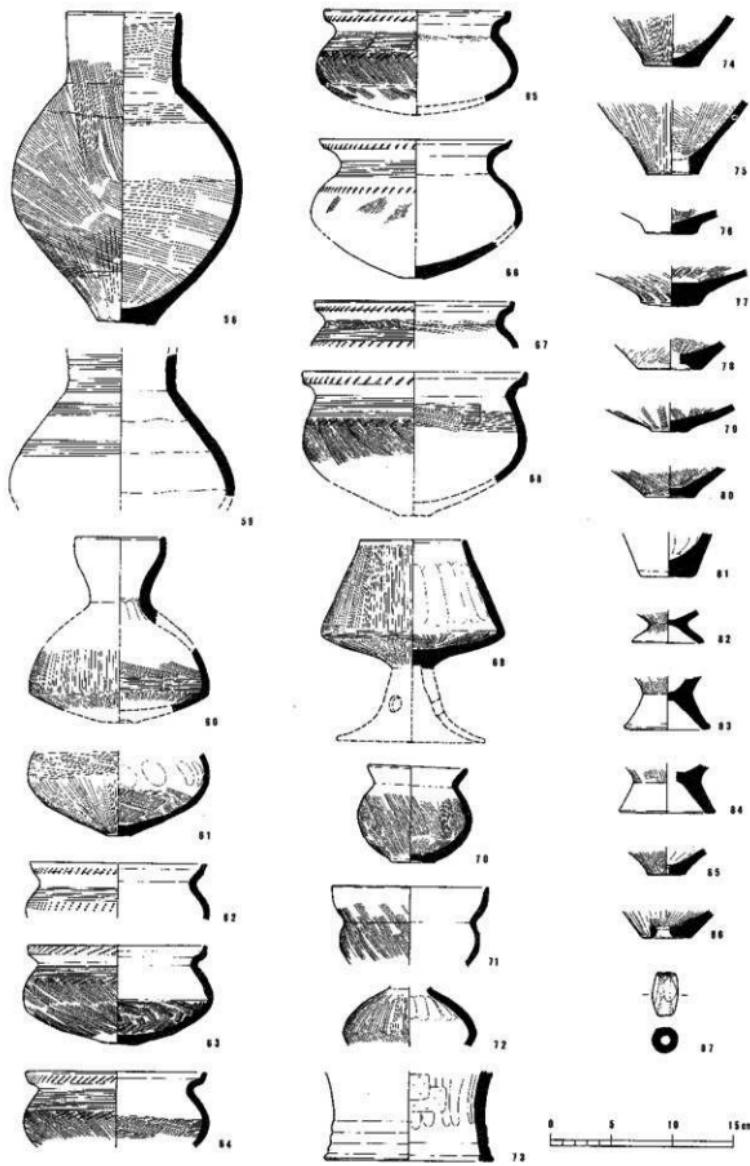


図8 五村遺跡出土土器実測図(3)

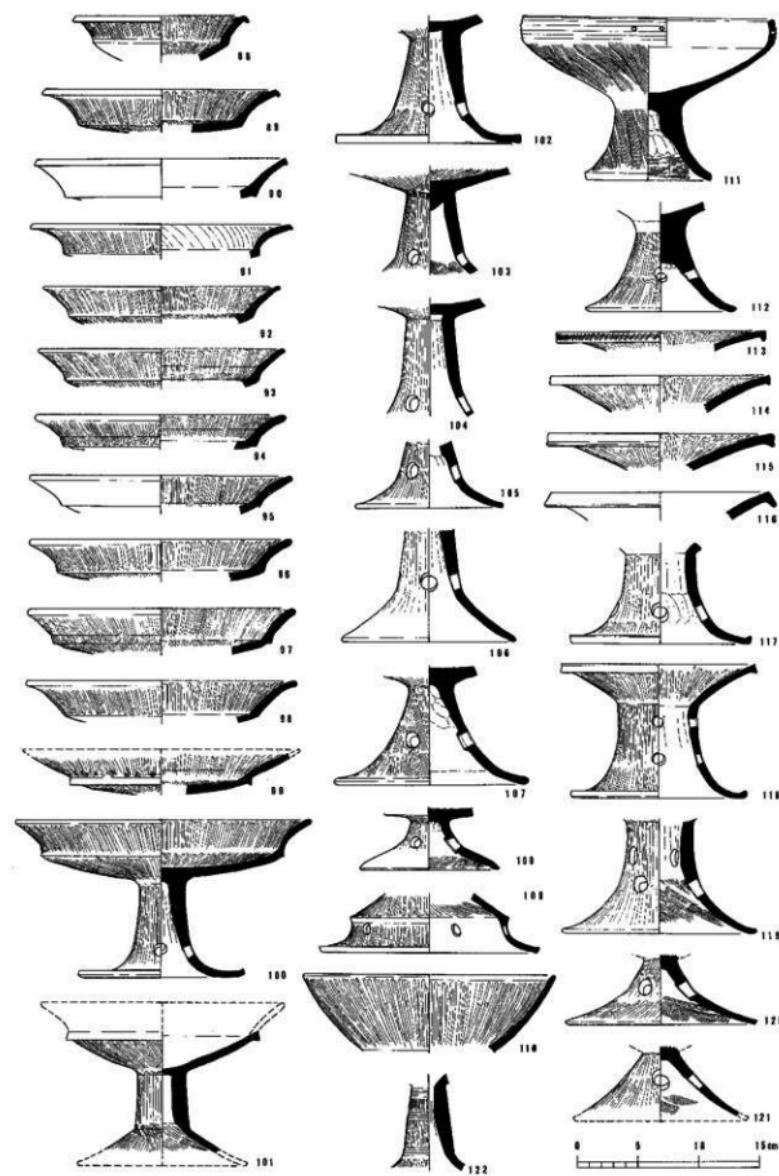


图9 五村遗址出土土器实测图(4)

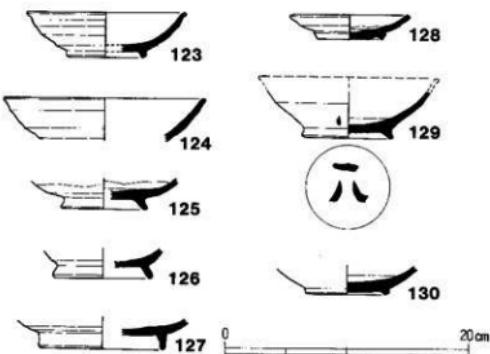


図10 五村遺跡出土土器実測図(5)

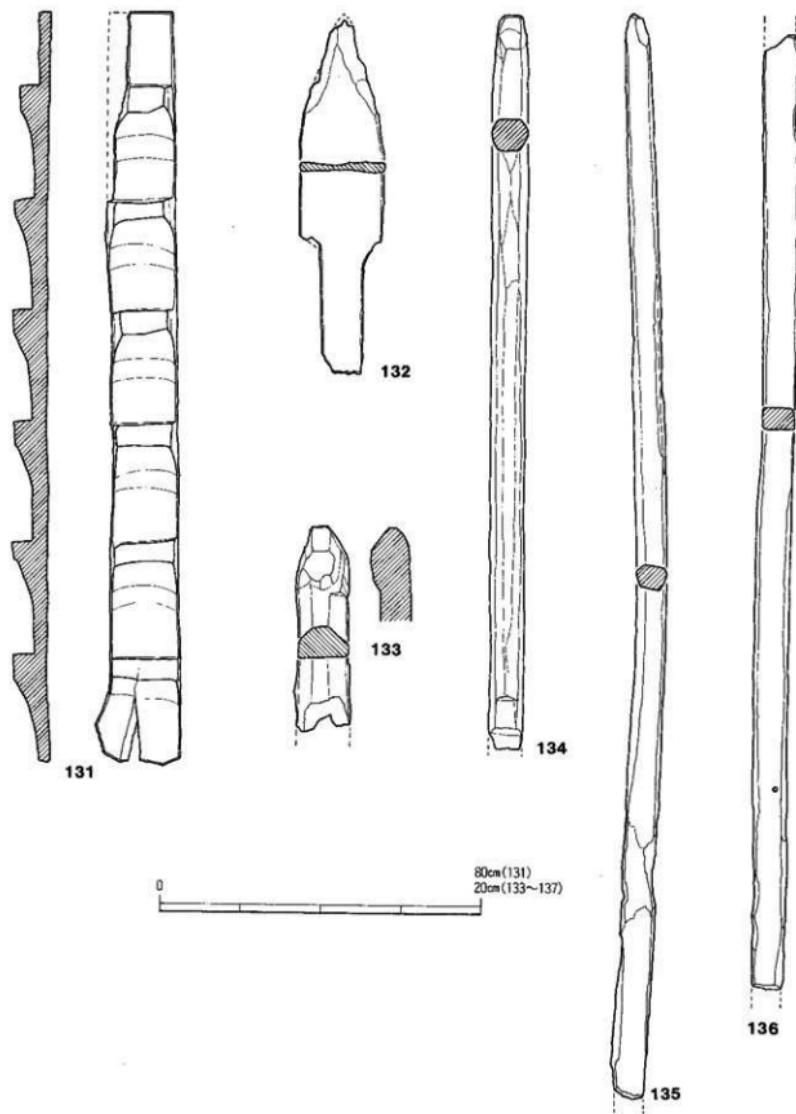
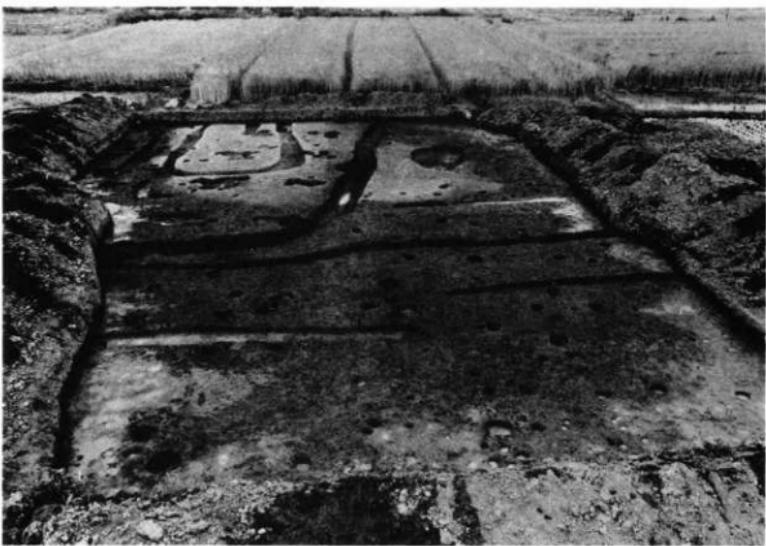


図11 五村遺跡出土木製品実測図

8. おわりに

今回の調査では、弥生時代前期から室町時代の集落跡、墓跡、屋敷跡等各時期、各種の遺跡を調査するところとなった。急ぎ取りまとめたものであり、充実したものとはなっていないが、調査成果については、有意義なものが多々あった。今後の研究資料として活用していただければ幸いである。

図 版



1 遺跡全景（発掘後、北より）



2 SK!



1 C区近景



2 C区堆塙出土狀態



1 C区大型土壤群



2 C区中央部近景



1 東部地区遺跡近景



2 東部地区 B区全景 (西より)



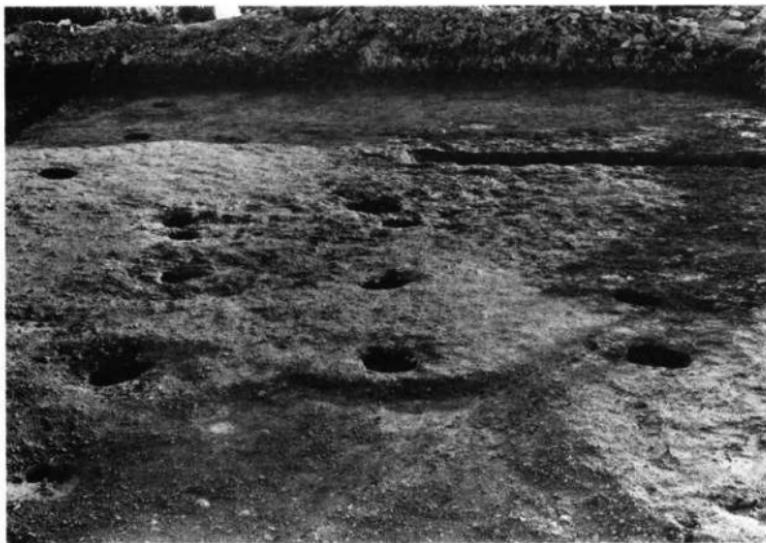
1 東部地区 S B 1 (北より)



2 東部地区 S B 2 (北より)



1 東部地区 S B 3 (東より)



2 東部地区 S B 4 (南より)



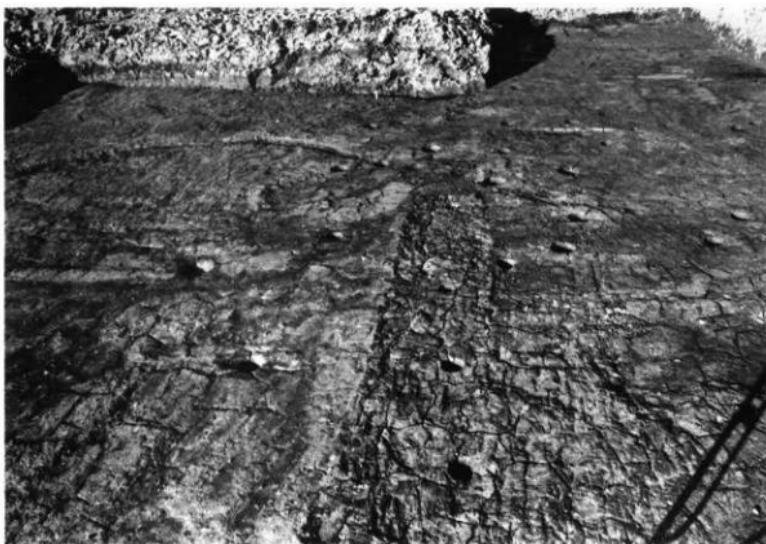
1 東部地区 S B 5 (南西より)



2 東部地区 S B 6 (北より)



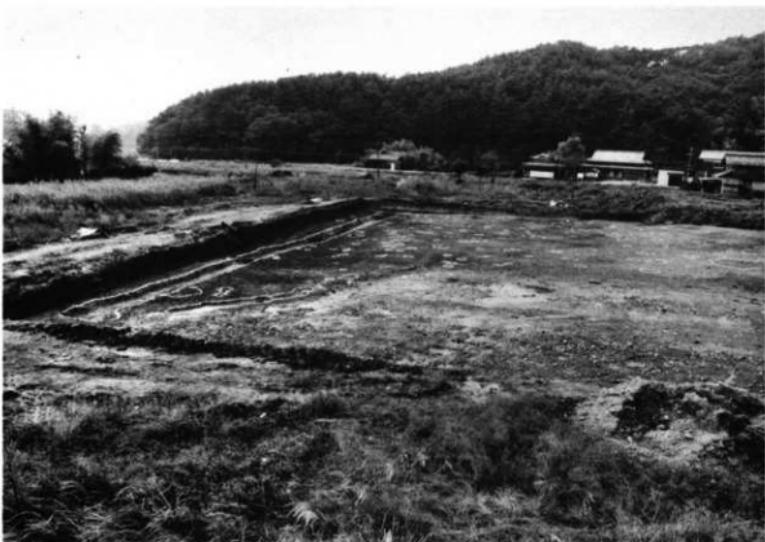
1 東部地区 S B 7 (西より)



2 東部地区 S B 8 (西より)



1 西部地区 L・Mトレンチ全景 (発掘後)



2 西部地区 L・Mトレンチ部分



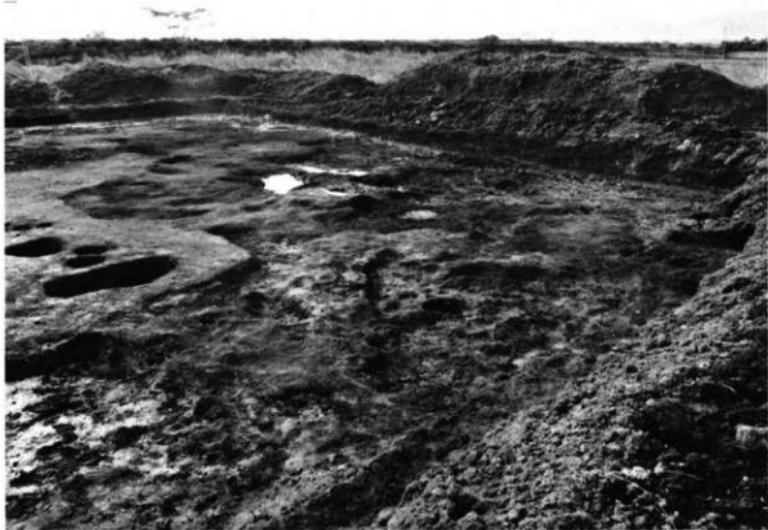
1 西部地区遺物出土状態



2 西部地区元天神区



1 堀大屋敷地区全景(発掘後)



2 堀大屋敷地区落込み状遺構



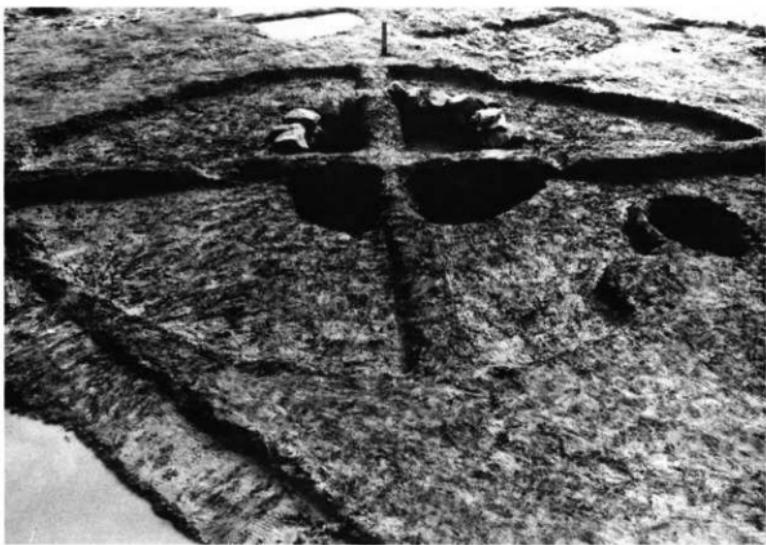
1 堀大屋敷地区大型土壙群



2 堀大屋敷地区ピット群



1 松橋地区全景(発掘後)



2 松橋地区井戸跡



1 松橋地區D9·D11



2 松橋地區D9



1 松橋地區 D11



2 松橋地區 D 5



1 松檣地區M 4



2 松檣地區D 19



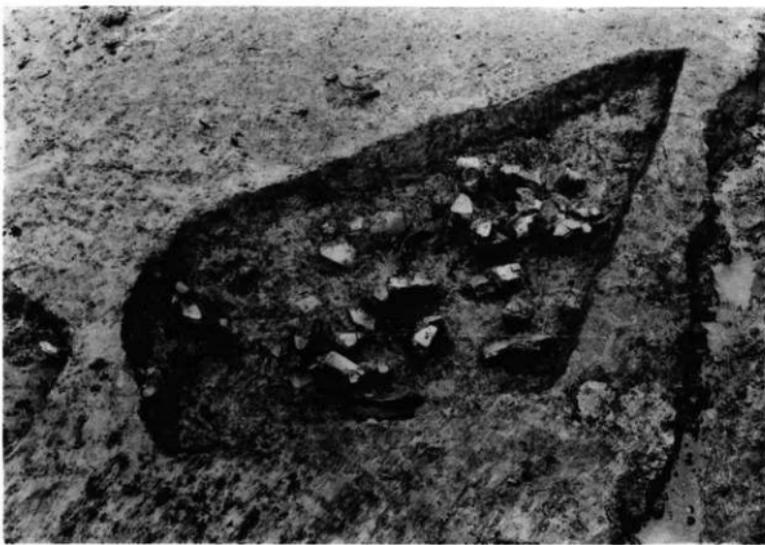
1 松橋地區 D14



2 松橋地區 D 4



1 松橋地區 D10

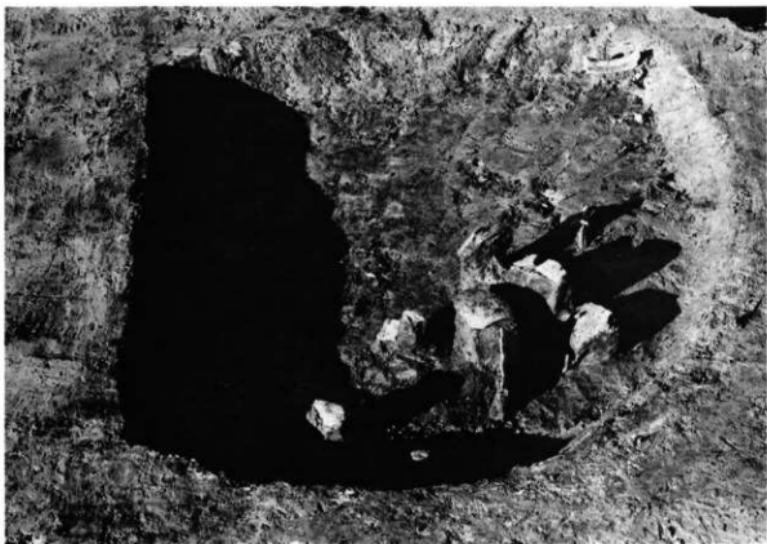


2 松橋地區 D8

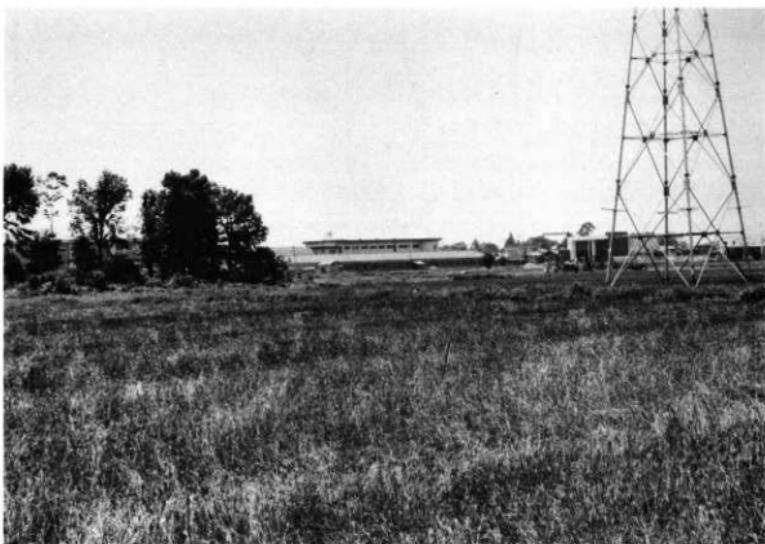
圖版一九 留目遺跡



1 松橋地區D17·D21



2 松橋地區D 7



1 遺跡遠景



2 1号方形周溝墓



1 2号方形周溝墓



2 3号方形周溝墓



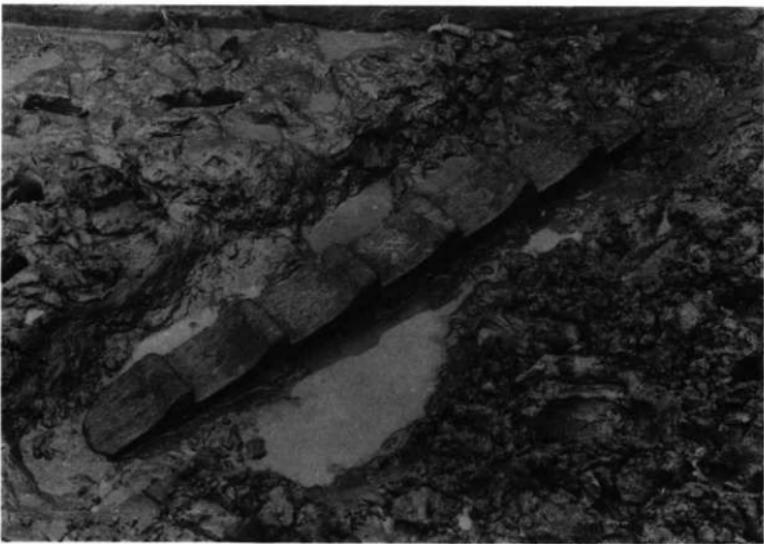
1 2号方形周溝墓



2 土器出土狀態



1 巴形銅器出土狀態



2 梯子出土狀態

刊行年月 昭和55年3月
刊行物名 ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-3
編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1-1
電話 0775-24-1121
(財)滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話 0775-48-9781
印刷所 勝利書同朋會
京都市下京区中堂寺鍵田町2